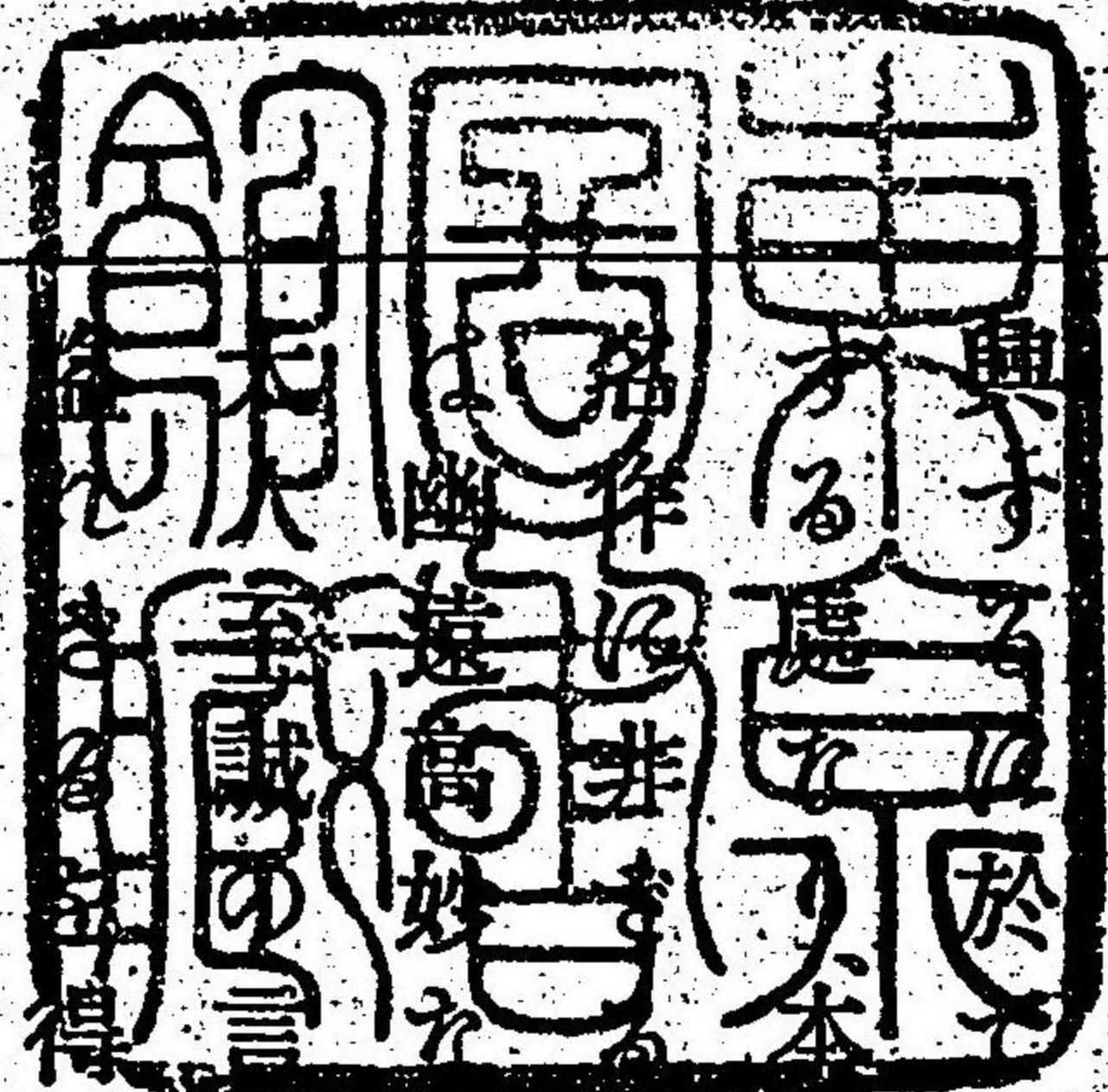


序



夫れ説教は歐米徳教の華なり、人心を感發し風俗を

興するに於て、與つて大に力あるとは夙に公論の認識

する處なり、本編譯述するものゝ如き一として大家の

はなし、其言は卑近平易なりと雖も、其旨

り、皆な是れ肺肝を衝きて湧き出てたる

なり、之を讀む者誰れか、敬畏尊崇の情に

溢れざるを得んや、

我邦近年頻りに基督教徳化の恩澤を蒙る、説教の如き

亦た大に見るべきものあり、然れども歲月の淺き説教

文學と稱すべきもの殆んどあるなし、先年「反響」雜誌な



should be as unlike as possible to other national types.

This is a grave error. Every man who is born is born into society, and lives in perpetual contact with other men. By this intercourse of man with man his powers are stimulated, but at the same time his peculiarities are diminished. In both ways he is benefitted. He is a better man because his powers are increased. He is also a better man because his eccentricities are lessened.

So also it is in the Christian Church. The wider and more constant intercourse among Christians of different nations, the greater the benefit to all of them. Each has something to teach, and each has something to learn. And the result of their mutual knowledge and intercourse will be that each national type will lose something of its peculiarity, and each will gain new beauty and new strength.

In the light of these thoughts, it seems to me that the translators of this volume of sermons are doing excellent service to the Christians of Japan. It was a good idea to collect in this way the sermons of great preachers of different nations. Their choice of preachers seems to have been well made, and I hope that their venture may have every success.

T. S. TYNG.

June 26th, 1893.

るものありて諸家の説教演説を緝録して汎く世間に紹介せんと企てたれども惜むべし終に久しく維持する能はず中途にして廢刊せり今本書の出版せらるる豈に深く時の需用に促されたるものありしに由らざるを得んや其一般讀者に取りて教誨となり青年牧師に取りては摸範となり以て世を裨益するとの極めて大ならんとは余の信して疑はざる處なり我諸教會は松尾三上兩君の勞に由り感恩の債務を負はせられたりと謂ふべし

明治廿六年六月廿一日

横井時雄識

PREFACE.

As every man has his own individual characteristics, so every nation has its national characteristics. When a man receives the Gospel of Jesus Christ, he receives it in accordance with his own character and temperament. It follows that in him it takes necessarily a form somewhat different from that which it assumes in any other man. And so also with nations. Each nation receives the Gospel according to its own character, and in each it takes on its own peculiar national form.

This is not only a thing inevitable. It is also a good thing. So long as the essentials of the faith are preserved, it is most desirable that each nation should develop its own peculiar type of Christian character, Christian work, and Christian worship. It is one of the glories of the Gospel of Jesus Christ that it is a Gospel of *liberty*, that it has room for many and various types of development among those who remain in "one body" and hold to "one Lord, one faith, one baptism, one God and Father of all."

But a wrong inference is sometimes drawn from this great truth. It is sometimes looked upon as a kind of duty to develop national peculiarities to their greatest possible extent, and it is thought to be the highest merit of a national type of Christianity that it

緒言

一本書はサトモンズ、フタルスト、シリイス(スボルジョン)サトモンズ、フ
ヲア、ニユーライフ(ブシヤル)ゼレクシヨンス、フロム、ヂ、サトモンズ、チ
フ、パードル、アゴスチノ(アゴスチ)アワリス、チフ、クリスチヤン、デ
ヴチーシヨン(トロツク)チヤンニングス、ウナルクス(チヤンニング)エ、
ツランベツト、ツイ、ヂ、ウナルク(ムイデ)ヂ、ユニチ、チフ、ゴッド、エノド、
マン(スタツフナルド、ブルツク)ロポルトン説教集、ピーチャイ説教
集、フィリツフ、ナルツクス説教集等の原書より抜摘翻譯したるもの
なり、

一説教の勢力は多く、其人物の上に存するものにて、是を書に筆すれば、
既に其半を失す。况んや是を異域の語に翻譯するに於てや。翻譯の
躰裁は殆むど原文の儘に譯出したる所あり或は大に省略を加へし
所あり、必ずしも其揆を一にせず、たゞ主として原意を暢達せむこと

を勉めり、然れども譯者の不敏なる、尙或は明瞭を缺く所なきにあらざらむ。是れ豫め原著者に謝し、併せて讀者の諒察を希ふ所以也。

一本書中「ロポルトソンの説教」基督の孤立は丹羽清次郎氏の筆に成り、「處女崇拜」は松本亦太郎氏の舊稿に係る、此に之を明記して、二氏の厚意を謝す。

一本書の翻譯に際して横井時雄氏の配慮を受けしこと少からず、厚く此に鳴謝す。

明治廿六年六月

譯者等識

歐米近世 大家説教集

スボルジョンの略傳	一
永遠の名(スボルジョン)	三
パウロ最初の祈禱(同上)	二一
フヒリップ、ブルツクスの略傳	四九
新にして更に大なる奇蹟(フヒリップ、ブルツクス)	五一
人生之眞面目(同上)	七二
ブシケルの略傳	九一
無覺の感化(ブシケル)	九二
アゴスチノの略傳	一一三
希望(アゴスチノ)	一一四
宗教の必要(同上)	一三八

ムイデーの略傳……………一六一

信仰と勇氣(ムイデー)……………一六三

爾曹は世の光なり(同上)……………一八二

ストツプホルド、ブルツクスの略傳……………一九九

人生中年以後之立志(ストツプホルド、ブルツク)

トロツクの略傳……………二〇一

無くて叶ふ間敷ものは一なり(トロツク)……………二一九

我等に己か日を數ふることを教へたまへ……………二二五

耶蘇常に人なき處に退きて祈り玉ひき(同上)……………二三〇

チャンニングの略傳……………二三五

基督教は道理に合ふ宗教なり(チャンニング)……………二三七

ロポルトソンの略傳……………二六二

處女崇拜(同上)……………二六四

基督之孤立(ロポルトソン)……………二七二

ピーチャイの略傳……………二九七

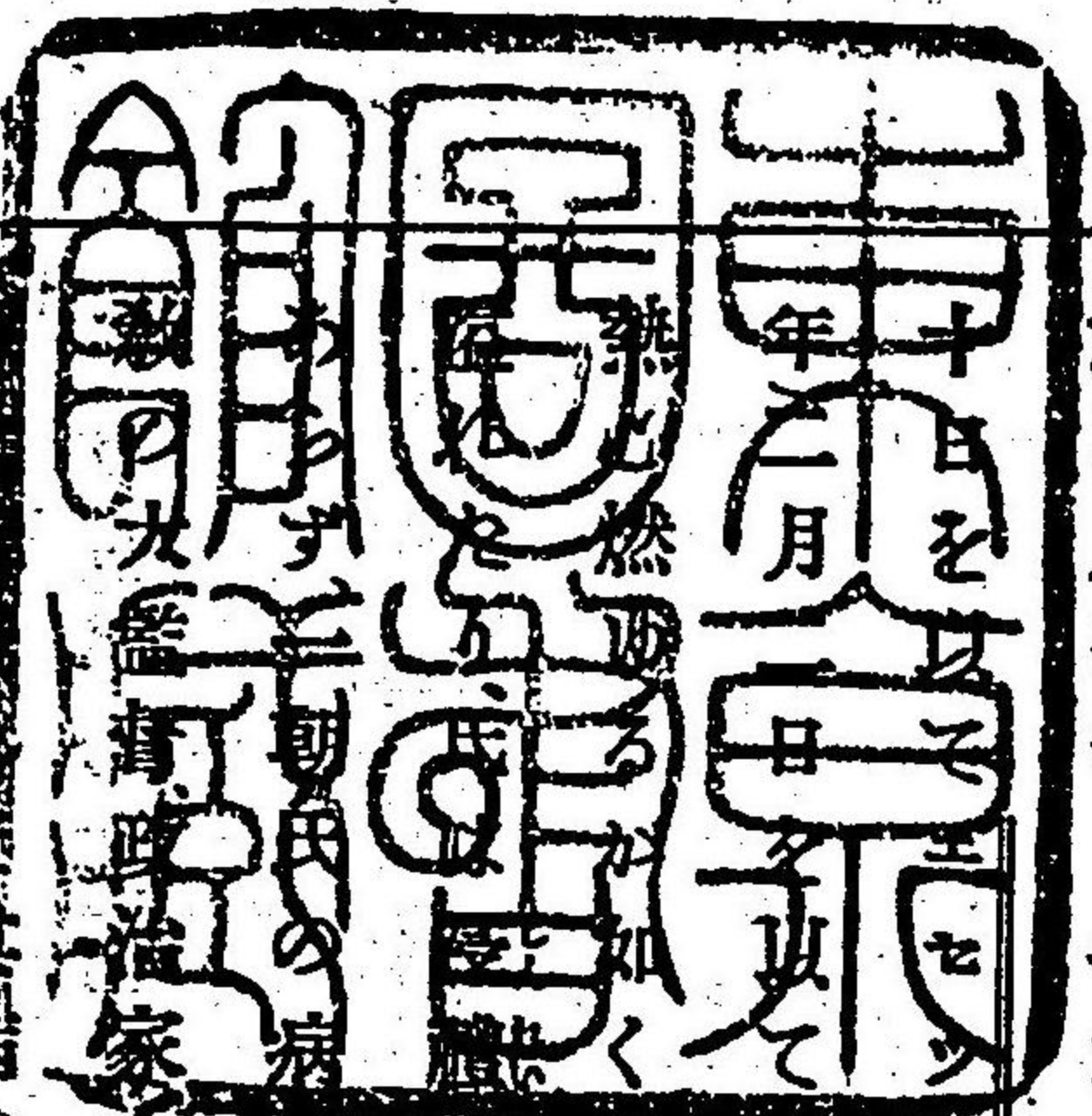
神之慈愛(ピーチャイ)……………二九九

聖書(同上)……………三一六

以上

スボルジョン略傳

英京敦倫に於て三十年間、世界最大の教會に基督の十字架を宣べ傳へたる人を、シー、エツチ、スボルジョン氏となす。氏は千八百三十四年六月十日を以てエセック州ケルベドンの一村落に生れ、千八百九十年(昨年二月一日)死す。享年五十八。實に第十九世紀の大説教家にして、熱心燃ゆるが如く、毎日曜の説教には、常に五千有餘の會集、其堂に滿ち居れたるが、氏は自由派に屬せりと雖も、胸襟開潤、世の頑僻固執の流にあらざり。朝氏の病報新聞紙に上るや、上は英國皇太子を初めとして、國教の大監督政治家、文學者、天主教、猶太教の教師に到るまで、その電報を飛び、其病狀を問ひ、其數七千通の多きに達したりといふ。以て其人物を察するに足らん。氏は教會の外に、二個の孤兒院、一個の牧師學校、一個の救助院を創立して、之を監督し、其教會の會員五千三百二十八



二 人其教會に屬する傳道地の數二十六ヶ所にして、三十個の日曜學校を有し、八千五百十三人の生徒と、六百四十四人の教師を有せり、又氏によりて信者となりしもの、十年間に二萬六百十六人ありしといふ、神の人にあらざんば、何を以て此の如くなるを得んや

永遠不朽の名

スボルヲヨソ

彼の名は常にたえず

(詩篇七二一七)

こゝに常にたえずとある名は、誰しも耶蘇、基督の名なることを承知するなる可し、人間はいろ／＼の事業を起して、幾度かこれを永遠に傳へんとせり、而もその度毎に望を失ひたりき、大洪水の後には、彼等煉瓦を作り、粘土を集むることを覺へたり、而して彼のペベルの高塔を築き上んとするるとき、彼等は曰へり、此は永遠に存つならんと、されど神かれらの言語を混亂し、玉ひければ、彼等これを成し遂ぐ能はざりき、天の雷もて神これを打ち破壊し、彼等の愚をあざわらひて、後世に其記念を遺し玉へり、古のフェラテとエヂプトの諸王は、其ピラミッドを築き上て、而して曰へり、此等は永遠に屹立ならむと、如何にも其言の如く、今尙屹立

三

居れりされど世の變遷は此等をしも食み盡すの時來るべし其他人の最も誇りたる凡ての事業は其宮殿たるを王國たるとを問はず之に記すに永遠てふ文字を以てしたるにかはらず神これに終を命し玉ひければ皆過行きぬ最も頑丈なるものさへも只影の如く水泡の如く消失せたり神の命に従つて消失せしなりニチベは何處にありヤビロニは何處にありヤヘルシヤの市は何處にありヤイドムの高地は何處にありヤモアブとアモンの侯伯は何處にありヤクリスの宮殿又英雄は何處にあるヤソロキシスの軍勢は何處にあり又羅馬の諸帝の大軍は何處ぞや彼等は過行かざりしやたとへ彼等は誇顔に此王國は永遠不朽のものたるべし此七丘の女王は無窮の都城と呼はるべしと語りたりしも彼女は顛倒に顛倒暫にして洪水に擲る挽臼の如く沈みたり而して今や其舊趾に只石龍子と鳥の飛ぶあるのみ人は其事業を無窮と呼ぶ神はこれを瞬間と呼び玉ふ人は之を岩の上に建たりと思

ふ——神は之を砂の上否な砂よりも劣れる——空に建てたりと笑ひ玉ふ然らばこゝに一物の永遠に存つものあるを發見せば其樂しみ如何計りぞや余は其一物に就て今晚脚等に脱教さんとをもふなり彼の名は常にたえずとあるこれなり(第一)彼の名に由て清淨られたる宗教は常にたえず(第二)彼の名の崇敬は常にたえず(第三)彼の名による救と慰めの方は常にたえずなるなり

(一)イエスの名による宗教は常にたえず、
 僞聖人等起りて其迷教を世に廣め之を後代に遺さんと欲してもし數人の信者其旗下に集り彼等に香を焼くものあるに到は彼等は乃ち微笑て云はんわが宗教は星の如く輝き永遠に存つべしとされど其誤信は如何に太ひなることぞや實にこれらの僞宗教は起りては倒れ起りては倒れ今に到つて其數を知らず殊に余はこれを不信説の種々なる學派に於て見るなりこゝ百五十年以内に道理の誇つたる勢力は幾變

更を來せしぞや、今日一び築きたる論城も、翌日は自ら愧ぢてこれを破
 壞し、更に新らしきものを建たるに、次の日は又これをも毀ちて他のも
 のを建ざるを得ざるなり。不信説は百の服裝をなせり、一時はツナル
 ールに依て吹立てられ、トマス、ペイオンに依て躍り出でたり、爾來いろい
 ろ其進路を變へ、其形様を化へて現はれたりしが、今や下等なる世俗説
 となりて出で來れり。現世の外は何をも見ず、頭を伏して獸の如く其鼻
 を地に附け、而して此地の事のみを満足するなり、ア、此頭髮の一丝だ
 に色を化へざるうちに、かの最新の俗説も過ぎ往くべし。我等が五十の
 齡を加へざるうちに、新不信説は出で來るべし、而して聖徒は何處にあ
 るぞと云はん人々に、われら回頭て汝等は何處にあるぞと云ひ能ふべ
 きなり、而して彼等は答ふべし、われは其名を變へたりと、如何にも
 其名を變へたるならん、新しき形、新しき様を裝ひたるならん、而も尙其
 性質は同じきなり、則ちキリストに反對して其眞理を穢すことを力む。

彼等の教法、否無信教法——亦これ一個の教法——の上には消て無く
 なるべし、花の如く萎み、流星の如く飛び、湯氣の如く散して頼なしと銘
 して可なり。余は是より暫らくイエス、キリストの宗教が永遠に存たさ
 るべからざるの要點を卿等に語らむ、
 さて第一吾人は基督教をもて他の宗教と同じく過行くものと考ふる
 人に問むとす、何時かキリスト教の世に存せざりし時ありしやと、彼等
 答へて云はむ、然り、キリストと其使徒等の生れざる前、則ち是なりと、さ
 れど吾人は答へむ、否、ペツンヘムは福音の出生地にあらざ、縦キリス
トは其處に生れ玉ひしにせよ、福音はキリスト誕生の以前すでに久し
 く宣傳へられたり、縦今日の如き純粹明白なる状態にてあらざりしに
 せよ、シナイの曠野に於て、福音はすでに其處に傳へられたり、縦、燻香
 の烟にて迷亂され、屠られたる犠牲の血を通して見るべかりしにせよ、
 實に福音は其處にありしなり、否、なこれよりも更に前エデンの花園に

於て、菓物は永久に熟し、夏の日は常に照り輝やきし、其真中に於て福音の聲はきこえしなり、神宣はく、婦の苗裔は蛇の頭を碎くべしと、これ福音のはじめなり、斯くてのち吾人反對者に問む、偽宗教は何處に出生せしや、その搖籃は何處にありしやと、彼等はメツカに指し、ローマに指すべし、又孔子といひ、佛陀といふなるべし、されど此等は世の最も古きものにあらず、吾人は則ち世の最初に溯りて我宗教の元を示さむ、而して云はむとす、幾多の宗教は水上に浮べる泡の如く消へ失するに唯此宗教(イエス教)のみ大洋に浮べる船の如く、幾千萬の靈魂を乗せて死の川を横ざり、天の廣原に入るものなりと、次に吾人の聞んとする所は、もしキリスト教にして、絶滅に歸するものと假定せば、之に代るべき宗教は何ぞやといふにあり、吾人は基督教の命運を速かに盡くべしとなす、賢き人に問はむ、然らば如何なる宗教をか吾人其代として有つべきや、吾人再び偶像に平伏し、事ふの迷信に入るべきや、パツコス又ガイノス

を拜すべきや、否なく、此るものを汝等忍び能はざるべし、汝等は云はむ、これ文明人の決して堪ゆべきものにあらざるなりと、然らば汝等は何を信ぜんとするや、羅馬教と其妄信となるや、汝等は云はむ、否、決して然らずと、然らばマホメット教を撰まんとするか、汝等は其妄信と其姦惡と其淫亂とを擇ばんとするや、汝等は多妻宗を信ぜんとするや、なんぢらはモルモン宗を信ぜんとするや、決して能はざるべし、然らば則ちキリスト教の代として何れの宗教を信ぜんとするや、不信説なりと叫ばんとするか、而して汝等はこれを固く保持せんとするや、請ふ其結果の如何を願ふ、汝等は嘗て佛蘭西にありしが如く、殘酷の淫溢を我國にも見んと欲するや、凡ての社會は破壊せられ、人と人とは北海に浮べる氷塊の如く衝突し、終に互に崩壊するを見んと欲するや、ア、神よ願くは吾人をして不信説より救はせ玉へ、然らば汝等如何なる宗教を保持せんと欲するや、何んにもあることなかるべし、世に基督教に取て代

るもの一もあることなし。もし我等全世界を一週して、英國の極端より日本の極端まで索し求むるも、決して基督教の如く完備したるものを發見する能はざるべし。

而して今一つ反對者に問む、よしキリスト教より優りたるの宗教發見せられたりと假定するも、汝等は如何なる方法を以て我宗教を壓倒せんとするや。如何にしてイエスの宗教を除去し、如何にしてイエスの名を抹殺せんとするや。恐くは古の迫害法を再演せんとはせざるべし。夫とも之を試んとするや。火刑と磔刑とを以てイエスの名を焼き盡さんとするや。これを試よ、而して基督教の滅すべからざるを知らむ。殉教者は一人く其血をもて指を浸しつゝ、其死なんとする時、天の表面に己が名譽を記すべし。而して天にまで燃上りし燄は、則ちイエスの名を天に輝すべし。古來迫害の起りしこと幾度ぞや。アルプスの山を颯みよ、ピテモントの谷をして語らしめよ。スウイツランドをして證明せしめよ。

フランスをしてセント、バルソロミユと共に、イングランドをして其凡ての殺戮と共に語らしめよ。此等は凡てイエスの名を碎くに足らざりしなり。而も尙これを試みんとするや。ア、これ益なきことなり。もし必要あらば明日とも云はず、千萬人の者は喜んで十字架の下に進むべし。而して彼等が焚れたるとき、其肝膽を振とることを得ば、汝等これにイエスの名の刻まれあるを認べし。それ彼の名は常にたえざるなり。汝等如何にして我等がイエスに對するの愛心を碎かんとするや。ア、汝等は云はむ、われらこれ(迫害)よりも一層溫柔なる方法を探るべしと。善し、汝等何を試みんとするや。一層優りたる宗教を發明せんとするや。われらは實にこれを希望す。われらをして之をきかしめよ。されど如何なる發明の出來得べきことは、信ぜんと欲して能はざるなり。然らば如何するぞ。汝等は、大詐僞師を起して、われらを惑さんとするや。われらは實にこれを希望す。そは擇ばれたる者は、如何にしても欺くべからざればな

り、其他あらん限りの方法を盡して之を試よ。汝等が日をして無に歸せしめ、月をして光を失はしめ、海の水をして汝の口飲に由て乾涸らしむる時まで、汝等其目的を達し能はざるべし。此くても尙汝等は之を試みんと欲するや、

而して次に問はんとする處は、汝等がわれらの宗教を破碎し得たりと假定して、さて此世は如何なる状態となるやの點にあり、ア、われをして今晚懸河の辯あらしめば、恐くこれを汝等につぐるを得ん、われをしてロポルト、キールの辯舌を借ることを得せしめば、恐く世を悲歎の涙に咽ばしむるを得ん。余は我主無ふして、此世に存らふることを希望はざるなり、もし福音にして眞ならずんば、余は即時こゝに死せんこと神に祈ふべし。そは汝等がイエスキリストの名を破碎すが如き世には我早や生存んことを欲せざればなり。此の如き感事は當にわれ一人のみならず、幾千萬のクリツチヤ、皆同じかるべし。又もし汝等が基督教を

破却し得たる其曉には、世の文明は如何に成果つべきぞ。永久の平和は何處に望むべきぞ。政府は何處ぞや、日曜學校は何處ぞや、凡ての會社は何處ぞや、人の品行風俗を改良し、道徳を進ましむる凡ての事業は何處ぞや。ア、何處ぞや。此等は凡て滅却して寸片も止ざるに到るべし。人々よ汝らが天の望は何處ぞや、永遠の祝福は何處ぞや、死の川を横るときよの助は何處ぞや、天國は何處ぞや、未來の智識は何處ぞや。もしイエスの名をして滅びしめば、凡てのもの亦消失すべし。されど我等は信ぜ、彼の名は常にたえず、ア、常にたえざるなり。誰れか之を絶んとする者ぞ、(二) 耶蘇の宗教の永遠に存つが如く、耶蘇の名の崇敬も常にたえざるなり。ヅナルテール曰く、余はキリスト教の薄明に生活したりと、彼は偽を言んとして實に眞を語れり。彼は其薄明に生たるなり、されど其薄明は曉方の薄明なりき——彼が言はんと欲したる、夕方のにてはあざりき、そは次第く日に日の光は其眞の榮もて我等の上に照來ればなり。嘲

る者は曰く人類は間もなくキリストを崇むることを忘れて、彼を承認するもの一人もなきに到るべしと、それ我等はこゝに再言せん、彼の名は常にたえず、又その崇も盡せざるべしと、然り余は如何に永く其崇の績くやを告むとす。此地上に無限の恵もて救はれたる罪人の住ふ限り、キリストの名はたえざるべし、涙もて主の足を濕し、頭髪もて之を拭ふのマリヤ存ふ限り、其信仰をイエスにをき、其喜樂其避難所其力綱其楯其歌をキリストに發見す、クリツチャンの存らふ限りはイエスの名は決して消失ざるべし、我等は決して彼の名を棄る能はず、ユニテリアン起つてイエス、キリストを否まば否め、眞のクリツチャン存する限り、われらが主の恩愛を味ふ限り、イエスの名の崇は盡せざるなり、されどもし凡て此等のもの過去りしならば——もし我等が彼の讚美を歌ふことを止めたらんには、イエス、キリストの名は滅絶んか、否、石は頌歌を歌ひ、岡は樂器を奏づべし、山々は牡羊の如く飛び、岳々は羔の如く躍るべし、

し、そは此等を造りしものは彼なればなり、もし息あるもの口を噤まば、日は樂隊の音頭を取らむ、月は銀の琴をかんで、其美音をあげむ、星は足並を揃て舞蹈らむ、無涯の蒼穹は歌をもてみち、汝は榮ある神の子なり、大ひなるかな、汝の稜威、限りなきかな、汝の能力、どの聲は、太空より、太空にひびき亘らむ、キリストの名は滅盡し、能ふべきや、否、此は、天空の表に記しあり、此は、洪水の表に記しあり、軟風は之を耳、暗風はこれを怒號り、萬物悉くこれを讚ふべし、もし此等のもの皆滅ひなば、彼の名は忘らるらんか、否、目をあげて見よ、天の使等は立つにあらざや、彼等も亦イエスの名を歌はむ、チエルビムと、セラフィンは、聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、萬軍の主エホバよと、呼びて口を絶ざるなり、されどもし此等のもの亡びなば——もし天の使は跡を絶れ、セラフの翼は其羽叩きを止めさせられ、チエルラの聲は其詩を歌ふことなからしめらる、事もあらば、彼の名は消失らんか、ア、否、決して然らず、父と

子と聖靈の神は無窮く其寶位に坐し玉ふ而して宇宙はすべて消滅するともイエスの名は失せざるべし、そは父これを呼び聖靈これを呼び玉ふべければなり。神の子イエスは父と其榮を共にし、彼の名は常にたえざるなり。

(三)而してイエスの名に由る勢力も亦限りなし。請ふこれを語らしめよ。汝等は十字架に懸れる盜賊を見ずや、見よ其足下にも口を開けたる惡魔の群がり居るを、かの盜賊はもだへにもだへて恨を含み、其胸板の奥には罰せられたる罪人と記され、其額の表には死の苦みより出づる血の汗をしたゝらすなり。今彼を見よ、彼は死なんとしつゝあり、片足は地獄に、他足は此世に、唯釘もて打れつゝ、此處に懸れるなり。それイエスの目に權能あり、かの盜賊はこれを見よ、主よ我を記憶へ玉へと叫び出だせり、ア、此一瞬間に如何なる變化は來りしぞや、請ふ目を拭ふて再盜賊を見よ、血の汗は何處ぞや、其は最早こゝにあらざ、彼の恐ろしき苦惱は

何處ぞや、其は最早此にあらざ、微笑は明らかに彼の唇にあり、地獄の惡魔は何處ぞや、最早一匹もあることなし、唯輝けるセラフ(天使)翼を廣げ、手を廣げて今や寶玉となりし彼の靈魂を擁して之を大王の宮殿に捧げんとて待ちをれり、彼の心中を見よ、白くかゝりやけり、彼の胸底を見よ、罰せられたるどはあらずして、義とせられたるど記しあり、生命の書を見よ、彼の名は其處に刻まれあり、イエスの中心を見よ、盜賊の名は其寶碑に記しあり、これイエスの權能なり、而して此權能は常にたえざるなり、盜賊を救ひ玉ひしイエスは世の終まで其救ひを垂れさせ玉ふ、

イマヌエルよりぞ	ながれいづる
血しほのいづみに	つみをあらへ
十字架にかゝりし	ぬすびとすら
この泉をみて	よろこびたり
われらもいづみを	ふかくくいり

くれなるのつみを
かみのこひつじの
きよむるちからは

みなあらはれん
ながせる血の
かぎりあらじ

かみのえらみにし
あがなはるゝまで
よをさりてのちも
しらべをかなで

そのたみみな
わきいづべし
いやけだかき
すくひをほめん

イエスの能力ある名は常にたえずしていよゝますゝ榮ふ也試に他の一例を引かしめよ、こゝに一人の聖徒あり死の床に横ふとはいへ其顔に憂なく其顔に恐なし弱果たりとはいへ喜ばしく彼は笑ふなり彼はどきどき呻吟くとありされど尙歌ふなり傍に立つもの我兄弟よ何者か汝をして死の顔に左程の喜を現れしむるやと問はれ彼はイエスよと囁くべし何者か汝をして左程温和且靜寧ならしむるやと問はれ

「イエスの名よと答ふべし見よ彼は凡てのものを忘れたり彼はモハヤ之を解するの力を有たざるなり彼の妻來りて夫よ我名を知らせ玉ふやと問へは彼否なと答ふ彼の友來り君よ其親友を知るやと問へはわれ君を知らすと答へむ君はイエスの名を知るやと彼の耳に囁やけ彼の目は忽ち光り彼の顔は天に向つてかゝやき彼の唇は祝福を語り彼の心は未來に迸裂らむそはイエスの名は常に彼の心にたえざればなり死よ來れわれキリストの名を呼むヲ、墓よ汝の刺は何處にありやキリストの名はわが榮光なるにあらざや彼の名は常にたえざる也われ尙幾百の實例を以て卿等に示し得べきもわが聲の續かざるを奈何せん今晚はこれにて語を止めんと欲す定めてわか語は解り難かりしならむ神の助けもて之れを胸に收めよア、われは我名の常にたえざるや否やを憂ひとせず唯キリストの名の常に輝かんことを希ふなりもしわが語りしことに過ちあらば速に滅盡せしめよ而してキリ

ストの名をして限なく存たしめよ、イエスよ、イエスよ、イエスよ、イエスよ、
をして凡ての者の王たらしめよ、卿等、何をも他の事を我にきくことな
かれ、今晚エツキエトル、ホール(會堂の名)に於ける我最後の語は是なり、
イエスよ、イエスよ、イエスよ、イエスよ、イエスよ、をして凡ての物の王たらしめよ、

ポウロ最初の祈禱

そは見よ彼は祈りて居

(使徒行傳九、十二)

神は迫害を消すに多くの方法を有ち玉へり、神は其教會が仇の爲に害
れ、敵のために倒さるゝを忍び玉はず、而して奸惡者の進路を他岐に轉
じ、若くは之を顛覆すの方法に、乏しきを感じ玉はざるなり、神は二つの
方法もて常にその目的を達し玉ふ、一は敵の亂に依てし、一は敵の改心
に依てし玉ふなり、時としては神其敵を亂り騒立せ、賣卜者を狂顛せし
め、神に逆らひて起つ者を滅亡に到らしめ、神の教會に向つて嘲の語を
放たんとするものゝ上に、凱歌の響を反し玉ふ、去りながら、又時として
は、余が是より説んとする者の如く、神は迫害する者を改心させ給ふなり。
此くて敵を味方に化成、福音を滅さんが爲めに荒れまわりし戰士をし
て、福音を傳へんが爲めに身を盡すの勇兵たらしめ、暗黒より光明を照

りいでしめ、蜜を食ひ盡す者より却つて蜜を得たまひ、否、石の如き心
 情の者より、神はアラハムの子を擧げたまふなり、かのソウロ則ちこ
 れなり、ソウロより恐ろしき固執者は他にあるべしとも思はれず、彼は
 頑民石にてステパノを打殺さんとしたる時、其血の飛滴に身を汚すを
 顧ざりき、彼は頑民の衣を張番して、彼等に十分の亂暴を働かしむる様
 心を込めたり、エルサレムに住ぶがゆへに、ガマリエルの學校にて彼は
 しばしば、ナザン人の弟子たちと顔を合せたり、彼は弟子たちを罵りた
 り、彼は弟子たちの市街をすぎ行を見て辱しめたり、彼は弟子等を死に
 をかんが爲めに兎狀を得たり、而して今や其殺氣ますます激發なりて、
 凡そ此道に従へる者は男女にかゝはらず、捕へて之をエルサレムに曳
 んと意ひ、往きてタマスコに近づかんとはなせり、されど驚くべきかな
 神の權能や、キリストは此人を其狂へる道に立止らせ、これを馬より打
 落し、之れを地に投げつけ、これに問ふに、ソウロ、ソウロ、何んぞ我を追む

るや、どの聲を以てしたまへり、キリストはしかるのち、惠もて彼の謀叛
 心を取除き——彼に新しき心、情と、正しき精神を與へ——彼の志望と
 目的とを更へ——彼をタマスコの街に導き——彼をして三日三夜の
 間みえず、又飲食だになすを得ざらしめ——彼に語ひ——彼の全心全
 靈に烈火を投入れ玉へり、而して彼三日三夜の悶絶より起ちて、正に祈
 を初めんとするや、主まぼろしの如く、アナニヤに曰ひ玉ひけるは、起て
 直といふ街に往き、ユダの家に入りて、タルンの人サウロといふ者を尋
 よ、蓋は見よ、彼は祈りて居と、
 (第一) 此題詞は一つの布令なりき、見よ、彼は祈りて居と、(第二) 此は一つの
 論證なりき、そは、見よ、彼は祈りて居と、(第三) 結局として、吾人は此題詞を
 わが心情に適用せんと欲す、縦し適用のことは、神のなし玉ふ所なりと
 雖ども、今朝こゝに神の道を宣傳ふるにあたりて、之を實地に試むるも、
 神見て善哉とし玉ふならんとわれは信す、

(一) 緒言は措きて此題詞は實に是れ天に於て御心を注ぎ玉ひし所、天の使に喜びをもたらせし所、アナニアにまで喚驚となり、ボウロにまで一の新現象となりし事實の布令たりき、憐れなるソウロは憫みを乞はざるに到らしめられたり、而して彼が祈を初めしや、否や、神はこれに耳を傾け玉へり、卿等は此章を讀むに當り、神がソウロに御心を注ぎ給の如何に深切なるかを氣付かざるや、神は彼が如何なる街に住ひしかを、世玉へり、直といふ街に往けど、神は彼が如何なる人の家に居りしかを、知せ玉へり、エダの家に到れど、神は彼の名のソウロなるをも知らせ玉へり、神は彼が出生地の「タルン」なるをも知らせ玉へり、而して神は彼が祈しことを知らしめし玉へり、見よ、彼は祈りて居ど、ア、祈りが天に於て傾聽るとは是れ誠に榮光はしき事實ならずや、憐なる、碎けたる心の罪人は、其閑室に攀ぢ登りて、其膝を曲むも、太息と、血涙の語もて、唯その悲痛を訴ふるのみ、見よ、其呻吟は天の凡ての樂器に妙音を奏せしめ、其

涙の滴は神手づから受けて、之れを永遠に保たんがため、天の寶壺に收め玉ふなり、涙のために聲の曇れる祈禱は至上者の耳に最鮮明なり、涙は天の金剛石なり、太息はエホバの寶座の音樂なり、如何となれば、縦し祈は

幼兒も叫ひ出でむ程の愚しき節にもせよ、
其語は恰も

天の高閣にひいき亘る此上なき嚴かなる曲調

とぞ聞ゆなり、

余をして今瞬時此思想に浸潤ふことを得せしめよ、祈は天に於て傾聽せらる。ア、余は卿等の多くが如何なる境涯にあるかを知らるものなり、卿等は思はむもしわれ神に向ひ、神を求むとも、われは實に罪あり、汚れありてモハヤ神の一顧だに價する能はざる程のものなりと、わが友等よ、決して左る妄想に苦む勿れ、我等の神は何時覺むべくともなき、夢迷

の中に坐し玉ふ神にあらざ、又目見んと欲して見る能はざる濃霧の奥に隠れ玉はす、神はパール(偶像の名)の聞く能はざる如きにをわしませず、賊や神は世の戦争を護り玉はざるべし、世の王等の虚驕、虚榮に配慮け玉はざるべし、されど悲みもて満てる心、涙もて脹れたる目、痛悔の太息と、呻吟のある處には、エホバの耳、廣く開き、エホバは之れを記憶の帳面に記し玉ふ、エホバ我等の祈を薔薇の葉の如く、其記憶書の紙の間に挟み玉ふ、而して終に此書の開るゝ時、至らば、貴き香、其中より立ち上るべし。オ、最汚しき、憐れなる罪人よ、汝の祈は聽るなり、今の今神は汝に就て、彼は祈りて居どかたり玉ふ、其聲は何處なるや、藏の中なるか、物置の中なるか、將た又此會堂の中なるか、汝は今天に向つて、其目を注ぎつゝあるか、語れ、憐れなる心情よ、われは今汝の唇より、神は罪人なる我上に恵を加へ玉ふ、その聲をきかざりしや、罪人よ、われ汝に告げん、こゝに電信に勝る一物ありと、電信の音信を通するに、速きは汝の知る處なり、

されどわれは聖書に於て此エレキカよりも速きものあるを見たり、曰く「彼等か祈る前に我答へんと、されば汝罪人よ、神は最高き御座より常に汝に目を懸け、汝に聽き玉ふぞと、知れ、次に此は天に喜ありとの事實の布令なりき、此題詞に見よ、てふ一言を加へたるものは、則ち救主親ら見て之を喜としたまひたる記なり、嘗て一度、イエスが目を天に注ぎて、天地の主なる父よ、此事を智者達者に隠して、赤子に顯し玉ふを謝す、父よ、然りそれ、是の如きは、意旨に適へるなり」と叫び玉ひしとき、其御顔に微笑の息らふを見たり、我等の靈魂の牧者は、其羊の安全なるを見て喜び玉ひ、一人の迷へる者を、其家に復歸し玉ふ時は、主は凱歌の聲を擧げ玉ふ、實に迷はざる九十九の羊よりは、此迷へる一匹の羊を喜ひ玉ふなり、而して天の使たちも亦これを喜ぶ、神の選べる赤子の一人、生るゝときは、天の使は、其搖籃を取圍みて立ち、其子成長するに従ひ、罪の中に走り去るも、使たちは、彼を尾して、其道筋を追ひ、悲を以てその様なる、

復に目を注ぐなり。現在、人の福音に心を傾けんとするや、使等は云ふ、見よ、彼は耳を傾けんとすと、彼しばらくにして福音の語は其心の奥底に落ち、涙は其頬の兩邊に馳せ、而して終に其の靈精の至深き所より、神よ、我を憫み玉へと絶叫時、見よ、天使は此に於て其翼をはたき、天に舞ひ上つて且曰く、友なる使等よ、我にきけ、見よ、彼は祈りて居と、而してのち彼等は天の鐘を鳴といろかせ、彼等は輝ける祝會を催ふし、又歡喜の聲を放つべし、蓋は我誠に汝に告げん、一人のもの地に於て悔改むるときは、天に於て、神の使等の間に喜ありと。彼等はわれらが祈するまでわれらを注視、而して我等が祈るに到らは彼等云ふ、見よ、彼は祈りて居と、且わが愛する友よ、天に於て喜ふものは其使の外に他の靈物あるべし、われらに前だちて逝ける友ぞ、其れなれ、余は天に於て多くの親戚を持つ、されど唯一人、余が爲にしば、祈り呉れたる最愛の者を持ちて、彼女ばわが幼かりしとき、我を養ひ育てたるものなり、而して今や榮光の寶

座の前に坐り居れり。われ想像に、彼女は其愛する孫子が罪の道、惡の道、愚妄の道に歩むを見しときも、悲哀をもて注視能はざりしならん、そは榮光に入る者の目には、涙なければなり、彼女は危憂をもて注視能はざりしならん、そは神の聖位の前に此る感事は有り能はざればなり、されど、ア、われ神の恵によつて祈るべきを感せし時に、われ唯一人ひさまつきて、此心を責し時に、余は思ふ、彼女は、見よ、彼は祈りて居る、見よ、彼は祈りて居ると、幾許り喜びたらんと、ア、余は彼女の笑顔を畫き能ふなり、彼女は此時、二つの天國を得たる如き心地せしならん、余か爲と彼女自の爲と、ア、年若き人よ、汝の母は黄金の街を歩みつゝあり、今朝、彼女は此光景をながめつゝあり、彼女は汝を育てたりき、彼女の懐に汝幼かりしとき、横ばり、而して彼女は汝をイエス、キリストに捧げたりき、彼女は常に天より其幸福と相反せざる切望をもて汝を注視つゝありき、今朝も尙汝を注視つゝあり、年若き人よ、汝は如何に思ふぞや、キリスト

は彼の聖靈をもて汝の中心に「我に來れよ」と宣はさるや。汝は悔改の涙を注ぎ得るや。汝の母をして神前にひざまづきわれ汝に謝す、ア、いとも惠深き神よ、地に於てわが子女たりしもの、今光に於て汝の子女となり、語り出でしめよ、されどもし此外、何人よりも優りて罪人の改心を喜ぶもの天にあらは、これ傳道者なり、神の眞傳道者の一人なり、ア、わが聽衆よ、卿等は神の眞傳道者が如何に卿等の靈魂を愛するかを思ふこと淺し、卿等恐くは云はむ、此に立ちて卿等に教へを説くは容易き業なりと、神知せ玉ふもし口頭にて嘯ずるのみなればいと易き業なり、されど卿等が救ひと滅びとは、われらの語る處に依ることを考へ來らば——もし我等にして不誠實なる番兵たらば、卿等の血は神これを我等の上に歸し玉ふことを考へ來らば——ア、正善なる神よ、我生涯の間幾千の者に説教し、幾度か云ふまじきことを云ひしを考へ來らば、我は實に戰慄に堪へざる

なり。ルイテル曰く、敵に向ふには何事なきを得しも、講壇の階段には足のわななき無くして上り得ざりきと、説教は兒女の戯事にあらず、説教は骨折もなく心配もなく、遂げらるゝ業にあらず、之は是れ嚴なる勤なり、之は是れ恐ろしき勤なり、ア、如何に神の傳道者は卿等の爲に祈ることを爲すぞや、もし卿等傳道者の居室の窓外にたゞむこともあらば、彼が日曜日の夜毎に其話せし説教の不完全なるを泣き悲しむを聞きしならむ、卿等は彼が神に向つて我等の報知を信じたる者は誰ぞや、エホバの腕は誰に向て現はれしやと論難するを聞きしならむ、ア、彼が卿等を其天の安息より眺むるときに——彼が卿等の祈りつゝあるを見るるときに、如何に彼は其手を拍て云ふことならむ、汝がわれに與へたる子女を見よ、見よ、彼は祈りて居るとわれら一人の者、エホバに導かれ來るを見れば、恰も溺死せんとしたる者の救はれたる心地とする、此處に洪水の中に溺れなる人あり、彼は倒れんとしつゝあり、彼は沈まんと

しつゝあり、彼は溺れて死せざるべからざるなり、されど我飛び入りて
 かれをシツカと抱き上げ、彼を岸邊に持ち來り、而して彼を大地の上に
 横へたり、醫師は來り、これをながめ、其手を彼の上に置いて云ふ、恐くは此
 者助からざるべしと、我等は彼を蘇生せんが爲めに凡ての法方、凡ての
 配慮を盡したり、終に我耳を彼の口にあてしに、彼は呼吸を初めたり、わ
 れ叫んで曰く、彼は呼吸して居る、彼は呼吸して居ると、此一瞬に如何な
 る歡喜は生じ來るぞ、彼が呼吸し居るは是尙生命あるなり、恰もこれと
 同じく我等は人の祈り居るを發見すとき叫んでいふ——彼は呼吸し
 居る、彼は死せず、彼は生けりと、そは人所をなす間は罪と愆とに死する
 ことなし、聖靈の勢力之れを強め、生命に生命加へらるればなり、彼は祈
 りて居ると、こは是れ天に於ける喜の音信なり、神の厚意の告知なり。
 次に此は是れ人間にとつて最も驚くべき事實なりしなり、アナニアの
 心にもソウロの改心は思ひもそめざりき、主よ、我此人につきて多くの

人の語るを聞しに、彼がエルサレムにて爾の聖徒を苦しむこと如何ばか
 りぞやと危みたり、他の傳道者は知らず、余は時として聽衆の人物によ
 りて思ひを設くることあり、善し、某々は甚た望あり、余は彼等を神の信
 者となすべし、余は信す、彼等は間もなく主が彼等の上に加へ玉ひし惠
 を語り出るに到らんと、然るに暫く經て何の事もなく、かれらは其影を
 だに止めずなるなり、さればにヤエホバの我に送りたまふ人物は——
 世の溢れ者、大酒漢、兇惡人にして、一見愛想も盡きむ計の者なり、而して
 われ驚きて手を擧げ、ひそかにいふ、此の如き者は余か考へを盡せし人
 物にあらずと、余は近頃起りし一事を記憶せり、六十歳計の憫れなる老
 人ありき、彼は粗暴なる船頭にして、其村に住む惡漢仲間の一人なり、酒
 飲むことを商賣とし、惡口雜言を喜ひしたり、而るに彼何んとしてか、
 或日の日曜わが兄弟が、キリストのエルサレムにつきて泣き玉ひしこ
 とを題詞して宣べ居りし時に、わが會堂に入り來れり、而して此憫れな

る人は之れをきいて感に入りたり如何にイエスキリストは我如き惡漢のためにも泣き玉ひしかと終に彼説教者の前に來りて曰へり君よ、余は六十年の間惡魔の旗下に船乗を業となせしも今や新らしき主を得るの時となれり余は彼の老船を打碎して一切を海に沈むべし而して余は新らしきものを得てインマヌエルの旗下に帆を擧ぐべしと爾來より此人所の人となり誠實を盡して神の前に歩むの人となれりされど彼が如きは人の注意に漏れ易き人なり神は却つて此る人を撰み玉ふ神は金剛石を得んとて意を注ぎ玉はず却つて小石を拾ひ玉ふ、是は此石をもアブラハムの子となし玉ふ得べければなり神は鍊金者よりも更に賢し管に金を精鍊するのみならず下等き鑛物を化成て寶玉となし世の最汚れたるもの最惡きものを鍊つて之を輝る人物となし之れを聖徒となし凡そ愆あるもの凡そ罪あるものは悉く之れを清むるを善しとし玉ふなり。

ソウロの改心は不思議なる事なりきされど愛する者よ余と君とが此く基督信徒となりし事は更に不思議ならずや試に問ふ數年以前人ありて君に告るに君は神の教會に加はり神の子女等の仲間なりやとの問を以てするとき君は何と答へしぞや諛語をきくものかなそも何たる意ぞ余は汝等如き偽善者の中に入ることを潔しとせず余は宗教などを信するの考なし余は思ふ存分に考へ思ふ存分に舉動ふを好むものなりと是れ君と余が語り出でたる語にあらざや而して今やかくて此處にあるは如何にぞやわれら其すぎこし方の變遷を顧るとき夢の如き心地するなり神は我等の親戚中我等より善き所の多くの者を殘し置きて何故我等を選み玉ひしぞやア、是れ不思議なる事にあらざして何ぞ我等はアナニアと共に驚きの手を擧げて見よ見よ見よ、是れ地に於ての奇跡天に於ての休徴にあらざやといふべきなり。次に余が云はんとすることは是れなり——此事實はソウロ自らにも

新現象なりき見よ彼は祈りて居ると何をか新現象といふソウロは日に二度祈の時に於て參宮(エルサレム)の宮殿へするを常としたりしならんもし卿等が彼に伴ひ得しならば彼が美しき音調にて左の如き祈するを聞しならん曰く

「神よ我は他の人のごとく強索不義姦淫せず亦此稅吏の如くにもあらざるを謝すわれ七日に二次斷食し又すべて獲もの十分の一を獻げたり云く。ア、卿等は神の位の前に立ちて堂々演説をなすのソウロを見たりしならん而かもこゝには見よ彼は祈りて居ると記されたりさてはこれまで彼一度も祈しことはあらざしか然り決して之れあらざりしなり彼がこれまでなしたる祈は皆空なりき祈にてはあらざりきわれ嘗て聞けることあり或人其幼き頃より願くは神よわが父と母とを祝福玉へといふの祈を教へられたり而して彼此ことを七十年の間祈り續けて兩親は死去けりかくてのち神の惠彼の心情にくだり彼初

めて覺を開けり曰く我は決して祈りつゝあらざりし我はしばし其祈を演たり而も決して祈らざりしとホウロも亦此人に宛も似たり彼は言譯の爲に其長き祈禱を祈りたり而も凡てこれ無効なりき今にして初めて眞の祈に達せり故に曰く見よ彼は祈り居ると高慢なる顔にて儀式的の祈をなすも至上者は願たまはず只至誠もて祈れア、神よ、キリストの名の爲に聽玉へと一の熱禱至誠的は千の空禱(儀式的)に優る一の至情より出づる祈は萬の冷淡き讀誦に優るそれ神は口頭より出づる祈を嫌忌玉ひて心の奥底より出づるものを愛し玉ふ今朝此に立ちて卿等のうち數百人は其生涯中未だ嘗て祈りし事なきものありと云はし恐く粗忍の罪あらんされど卿等の中數人は決して祈りしことなきものなりと云ふも強ち誣言にあらざるべし此に一人の若き者あり其兩親と離るゝとき朝夕必ず形式の祈禱をなすべきを約したりされど彼は之れを耻ぢらひて且放擲たり嗚呼年若き人よ汝其死期の

到るに際ば如何んするぞや。汝は死の門を通り抜るの暗號を有ちをるかや。汝は祈に依て天に入り能ふかや。否な。汝は能はざるべし。汝は天の門より逐出されて、外の暗黒に投やらるべし。

(二) 第二われらはこゝに論證を有てり。それは見よ。彼は祈りて居と。此は是れ何よりもまづアナニアの安全に對する論證なりき。憐れなるアナニアはソウロに面會することを恐れて、獅の穴に入るが如き心地したり。彼思へらく、もしわれソウロの家に到りなば、彼直ちにわれを捕へてエルサレムに引き行ん。そは我はキリストの弟子たればなり。而してわれ彼家に行とを好まずと。然るに神曰ひ玉はく、見よ。彼は祈りて居ると。アナニア此一語を聞や乃ち曰く、善し。それ聞けば大丈夫なり。もし彼祈禱の人なりせば、われを害する事なかるべし。もし彼眞信心の人なりせば、われ固より安全なりと。卿等は常に祈禱の人の信すべきを確むならん。不信の人も常に眞のソリツチャンを尊敬す。雇主は祈する下婢を得ん

ことを欲す。彼自らは宗教に頓着せざるも、彼は信心深き雇人を得んことを好み。これを他の若よりも優りて信任す。實に卿等の中に形式の祈禱をなす者あり。是れ眞の祈にあらずと。知れ眞の祈をなす者には、千萬金を委ぬるも、憂ふるに足らず。隠微に於て神と交る者は、公明に於て信用ををくに足る。余嘗つて信者と不信者の二紳士が、スウィツランドの或山里を旅行したる話をきけり。元此地方は賊難多き所に於て、其客舎さへも往々盗人の仲間たるなり。彼二紳士は此處に來りて、或家に宿泊を求めたり。而かも實に胡亂なる家にして、兩人何れも其油斷を戒むる程なりき。暫くして主人出で來り、陳て曰く、客人たちよ。余は此全家族が臥床に入る前に、常に聖書を読み、祈禱をなすを習とせり。今晚も願くは爾が爲すことを許容せよと。兩人答へて曰く、其は何よりも喜ばしきことなり。決して遠慮には及ばざれと。既にして兩人二階に登るの際、不信者は言へり、余は今にして全く安心なることを得たりと。ナセカと信者

は言ひ、それは此家の主人祈をなしければなりと答へければ、然らば君も宗教の必要を蔑する能はず、人の祈るを見て初めて其家に安眠し能へばなりと、信者は言へり、而して彼等は何事もなく熟睡せり、祈禱を以て屋根となし、信心を以て壁となす家の中には、他を害するが如き者の住ざるを確めたればなり、恰も是れアナニアが安全にしてソウロの家に入り得べしとの保證に異ならず、されど之よりも尙優りたるものあり、ボウロの信實に對する論證ぞそれなる、隠微の祈は眞信心を試す最良の法なり、もしイエス、アナニアに告るに、見よ、彼は説教しつゝありとの語を以てしたまひしならば、彼答へて云はん、縦し説教するにせよ、彼は偽善者なるやも計り難しと、もし又告ぐるに、彼は教會の集會に行きたりとの語を以てし玉ひしならば、アナニアは答へて、彼は狼が羊の皮を被りしが如く集會しならんと言ひなるべし、されど、見よ、彼は祈りて居るとの一言を以てし玉ひし故に、論證はそれにて十分なりき、一人の青

年わが下に來りて、語るに既往の感覺と行爲とを以てせり、余は聞き卒つて云へり、跪きて且祈れと、われ過たれば祈るも詮なしと、彼云へり、されど、われ押返して、決して氣にかくる勿れ、祈れは必ず効ありと、彼は其膝を屈めて坐り、彼は一言の語もなく、既にして呻吟きの聲を漏しつ終に、彼は主よ、罪人なる我を憐み玉へ、われは罪人の頭なり、我を憐み玉へと吃り出でたり、而してのち余は稍満足を感じて云へり、余は君の話せし言語に氣を止す、余は君の祈禱を要めしなりと、されども、もし余が彼の家に戻るを尾して、彼が其閑室に唯一人祈を見たらば、余は初めてこゝにその實なるを確むなり、それは密室に祈る人は誠のクリツチャンなればなり、たゞ儀式的の經文を毎日に讀めばとて、神の子たる證據とはならず、唯、卿等にして隠微なる處に祈るを得て、初めて眞の信仰ありと謂つべし、小き信仰も、もし眞實ならば、これ山の如き表面の信仰に優るなり、家の内の敬虔は、最良の敬虔なり、祈ることは汝をして罪に遠からし

め、罪を犯すことは、汝をして祈に遠からしむ、至情に於ける祈禱は、改悔の誠實なるを證す、人は眞面目になる事を得べし、されど眞面目に過をなすことあり、見よ彼は祈りて居るとは、ボウロの眞面目にして而も過たざるを示す最良の保證なり、人あり余に、基督教の要如何と問ふものあらば、余は一言以てこれに答ふべし、曰く、祈禱ともし余に、クリツチャンの實驗を概括すれば、知何と問ふ者あらば、祈禱と答ふべし、人は祈をなし能ふ前に、其罪を確認せんばあらず、人は祈をなし能ふ前に、其身を希望の光を認めずんばあらず、實に凡ての基督教道徳は、祈てふ一語の中に藏めあるなり、只余に告るに君は祈禱の人なるを以てせよ、余は直ちに答ふべし、君よ、余は君が信仰の眞實にして、且至誠なるを疑はずと、(三)是より適用のことを單簡に陳て、今朝の集會を終へんと欲す、まづ神の子女たちに勸をなすべし、わが愛する兄弟よ、神の子女たる證據は、われらの信仰に由て、最もよく顯るゝにあらずや、見よ彼は祈りて

居ると、然らば一層われらが祈禱に誠實なる程、一層われらの證據は輝くものなり、恐くは今朝、卿等の中に、此證據を失へるものあらん、それ何處にて失ひしぞや、見よ卿等は之を其密室に於て失へり、いつにてもクリツチャンの迷ひに入るは、其第一步を密室の中に初むぞかし、これ余が實驗したる所なり、余はしばしば神の前より越起したり——決して墮落には至らざりしも、而して余はしばしば神の愛の甘味を失つたることあり、余は神の家に教を説んとて、火も能力もなくして登り行きしことあり、余は聖書を讀き、而して一の光をもこゝに見ざりしことあり、余は神との交を試き、而も凡て無効なりしことあり、而して余が此の如き有様に到りし、第一步は實に密室に於て初まりしなり、密室の祈を息しによるなり、見よ余は此處に立つて余が罪過を懺悔す、ア、キリストの徒たる者よ、卿等は幸福ならんことを希望するか、祈に熱心なれ、勝利を得んことを希望するか、祈に熱心なれ、ミセス、ペリー曰く、余は百の世

界を以て身の代とせらるるも、余が密室より引出さるゝことを首肯じと。
 ミストル、シェー曰く、もし十二使徒が汝の近隣に住ふありて、汝は彼等に交通ことを得るとするも、もし其交通にして汝を密室より遠ざからしむるものなりせば、これ彼等は汝の靈魂を害ふものたるを知るべきなり。祈は富なる貨物を搭載きたる船の如し、祈は最も澤山なる穀物を産する沃土なり。兄弟よ、汝が朝起きいづるとき今日の仕事實に切迫り、祈もろくにするの暇なしとて、匆々世にいで、業につきし日は如何、今日は失敗の日なりきとは、其夕方の怨言にてあらざりしか。是れ神と交らざりし結果なり。余は當今祈禱を重んぜざる教會に對て説をなさるべし。余は當市中の各教會に於て其説教の時は随分多き會衆を見るも、其祈會の時には實に僅々なるを知る者なり。此の如き有様にして、神いかで我等に其靈を注ぎ玉ふことあらんや。ア、兄弟よ、卿等は皆其自らの教會に往け。卿等は皆それ〱其屬する教會あるにあらずや。余は

他の教會の信徒を盗むことを好まず、されど此を去るに臨んで祈の更に必要なるを感じて去れ。去て自らの教會に往き、往きて其牧師に告て、曰へ「君よ、われらは一層祈禱を盛にせざるべからず」と、又其兄弟たちにも爾か告げよ。もし祈禱會を催ふして、汝唯一人なるときも、人の汝に幾人の會衆ありしやと問ふものあらば、四人、四人と答へよ、ナセかと問ひかへせば、我自らと、父の神と、子の神と、聖靈の神とにて、我等はいと有益なる集會を得たりといへ、ア、神よ、われらを凡て警醒させ給へ。我等に祈の精神を起させ玉へ、そは我等祈に由て世に勝ち得ればなり。余は今朝卿等をもつて、祈の火を撒散らす使者となさんと欲す。余は余か語によつて凡ての教會に烈火を投じ、神の前に犠牲の燃ゆるか如く燃しめんことを欲す。もし卿等祈ることを得ば、これクリツチャンたるの證據を持つなり。少しく祈れば、少しく其證據を持つなり、而してもし全く祈ることを怠り去らば、これ呼吸することを止めたと同然にして、

恐くは再蘇生の機なからん終りに臨んで未信者の諸君に一言せん。ア
 、かた／＼よ余は此處に於て諸君に見ゆることを最喜となす。そは諸
 君に神の道を傳ふるは信者に傳ふるより更に嚴なる業なればなり。さ
 れど諸君に説教するに或困難あるはわれらの信する所而も亦諸君の
 靈魂を得んとするは我等の最熱望する所なり。余は自ら感ず城門を守り
 つゝ睡眠に襲はれし番兵の如しと、我は如何に刻苦して自らを警醒せ
 んど欲するかよ。而も肉體弱きがために挫折せんとす。我は意志に乏し
 からず唯實力に乏し、ア、聖靈よ、我等を強めて此罪ある人々に教を説
 しめよ。もし神われに命じて枯骨に語れ、されば生んと示し玉ふも、余は
 之れをなさんと欲す。然らずんば余は此本心に責られ、且神に罰せらる
 べし。今余はあらん限りの敬虔をもて絶叫すべし。祈なき靈魂はキリス
 トなき靈魂なりと。夫祈ることをせざる者は世にありて神なく、望なく、
 又イスラエルの籍にあらざるものなり。試に諸君に問はん、諸君は嘗つ

て自家境涯の如何に恐ろしきかを考へしことありや、諸君は神に遠ざ
 かるが故に、神これを怒玉ふ、そは神は姦惡なる者に對して日々怒り玉
 ふとあればなり。ア、罪人よ、汝等顔を擧げて神の稜威を拜し奉れ、而し
 てわれ汝等に要む暫らく目を瞑つて來らんとする事の真相を考へよ
 と、注意せよ諸君、もし一死萬事終るものならば事なしと雖ども、そは決
 してなき事ぞかし。もし祈ることを知らずんば、地獄は限りなく其身に
 附き纏はん。ア、諸君、もし此非境を脱れて、祝福者の數に加はらんと欲
 せば、其道は只祈禱にあり。――イエスに祈るにあり、聖靈に祈るにあり。
 「主は惠深くして憫みに満玉へり、ア、我もし今日一人の靈魂を救ひ得
 たらは余は満足して家に歸るべし。もし二十人の靈魂を得たらば余は
 喜びて樂まん。更に多くのものを得たらんには、更に多くの冠をわれ戴
 む。われ戴かむや否な。われは凡てこれをイエスの足下に捧げ、且云べし
 「わが爲にあらず、只汝が爲に、凡ての榮光永遠にあれ」と。

祈りせよ

かみのめぐみは

かねてより

いのらはきかむ

定めなりせば

祈りせむ

祈りのこえの

つきぬ間ぞ

いのちの息の

通ふひまなれ

監督フヒリツプ、ブルツクス博士

博士はウヰリヤム、グレン、ブルツクスの第六子、千八百三十五年十二月十三日を以てポストンに生る。十六才、ハツワード大學に入り、廿歳業を卒業、續でザアノニア神學校に入り神學を學ぶ、其按手禮を受けて教職となりたるは、實に氏が廿四歳の時なりとす。始め降臨教會の牧師となり、後ポストンなる三一教會に教會の任を負ふ。爾後凡そ廿年の間偉大抜群の牧師として、稀世の大説教者として、其名米洲の内外に鳴れり。千八百九十一年四月撰ばれてマサチエーゼットの監督に擧げられ、同十月職に就く。而して此時を去ること未だ二週年に滿たずして、千八百九十三年一月廿又三日溘焉として逝て天上の人となりぬ。博士軀幹長大、骨格強壯、宛然たる巨人なり。音吐囁明にして辨舌極めて疾急、其説教は恰も閃電の端倪すべからざるが如し、而かも衷に仁愛の氣溢れ、且つ深

く人情の奥底を穿つものから、幾千の聽衆感激せざるはなし。博士の到る所何れの場所も聽衆雲霞をなし、開會一時間前に至れば、既に滿場立錐の地なし。博士胸宇洞開、隔壁なし、且つ眞實にして深く人を愛す。天主教徒より以て唯一教徒に至り皆な敬慕せざるはなし、博士がホストンにあるの間、唯一教徒の轉じて聖公會に入るもの數を知らずと云ふ。

新にして更に大なる奇蹟

フヒリツフ、ブルツクス

警者の目を啓きたる此人にして彼を死さらし
むること能はざりし乎

(約十一〇三七)

古來基督教に對して起りたりし多くの事件は、是皆其始め基督の一身に對して起りたりし事にてある也。今に至るまで基督教が世より受けし、凡ての歡迎、凡ての擯斥、凡ての熱愛、凡ての嫉惡、并に凡ての難問等は皆な皆て基督を煩はせしものにてありき。世の救済は果してイエス、キリストによりて遂げらるゝ者なりやとの疑問は、在昔施洗のヨハナがキリストの許に遣はせし使者たちの來るべきものは汝なるか、又は吾等他に俟つべきかと云へりし言によりて發せられたり。基督教が世を克ち服へんどの大なる自任を有しながら、人に輕蔑され、其足の下に踐

み踰らるゝを嘲笑するの聲は是れ主が十字架の上に在せし砌、汝若し神の子ならば今十字架より下りよと罵りしもの、聲と同一にあらずや。人の其社會上の地位、并に其遺傳等を鼻にかけて、基督教を蔑にするものあるは、是れ曾て基督に對ひて、汝は吾等の先祖アブラハムよりも大なるや、汝は吾等に此井を與へし吾等の先祖ヤコブよりも優れる者なりやと叫びし者ありしと、豈等しからずや、抑も亦た基督教の起原に就きて彼是の論難をなし、斯の如きの宗教豈能く世を救ひ得むやと云ふものは、是豈ナザレより何のよきもの出でんや、尋ね見よ、豫言者はガリラヤより出でざる也と云へる舊論の再び新衣を裝ふて出で來れる者にあらずや、げに今日基督教の受くる諸の論難は、是れ在昔基督の上に來りし同一の論難たるに過ぎざる也、而して固は是れ實に基督の生きて、實在し玉ふことの徴證にして基督教なるものは即ち單に基督自身の擴張され、永續せられたるものに過ぎざることを示すものたる也。

基督嘗て或處に於て、智者の目に觸れ、是に明を與へ玉へりき、此後暫時を経て再びキリストの助力を要するの事こそ起りぬ、そは他ならずベタニヤのラザロの重き病に罹れりし事にてありき、然れども主は彼を癒し玉はざりき、其側に來ることだに爲さずして、彼をして死せしめ玉へり、彼が葬むられたりし墓邊に集ひし人々の心には、こは何故なるか、彼は何を以て奇蹟を行ひ玉はざりしかとの疑問は、必然に起りたりき、智者の目を啓きたる此人にして、彼を死なざらしむる能はざりしかどは、げに尤もの疑問とこそ云ふべけれ、されば死者の姉妹なるマリヤとマルタも主に面したりし時、主よ、汝若し此處に在したらむには、わが兄弟は死しまじものをと叫びぬ、げに主が奇蹟を繰り返し玉はず、彼の生命を保たしめ、人々の悲痛を止め得るの力を用ゐ玉はざりしことは、凡てこゝに集へり人々の奇怪に堪へざりしことにてありけり、斯くて彼等は様々の惑に襲はれたらむ、彼等の或者は、彼は實際智者の

目を啓きたりしか「吾等の誤まれたるにはあざりしか」と疑ひたり
 き。或者は主がラザルを顧み玉はざりしものと思ひて、主若し彼を顧み
 玉ふの聖旨ありしならば彼を助け玉ふべかりしなりと云ひき。然れど
 も以上の二者よりも優れる推想を懐けりしものもありしなり、彼等は
 自ら解して思ふに此人をして死なざらしむることは最大の恵にては
 あらざりしならむ。故に耶蘇はラザルを愛し玉ひ、また彼をして死なざ
 らしむるの力を有し玉ひしかども、自ら是を撰み玉はざりしなり、恐ら
 く前の奇蹟にあらずして更に優れることを爲し玉ふにやあらむと思
 ひたりき。兎に角イエスの力と愛心とは彼等に取りて未知の問題にて
 ありき。

此最後のものと前の二者との間には固より明かなる相違あり一はイ
 エスを信ずるなり、他は即ち試験と吟味の中にあるものなり。げにこゝ
 は道の岐れ目なり、或者は此方に向ひ、或者は彼方に向ひ、或者は即ち岐

路に立ちて躊躇するの處、或者は愈大なる信仰に達せんとし、或者は即
 ち懷疑の中に彷徨せむとするの處たり。あゝベタニアなる一墳墓の邊
 り人々群がり立ちて、何故にキリストは彼等の待ち望む所をなさしり
 しかを怪しみ、或者は信仰により、或者は不信仰により、各其解説を試み
 んとするの處、何ぞ其光景の奇なるや。

抑も斯の如きの光景は吾人が屢見る所のものにあらざるか、是れ今余
 が諸君に語らむと欲するの所たるなり。曾て一奇蹟の行はれたりとせ
 よ、キリストの靈の力の發現せることありとせよ、是を目撃せる所の凡
 てのものは皆な大に喜びて曰はむ、キリストの力の何ぞ偉大なるやと。
 而して以後復た困難に遭ひ懷疑に襲はれ、信仰の欠乏を來すが如きこ
 とあるべしとは、更に思ひ設けざるに似たり。聽て新なる一出來事の起
 るあり、彼等乃ち曰く、何のあそれかあらむ、吾等は能く爲すべきの道を
 知る、昨吾等を救ひ玉ひし主は今も亦吾等を助けむと。然れども主は來

り玉はざる也、其出来事は愈悪しき方に進まんとするなり。是に於てか
 周章狼狽して曰く、キリストは力なくなり玉ひしか、恵を失ひ玉ひしか、
 抑も亦た吾等の誤まりなりしか、昨、吾等を救ひしものはキリストには
 あらざりしか、若し彼れ真に替者の目を啓きしならむには、必ず此人を
 して死ざらしむべきなりと斯くて懸念と疑惑とを生じ以て懐疑に陥
 ある、然れども或他の人々は更に是よりも高き思考を有せり、彼等は曰
 く、思ふに主は再び同一の業を繰り返へし玉はずして更に優れる大な
 る業を爲し玉ふならむ、吾等俟ちて是を見むと、雖て彼等の信仰は義と
 せられぬ、即ち此人をして死なざらしむることを撰み玉はざりし彼は
 「ラザロよ起きよ」と叫び玉へり、而して小奇蹟の行はれざる様見えし所
 に更に優れる大奇蹟こそ行はれたり。
 何れの時代にも此真理の説明に充つべきものは多かれども、吾人は今
 日に於て特に其多きを見る也。蓋し今の時は何れの處に於ても萬事皆

な其舊套を脱して新規に向はんとするの時なり、神が此世を處し玉ふ
 の方法も亦た變更しつゝあるなり、今宗教思想上の困難に就て是を考
 へよ、過去に於て大なる難問の起りし毎に如何に屢是に答辯する人々
 の起されしよ、教會の運命が正さに其危機に類するに當り、アサナシア
 ス、アウガステン、ルサー、カルビン等偉大なる人物の顯起するものあり
 て、以て當時の人心に満足を與へ、其難問をして沈靜に歸せしめたりき。
 今は乃ち如何、今日の如く懐疑と論争の甚だしき時は未だ曾てあらざ
 る也、今日の如く人の真理を求めて困迷せる時は未だ曾てあらざる
 なり、さればにや是處彼處に叫ぶものあり、曰く、過去に於て幾多の勇將
 の起りて、當時の疑問を解説したりし如くに、今日是等の難問に答解を
 與ふべきの勇將は何れにありや、彼真理に逆ひて戦ふ強敵を打ちひし
 む大將はそも何れにありやと、吾人は折節其人來れりとの報に接する
 ことあり、或は從來の疑問、難題を快然一刀の下に裁断すべき或書物の

印行され、或聲の發せられたりとの風説を耳にすることあり然れども是等の風説は常に失望を以て終るなり成程是等の教師是等の書物は以て或特別の點を掃蕩し暴風雨の一隅を靜定することを得べしと雖も朦々たる黒雲は尙は依然として滿天に漲るを覺ふ而して是時に當り或人々の心中には一種新なる希望と推測の起るものあり即ち神は古の人々に與へ玉ひし所のものよりも更に優れるの惠を吾等に與へ玉はんとにもあらざるか疑問に答へ難題を解釋し得べき鋭敏にして技倆に富める首領を與ふることの代りに疑問難題は其儘になし置き人の全性を高尚の地位に進め更に廣き光りに導き一層大にして完全なる信仰に至らしめんとし玉ふにあらざるかとの思想是也補修して住むべくなされし舊信仰と眞理を求むるの人が更に恐るゝ所なく行きて住み得る新信仰との相違——人々の夢みつゝある二種の夢の相違——は斯の如し一のものには信仰の舊軀の回復されむことを望み

彼の疑惑と凡ての不安の如きは曾て人心の是を過りたりし一の暗雲として後ろに見ることを得べしと思ひ曾て是に入りたりし如く遂には是より出づべきものと思ふなり他は即ち信仰の大なる新生を望み不信の墳墓より完き靈の生命の復活せむことを希望せる也今日宗教上の異狀に注目する凡ての人々は必ず右二種の何れかに屬するものたるなり知らず何れか最も高貴なる何れか將來に向て更に優れる希望を拓かしむべき

蓋し斯の如きは常に宗教上の現象のみに止まらざる也何れの社會にも小ならざる動搖と混亂とあり而して或は再び是を補修して舊軀面の回復せらるべきか或はまた其性質の如何を豫言すべからざるも舊來の事物と全く其面目を異にせる一新生命の發現すべきかの問題あるなり人々は云へり曾て社會の組織大に攪亂せられ各階級は互に衝突し治者と被治者の間、僱者と被僱者の間、貧者と富者の間、首相軋轢し

ぬ。然れども遂には自然に調和し強者は和かになり弱者は謙遜になり、治者は一層親切を増し、被治者は漸く柔順となり、以て再び舊の靜平に歸しぬ。彼等また曰ふ、今後また斯の如くならむ。然れども或人々は更に明に事の真相を見るなり。彼の如く甚だしく動搖し、破損せる舊物を修覆し、再び前の如くならしめんことは爲し得べきにあらず。今は是よりも以上の或ものを要するの時となれり。蓋し古きは死して其墳墓より新なるものゝ出で来るを要するなり。強者が和かになり弱者が謙遜する等の事にて満足すべからず。權力の權衡及び分配の上に一大變動を來さざるべからず。治者被治者、備者被備者皆同じ目的を有する共同の働き人とならざるべからざる也。言を換ふれば舊事の修覆にあらずして根本的の革新にあり。是れ實に世の求めつゝある所神の世に與へんとなし。玉ふ所に於て世の具眼者の既に其趨勢を看破せる所たるなり。

吾人常に世の慘狀を思ふて、多くの貧しきもの、餓るもの、裸かなるものに至る毎に心中苦痛を感じ、而して未だ曾て彼の天より「マナ」の降りしこと、「テベリア」湖邊に行はれたりし「パン」と魚の奇蹟を想起し、當今奇蹟を行ふものゝ何くにあるやを怪しまざんばあらず。曰く彼れ曾て餓えたる猶太人を飽せしものは、今饑へたる是等の亞米利加人を救ふ能はざるか。乃ち是等の物語を疑はむと欲し、また神は其撰民ならざるの故をもて是等の民を見棄玉ふにやあらむと思はむとす。斯くて吾等は殆むど失望せむとするに際りて、端なくも一微光の吾人が心を射るものあり。吾人は腐朽すべき「マナ」や「パン」にあらずして更に貴きものあるを見るなり。吾人は古の奇蹟よりも優れる新奇蹟の榮光を見る也。新奇蹟とは即ち目前の困難を取り去るにあらずして、人生の前途をして愈多望ならしむる文明の進歩を云ふなり。吾人は世の慘狀が一旦俄かに取り除かるゝことを望むべからざるも、世は遂に其忍耐と智識の布

及ど、人類間の親愛と尊敬と神の恵とにより、現時の慘狀を脱し得べきこと決して疑がふべからざる也。

過去の奇跡を顧みずして、現今及び將來の奇跡を俟ち望むこと、是豈進歩的生命を有するもの、分ならずや。縱ひ如何に熱心なりとも、徒らに過去の奇跡の再演せられむことのみを望むものは、是れ無用の人たるを免かれず。未來のことは必ずしも過去に於てありしが如くならず、將來の世界は過去の世界と異なれり。政治、社交、商業、教育、其他生活上の趣味も大に變更し、また愈々益々變更すべきなり。獨り神の人を守り、是を導き玉ふ方法のみ古今に通じて同一なることを得べけんや。されば凡ての變動の中に於て神の不變の存することを知るものは、更に恐るゝ所なくして信仰と生命の變化を望むべき也。航海中の船舶は、是迄是を運轉し來れる船長を信じて、新たなる星と新なる風とにより、更に恐るゝ所なく新なる大洋に向ひて進航するにあらざや。

イエスの世に在せし折、如何に屢、吾等が世に於て受くると同一の困苦に逢ひ玉ひしかを見るは、また興味あることならずや。而して殊に其中の二度、將さに來らんとする時より救はれむことを願ひて叫び玉へり。

父よ、此時より我を救ひ玉へ。父よ、若し適は、此杯を我より離ち玉へと。是れ共に其救ひを求め玉ひしなり。父よ、汝我を救ひ玉へり。復び我を救ひ玉へと。是れ其奇跡の再びせられむことを求め玉へるなり。然れども如何に驚くべき哉。此等の語の終るか終らざるに、更に優れる光りは來れり。新なる榮光と更によき奇跡こそ現はれたれ。否、我は此時より救はるべからず。否、此杯を飲まさで、我より離つこと能はず。聖旨に任せ玉へ。父よ、汝の榮光を顯はし玉へ。我が意の儘をなさんとするにあらずと。苦痛を免るゝの奇跡は行はれずして、苦痛に打勝つゝの奇跡こそ行はれた。是より後、彼が希望と祈禱は苦難を免かれむことにあらずして、是によりて世を救はむことにてありき。抑も彼は彼が救ひし世の模型にあ

らずや、是迄世の人がたゞ通るべく勉めし多くの事々も、今は是を遁れずして却て是に打ち勝つべく勉めざるべからざるものあるを漸く悟らむとするにあらずや、即ち今迄是を辭したる義務、或は其力に及ばずとなせし職分も今は是を辭せずして、寧ろ是を成し遂ぐることによりて打ち勝つべきを知るなり、現今世界の最も進みたる部分はイエスの曰ひし如く始は恐れて、父よ此時より我を救ひ玉へと叫びしも、後には大膽に、然れども我は是がために來れるなり、父よ汝の榮光を彰し玉へと云ひつゝある也。

個は舊奇跡の眞實ならざりしがためにもあらず、また其當時のため最良の奇跡にあらざりしと云ふにもあらず、新時代には新奇跡の更に必要にして適當なるがためたるなり。

余は諸君が此處に信仰の大なる相違あることを認められむことを望む。彼のラザロの病めるを聞きて、イエスは前きに瞽者の目を啓き玉ひ

しが如く必ず來りて彼を癒し玉はむと信じたるものは、是れ即ち前きの奇跡を信じたる也。是に反してラザロ縱令死すと雖も、主は更に優れるの恵を降し玉はむと信じたるものは、是れ即ち基督を信じたるものにてあるなり、二者の相違實にこゝに存す。一は神の爲し玉ひし業を信じて、神は再び是を爲し得べしと信ずるものなり、他は即ち是を爲し玉ひし神を信ずるものにして、其必要あるに際しては如何なる他の働きをも爲し玉ふべしと信ずるものなり。一は神の聖業にのみ信仰を置くものにして、他は即ち神の諸の聖業によりて、神自らに達し其全能の力を認め、恰も太陽より常に新たなる光線の發射するが如く、彼れの方より常に新たなる奇跡の出で來らむことを信ずるものなり。一は常に世界の舊態と不動の教會のみを見、他は即ち常に新にしてまた常に前よりも深く且つ豊富に自らを顯はし玉ふ神の新なる顯現なることを示す世界と教會とを見るなり。

兄弟よ、神の聖業を信ずるをもて足れりとすべからず、汝神を信ぜよ、さらば汝將來の出來事に驚かざらむ、また徒らに過去の奇跡の繰り返へざるゝを望まずして常に新にして優れる奇跡を望むことを得む、そは汝の上に、汝の下に、汝の周圍に神の御力の盡きせぬことを感ずべければなり。

余は以上に於て主として此真理の社會に關する點を述べけるが、其一箇人の生涯に於けるも亦た是と異ならざるなり、請ふ少しく是を述べむ、假設ば卿等は是まで多年の間、朝な夕な「主よ我を誘惑に逢はせ玉ふ勿れ」と祈り、其應驗を得て日々を送りしとせむ。一朝忽ちにして一大誘惑の來るあり、おわれ今迄の平安は寸斷に破れけり。是に於て卿等切りに前きの恵を請ひ求むれども得ざる也、是れそも何の故ぞ、前きに恵と思ひしものは恵にはあらずりしか、是れ迄久しき間誘惑を免れ來りしは偶然のことにてありしか、抑も亦た神は卿等を守るに倦み玉ひしか、

是迄久しく卿等を救ひ玉ひし神は復び卿等を救ひ能はざるか、然れども言ふを止めよ、是に次で來るものは即ち新なる恵なり、汝は誘惑にかゝれり、汝の古き安然是は亡びたり、然れども其亡の中より新なる力は來るなり、死より救はるゝにあらず、死して再び新なる安全に於て生くる也、試練によりて教育され、火によりて聖められたる堅固なる品性となりて生くるなり。

常に汝自身のみならず、汝の保護の下にある者に關してもまた斯の如きことあるを見む、茲に汝の兄弟若くは兒女ありて、汝は常に是がために神の保護を求め、而て神は是を保護り玉へり、世の罪惡も彼がために他界の事の如くなりき、不信の風は曾て彼を襲はざりき、汝は夜な夜な神が常に彼を保護り玉ふ奇跡のため、神に感謝しぬ、然るに一日是等のことは既往の夢と化し了んぬ、堅固なる城砦は打壞され、樓檣たる炎は其惑へる靈魂を侵し、不信と懷疑の波浪は逆捲きて彼に逼まり、あ

な恐ろしや、過去の安全と、既往の確信とは、跡方もなく消へ失せけり。是に於て汝は必死となりて前きの奇跡を叫び求むれども、應驗更に見えざる也。何ぞ其光景の慘憺たるや。然れども汝若し古き奇跡の行はるべき日の既に過ぎたるを知らば、是を求めずして、新奇跡を求め、且つ彼が其誘惑を通して入らんとする新生命のために助を與ふべきなり。汝若しイエスがラザロをして死なざらしむるよりも、更に大なることをなし玉ひしを思は、彼が墓より出で來らむとき、其葬衣を解き、是に衣服と食物を與へ、更に新にして大なる生命に彼を歓迎せんがために準備すべきなり。

今請ふ一步を進め、更に適切なる死に就きて考へ見よ、汝其子の生命の助からむことを神に願ひて、再應聞かれたり、或夜暗憺たる孤燈の下に、其愛子の病床に侍し、其脈搏の數を數へ、其切迫せる呼吸に心を傷めつ、切りに神の佑助を請ひ求めり、而して曉に至りて見れば、彼ははや此世

の人にあらざる也。あゝ神は汝の祈禱に對して、啞者となり玉へるか、否々死より救はるゝの奇跡の外に、死によりて生命に至るの奇跡あるなり。神は決して啞者にあらざる也。神と共に生ける汝の子は汝を顧みて曰はむ、屢我を救ひ玉ひし神は今全く我を救ひ玉へり、我は今生く、死よりにあらず、彼は死によりて我を救ひ玉へり、最後にして、最も優れたる、最も大なる奇跡は來れり、我は限りなく生きむと。

キリストはラザロを死より救ひ能はざりしか、キリストは汝を苦痛と誘惑より救ひ得ざりしか、此問に對しては二種の答を與へ得べきなり。彼は爲し得たりき、そは死生の權は彼の握り玉ふ所なればなり。然れども此權を用ふるの力は他に俟つ所なきを得ざりき、即ちイエスは絶對的に優れたることをなさむがために、其他を棄つるの必要ありしなり。若しラザロの死することが最もよきことにてありしならば、彼は是を死なざらしむること能はざりしなり。汝若し其生命の救はれむことを

願ふとも是れ汝のため最良の道にあらざる時は、主は是を與へ玉はざる也。主は汝の祈禱を聴くこと能はざるか然り、能はざるなり、是れ神聖なる不能力とこそ云ふべけれ、汝の願ふ所のこと、が汝のため最良の途にあらざるがために、神の性質と其愛とは是を與ふること能はざるなり。如何に多くの應驗なき祈禱の後面には所謂神聖なる不能力の隠れあるよ。

猶また我等是を心に體せむとせば、前きに云へりし如く、啻に神の聖業を認知するに止まらず、彼れ自らを知るを要するなり。如何に我等は大にして生命あり、愛をもて溢れ、光明にて輝き玉ふ神を換へて、方法、或は規則、或は習慣、或は機關となせしよ。イエスは神に満てる凡て是等の徳と力にて満ち玉ひき、彼は神をして方法又は規則の如く見えしむることとを爲し玉はざりしなり。而して吾人の宗教、吾人の神學、吾人の教會政治等は常に再び彼を死法の如く見做し去らむとするなり、吾等は如何

に屢其全生涯を神に信任することを意味する信仰なる大なる語を誤解して或一定の教理を固執することなりと思ひしよ。如何に吾等は神の奇跡を神の既往になし玉ひしこと、の區域に限り無限の愛無限の力、無限の神の與へ玉ふ所なる常に新なる光りと恵と救とを仰ぐことをせざりしよ。

今汝等が心の蒙を啓け、神はいつもく過去に於て爲し玉ひしことのみを爲し能はざる也、彼は新たにして更に大なることを爲し玉ふなり。思ひ見よ、ラザロの甦へりてベタニアにありし多くの人々と共に坐せし時には家の内は皆な神を敬ふの念にて嚴肅なりしならむ、而してリストが彼をして死なざらしむる様なし玉はざりしこと、が如何によく思はれけるよ。思ふに汝等も何れの處かに於て、何れの時か、神が汝のため前きの恵を繰り返さずして、汝の靈魂に一層適切なる更に大なる恵を與へ玉ひしこと限りなく感謝するの日は必ず來らむ。

人生の眞面目

神の我儕に語り玉ふことあらざらしめよ、恐らくは我儕死なむ。

出埃及廿章十九節

希伯來人等は埃及を出で、西乃山の前面に來りぬ。全山煙と火にて滿ち雷聲殷々、其中に響き、大なる喇叭の音は空中に鳴り渡りぬ。四面の光景いと嚴肅にして、自ら神の在すことを證するに似たり。彼等は懼れ戰慄き、モーセに來りて神と彼等の間に立たむことを請ひ、汝我儕と語れ、我儕是を聞かむ、たゞ神の我儕に語り玉ふことあらざらしめよ、恐らくは我儕死なむと語りぬ。
今彼等に語らむとし玉ふものは是れ彼等の神にあらずや、埃及の地より、奴隸の家より彼等を救ひ出し玉ひしの神にあらずや、彼等は今眼前此神を拜し奉り、其聖語を聽かむとす、彼等は大に喜ぶべきの道理にあ

らずや、何を恐れてかモーセの仲保を要せむや、一見彼等の感情は大だ奇怪の如く思はるゝなり。
然れども是れ實に人情の自然たるなり、希伯來人等は神の恵を喜びたりき、彼等は曾て歌ひつゝ、紅海を渡りぬ、或時は火と雲の柱に導かれ、また其饑えし時は神より食物を賜はり、また其首領としてモーセを與へられぬ、併し彼等は今直接に神の聖容を拜すべく呼ばれたるなり、彼等が外面上の生活の後部なる其中心に到るべく呼ばれたるなり、其諸の幸福なる結果を賜はりし秘奥にしていと大なる原因に來るべく呼ばれたるなり、是に於て彼等は畏縮したり、彼等曰く、否我儕の生路をして怖るべく、嚴格ならしめされ、我儕はモーセが其前に到り、我儕に其使命を持ち來さむことを願ふ、たゞ我儕をして彼の前に出づることなからしめよ、神の我儕に語り玉ふことあらざらしめよ、恐らくは我儕死なむと。

余は今諸君が是れ實に自然にして最も普通なる人生の傾向なることを知られむことを望む、蓋し世に人生の餘り瑣末にして價値なきに至らむことを嘆ずるものは極めて少く、多くは皆其餘り嚴格に餘り重々しく、餘り深酷に過ぎむことを恐るゝ者なり、人は皆多少斯の如きの恐れを有せざるはなきなり、見よ吾等は常に人生の原因を見ることが選けて結果の後に隠れ、人生の意義に達せずしてたゞ出來事の上に留まり、其原理を究めずして事實に満足し、神を見ることをせずして人を見る也、されども箇は眞に憐れむべきの次第なり、人生の眞の安全と幸福とは其吾等に開示さるゝに當り、大膽に其奥底までも達觀するによりて來るなり、明白に事物の眞意義を穿つによりて來るなり、死にあらず生命——完全にして圓滿なる生命——は神をして吾等に語らしめ彼の語り玉ふに當り、熱心是を傾聽するによりて來るなり、是等の理由によりて余は是節の中に大に學ぶべきの意義あることを信ずるものなり。

今既に云へるが如く、世間一般の人々は人生の皮相にのみ拘泥せるなり、彼等は彼等が關せる事物の外皮より以下には達せざるなり、彼等は曾て人生の眞意を解せざるなり、彼等は常に是等の深奥なる物事に會する時には、其面を背けて遁れ去るなり、神の彼等に語り玉ふことを欲せざるなり、是れ豈悲しむべからずや、夫れ道理上深き處に用ゐ得べき能力を有し、また是を用うるの機會を有するものが、常に皮相の上のみ是を用ふる時は大なる害を受くることを免かれざるなり、人若し一面の識あるのみにて、また餘り人に卓れたる所なき或人と通常のこと、に就きて相語るとも、是がために害を受くることなかるべし、されども若し深遠にして偉大なる人物に久しく相接しながら、其中心に立ち入ることをせず、彼より來る所の感化を拒ぎ、たゞ其外部のことのみよりにて彼に交る時は、到底害を受けざるを得ざるなり、汝若し一の小兒の

大人物と共に住みながら、常に其心を閉ぢ、其高き感化力に反對するを見なば、寧ろ是よりも劣れる人々と共にあるの優れるを知らむ。犬賢者と共に住するとも、舊の犬にて止まらむ、それは彼は其知慧に抵抗せざればなり。然れども愚昧にして無情なる人物、聖賢と共にありて尙ほ己が性癖を固守せんとせば、其知慧を輕蔑し、擯斥するによりて、其無情と愚昧とは愈甚しきに至るべきなり。

吾人は今此理を人生の上に適用して講説する所あらむと欲す。吾人は一方に於ては、物質的、皮相的——金錢を儲け、パンを食ひ、遊戯をなす等の材料と機會の外人に供せざる世界ありと考ふることを得べし。斯る世界にありては、吾人は皮相的の生活をなすも、固より害を受くることなからむ。また一方に於ては、吾人は物質的、皮相的のことの外、更に事物の原因等に就きて思考するの能力なき人間ありと考ふることを得べし。斯る儕は此深遠にして、莊嚴なる世界にありて、淺薄なる生活を

なすとも亦た害せらるゝことなからむ。然りと雖も能く其思を高妙の點に馳せ得べき能力ある人類にして、此幽玄なる世界に住しながら、尙ほ皮相的の生活をなし、其幽玄を避け、其問題に面を背け、其中より語る所の神の聲を拒むものは、是れ實に自ら害するの甚しきものたるなり。そは是れ其用ゐざるの能力を殺すものにして、人をして其特權と義務との叛逆人たらしむるものなればなり。思ふに人生の一部を取りて是を考へば、更に明白に知ることを得べきなり。今請ふ宗教上の生活に就きて是を言はむか。夫れ眞誠の宗教は人の精神にあり——其愛と神に對する服従とにあるなり。然れども其皮相的の部分も亦た是れあり、先づ始めに眞理の論證され、其受け容れらるゝことを要す。而して更に皮相的なるは種々の規則儀式の如きもの是なり。試に宗教を信ぜんとして、是等の皮相的の部分に自らを限り、夫れより上に進むことを避くる者ありと想像せよ。彼は信經を學びて

能く是を誦するなり、彼は其儀式を習ひ覺えて是を實行するなり、而して更に深き宗教の聲ありて、測り知るべからざる深みより彼を呼びて、來りて汝が靈魂の狀を悟れ、來り、悔改を通して聖きに入れよ、來りて神の聲を聞けと云ふ者あれば、彼は退き去らむとするなり、彼は己れと、其切なる招きとの間に斷定説と儀式とを積み重ねて言はむとす、神の聲をして是等を通し、鈍く和かにして我に來らしめよと、また彼がためのモイゼなる僧侶や、禮典に向ひて叫び曰はむとす、神の我に語り玉ふことなからしめよ、恐らくは我等死なん、汝我に語り、我れ是を聽かむと、斯の如き有様にて彼は害せらるることなきか、思ふに彼が得べくありし更に深き靈の能力を失ふのみに止まらざるなり、彼は其前に最も幽玄なるものあるを知りながら避けて是を取らざるがため、其生活をして不安ならしめ、卑怯なる懸念を以て滿たされんとするなり、彼は其閉ぢ出したる精神的大洋の其限界を徹して注ぎ入ることなからむ、襟常に

配意せざるを得ざるなり、試に其反對を想像せよ、彼は其耳を啓き且つ叫びて曰く、主よ語り玉へ、汝の僕是を聽かむとすと、斯くて彼は無限にして永遠なる人生の眞狀を開示されむとするなり、彼は其忠信なる導きのためにモイゼ——僧侶教會斷定説——に感謝すべし、然れども彼は常に直接に神に咫尺しつゝあるなり、其安全強固、事物の根底に確立するの感をも、如何なるべき彼がためには思ひ懸なき暴風の立ち起るべき不安の場所は天地になきなり、空は彼の上にと清平にして、海は其前にいと潤かに見ゆるなり。

オ、愛する我友よ、汝の宗教心をして神より以下の或物をもて満足せしむる勿れ、汝は汝の靈魂を彼に置き、而して彼の聲を聞けよ、秘奥なるがため、威嚴あるがため、或は又大なる經驗と共に來るべき疑惑と困難を恐るゝがために、信仰の皮相上の事物に避場を取ること勿れ、岸に繋かれむよりは、寧ろ洋に出で、破船せむに如かず、機械的の儀式に離

顯し、古傳の信條を弄するをもて満足せむよりは寧ろ神の威光ある御
 聲に取圍るゝの勝れるに如かざるなり。されば汝靈魂上の大なる經驗
 を求めよ、神の是を送り玉ふに當りて面を背けて走る勿れ、神は必ず是
 を送り玉ふべければなり。
 蓋し斯の如きの必要と危険とは思想界の全體を通じて是あり、人若し
 吾人が住する此世界に就きて研究をなさむとせば、彼は先づ幾多の事
 實を見出すべし、而して此幾多の事實をば理法なる名稱の下に整理し、
 其後又た幾多の理法をば勢力の名を以て統一するなり、而して彼は此
 に其歩を止め、夫より以上には進まざるなり。彼は恰も機械の音喧しく
 海上を進航せる汽船の下に破浪怒號の聲を聞くが如く、いと幽かに其
 下なる深みより結局原因と有心的の意匠との聲を聞くなり。人若し彼
 に向ひて、汝が理法と云ひ、勢力と云ふものは即ち可なり、然れども是
 れ共に終局にあらず、汝は未だ事物の大原と根本とに達せざるなり、更

に一步を進みて、神をして汝に語らしめよと云ふものあらば、彼は答へ
 て、否、是れ事物を攪亂するなり、吾人が其順序を整齊して明瞭ならしめ
 たるものをして再び混亂に歸せしむる也、神の我儕に語り玉ふことあ
 らざれ、恐らくは我儕死なんと云ふなり。爾ふ自然研究の結菓を思へ、吾
 人若し宇宙の由て支配さるゝ所以の方法に就きて深く研究を加ふる
 ときは凡ての方法、管理、機關等の後面に常に萬物の眞髓なる有心者の
 意志と其性質の活動せるを聞くなり。此の聽く所の者を稱して或は科
 學と云ひ、或は詩と云ふ、固より其何れにても不可なきなり。若し是を詩
 と曰はんか、是れ科學を詩歌的の方面より云ふ而已、若し是を科學と曰
 はんか、是れ詩の虚構にあらずして完全なる眞理なるを云ふ而已、而し
 て此二者は神の御前に於て宗教の中に全く相一致するなり。さらば吾
 人は神を畏縮するに及ばず、却て彼を知らむことを喜び、彼に於て其凡
 ての智識と光明と調和とを得べきなり。

凡ての動機に就きても亦た然り、如何に人々は深遠なる動機より畏縮するよ、如何に彼等は其働作の根原は事物の永遠の基礎、神の存在にあるべき筈なるに、自ら瑣細なる皮相上の理由のために働作しつゝあることを言譯するよ。我若し或人に問ふて、汝は何故に彼貧しき人に銀貨を與へしやと曰はば、彼が困窮の状を見るに堪へざる等、其他一、二の理由を以て是に答へん、我また何故に汝は日々營々として其業務に従事するや、何故に爾く熱心に勉學に身を委ねるやを問へば、彼れ必ず答ふるに世の富を進むること、或は其他一、二の理由を以てせん、然り是れ皆な眞なり、然れども是れ瑣々たることなり、是實に凡ての働作の由て起るべき正當の根元に其根を掘ふることを拒むものにして、其結果は人生をして淺薄ならしめ、人をして人生の價値の何れにあるかを解するに苦しましめ、時としては人をして人生の希望を失はしめ、また時としては人をして斯ることのために生活するの如何に恐るべきかを考ふる

る毎に戰慄せしむるなり、然れども彼の少數なる神の小供等の如く彼を愛するがために凡てのことをなす所のものに於ては、曾て斯くの如きの恐れあることなきなり

人或は吾人が説く所を聽きて誤解するものあらむ、是れ人生の自然に逆ふ者にして、斯の如きことを勉むるの結果は、人をして徒らに不安心と不満足を重ねしむる而已なりと、而して曰はん、請ふ吾人をして靜かに且つ自然ならしめよ、さすれば凡てのこと宜しきを得んと、然れども其實は人生の森嚴と深奥とを感ずること、人の天性たるなり、されば何人と雖も神を見出し、是に頼り、斷えず是と相語るにあらざれば、眞誠の平安を得る能はざるなり。

蓋し斯の如き誤謬は人を正當の價値より低く見るより生ずるなり、神の我に語り玉ふことあらざれば、恐らくは我死なんと人の叫ぶは、是れ恰も魚叫びて、我を水に投ずる勿れ、恐らくは我れ溺れんと云ふが如く、或

は又た驚の呼びて、太陽をして我が上に輝やかしめされ、恐らくは我盲せんと云ふに似たり。元來人は神と語り、神と語り、神と交はり、永遠にして完全なるもの、手より直接に其思想と、其標準と、其動機とを得ることは、是れ死にあらざりて却て眞の生命たるなり。吾等は生涯の間少くとも一二度は凡て中間にあるものを取除かれ、直接に赫々たる神の聖容を仰ぎ奉ることを感ずるなり。是時に當りて我等は其如何に己が天性に適するを感ずるよ、我等は嘗に死せざる而已ならず、未だ嘗て覺えたることなき最上の生活なることを悟るなり。而して吾人が此經驗を去りて復び平常の態に復せんとするに當りては、乃ち其自然ならざるを覺え、恰も清冽の大氣を呼吸したりし山嶺を去りて、幽谷に降り行くが如きの感あるを知るなり。

今右に述ぶる所の者は人の生涯の最高潮に達したる時の消息なり、されば是れ最高の生涯を送れる人々の消息たるなり、特に全人類中最高

の生活をなせるキリストの消息なりと謂ふべきなり。人々は神の我儕に語り玉ふことあらざれ、恐らくは我儕死なんと曰ひき、而して茲に唯一の人なるキリスト來りぬ、而して神は斷へず彼と語り玉へり、彼は是がために死せずして最も優れる生活をなし玉へり、彼は其の父の聖旨にあらざれば何事もなさず、また何事も考へ玉はざりき、彼は常に目を擧げ蒼穹を通して語り玉ひき、而して常に其應答を得玉ひしなり。彼はイストラヘル人の如く、神の我に語り玉ふことあらざれ、恐らくは我れ死なんと曰はざりき、オ、神よ、我に語り玉へ、我是によりて生命を得んとは、是れ彼が彼をして窒息せしめんとせし會堂や、宮殿を出で、其俗氣に満ちたる市街を出で、愚昧なる反對者、又は其弟子等の爭論等より身を脱し玉ひし時の祈禱なりき。

世往々にして斯の如き偉大なる人物の出づるあり、彼は自然にして生命の眞の泉を飲み眞のパンを食ふなり。汝等が皮相界に離脱する處に

彼は其眞髓に入るなり、人の其便宜如何を考ふる處に彼は其正邪如何と問ふなり、蓋し彼が斯の如く神聖界に身を活かす所以は其中に生命の滿てるを以てなり、箇は彼を一見するもの、承認する所なるべし。歴史を學ぶ所のものは、他の時代又は人種に異なりて深奥なる生活をなす或時代又は人種あることを知るなり、例へば希伯來人の如し、神の御聲は常に彼等の耳朶にありき、縱し彼等は往々誤解して彼等自身の思想と希望の反響に過ぎざるものを神の御聲なりと思ひなせし事もありと雖も、是を聞かむとの願ひは常に彼等を離れざりしなり、而して我等は亦た清教徒時代のことを想起せざるを得ず、彼等の時代に於ては事皆事物の根底に達し、凡ての皮相の物は取除かれ、人皆直接に神と相接しぬ、彼等は神の御前に立ち、其御語を聞くことを怖れざりしなり、彼等の居室、彼等の會堂等、到る所皆な警虔と嚴肅の氣にて充ち溢れぬ、顧みて是を現時の傾向に比較するに、其相違如何ぞや、少くとも現今の

或部分との間には大なる相違あるなり、蓋し今の社會は其中に種々の原素を有するが故に是を概説し去る能はざるものあり、儘かに其中に清教主義の分子を有するなり、其預言者としてカールライルを有したるの時代、奴隸廢止の爲に義戦をなしたるの時代は必ず其中に清教的の精神を有せずんば非ざるなり、然れども請ふ他の方面を見よ、如何に其事物の本原と神とより遠ざかりてあるよ、吾人其潮流を見るに、道徳は多く便利主義の傾向を有し、社會はたゞ快樂を得るより他に高尚なる冀望を有せず、文學や詩歌は其高遠なる問題を離れて、たゞ卑近淺薄なる記録とならむとし、時としては往々猥褻に流れむとすることすらなきにあらざり、而して其美術の如きも亦高邁逸出のものあることなきなり、凡そ是等の現象によりて其精神を察すれば、吾人は少くとも是等の方面より、恰も古へのヘブル人の神の我儕に語り玉ふことあらざれ、恐らくは我儕死なんと叫びたると相似たる叫びの發せらるゝことを感

せざる能はざるなり、要するに今の人多くは神の住み玉ふ所なる事物の眞髓と根本とに達することを恐れて、其皮相と末葉の間に齟齬として拘泥しつゝあるなり。然れども是等のもの、事物の眞相にあらざるは汝等の既に聞ける所なり。是等のもの、後面に正義と恩恵とあるなり、凡ての事物の背面に神が在ますなり。汝は彼れの御聲を聴かざるべからざるなり、彼は汝に語らむことを欲し玉ふなり。されば汝彼れの御聲に其耳を閉づることなく、生命を得んがためには傾聴すべきなり。宗教上の事に至りては特に然りとす、信仰上の偉大にして深奥なる事物を避くることなくして、却て是を求めよ。多くの人は好みて宗教上の淺膚にして力なき書物を讀み、凱切にして勁烈なる彼等の聖書に面を觸ることを欲せざるなり。彼は常に教會は如何に組織さるべきか、其政治は如何にすべきか、禮拜の式は何様にすべきか等の外部の問題にのみ心を勞するなり、而して其靈魂の救拯永遠に至るの準備等の深奥に

して嚴肅なる問題よりは畏縮せんとするなり。神と人の靈魂との關係を意味する宗教に於て、神の我に語り玉ふことあらざれば、恐らくは我れ死なんと云ふ恐怖の叫びを聞くは奇怪の極とこそ云ふべけれ。然れども記憶せよ、汝の衷に缺けたる平安を得んとするには到底神に近きて面、面と相接せざるべからざるを。汝は神の世界に居るなり、汝は神の小供たるなり、是等のことは到底變更さるべきにあらず、汝の平安と幸福とはたゞ是を受け是中に於て喜ぶによりて來るなり。されば神の汝に語り玉ふに當りては敢て恐怖することなく、汝が全幅の力を奮つて是に接せよ、而して心を籠めて是を靜聽せよ、是に於て始めて凡ての不安と不調和は去り、全き平安と全き調和とは來るなり。

余は今是等の事に就きて特に青年の注意を請はんと欲す、請ふ始めに於て汝の生活の理想を高きに置けよ、神の汝に語り玉ふことを待ち望め、夢にも人生の嚴肅なることより背き去る勿れ。是に於てキリスト

に來りし所の幸福は亦た汝に來るべきなり、汝はキリストと等しく、
「バ」のみによりて生きず、神の口より出づる諸の語ことばによりて生くるもの
となるべきなり。

プシチル

博士ハレンス、プシチルは米國有名の神學者なり、年二十五にしてエール
大學を卒業し、のちハートフォード組合教會に牧師たること二十四ヶ
年、師が抱持せる神學說に就ては、大に物議を起したることありしと雖
ども、斷乎として動する所なく、師は實にキリストの爲に至誠を盡した
るなり、千八百二年四月、コネチクチュット州リツチフィールドに生れ、
千八百七十六年二月十七日死す、享年七十四、

無覺の感化

是に於て先に墓に來れる他の弟子も入り、これを見て信ぜり

フシテナル

この輕微なる事實も、これを精細に察するときには、キリスト教理中の最も大切にして且最も有益なることを吾人に開示すなり、蓋し人は互ひに相知らざるの際に、互ひに相感動せらるゝものにして、爾かといふ目的なく、此れといふ知覺もあらざる間に、常に他を導きて己が後に隨はしむる也、ペテロが疑ひを抱ける兄弟に先だちて墓に突入しとき彼の疑へる者をも其後に隨はしめんとは、彼の少しも考へざりし所ならん、又ヨハナがペテロに隨つて墓に入りしとき、其兄弟をも後に隨はしめんとは、ヨハナの少しも考へざりし所ならん、恰も此の如くにして、われ知らず世界の人は、互ひに相導き相導かれて、身の行を立るなり、吾人は

己獨個の分界を溢れ出て、借に混流合致するなり、知らずくの中にて、ペテロはヨハナを導き、又ヨハナはペテロに隨ひ、互ひに感じ感ぜられたる如く、吾人の生涯と品行は、社會的傳染の理法によりて、其生存の時代と境界の間に、常に自らを傳染するものなり、此に於て卿等は、人間に屬する感化力に、二個の種類あることを覺るならん、一は有意的のものにして、他は無意的のものなり、一は教育により、議論により、勸誘により、恐嚇により、約束によりて、他に支配を及さんとする故意の動作にして、他は吾人の身より、自然に流れ出つること、恰もペテロがヨハナを墓場に於て感化せしが如きものを云ふなり、吾人は善を爲んとて力を盡し、神聖なる義務を、此意志によりて成就すべきは最も必要なることなり、現今キリスト教が古へより一層活潑なる人生の原則となりしは、吾人の喜ぶところ、而して吾人は尙も一層活潑にこれが活動をなさんこと熱望して止まず、凡ての人類がキリスト自らの

恩惠と、其活る勢力を昧認するまで、ますますこれを發揚せんことを熱望して止まざるなり、

然りと雖どもこれと同時に、余は無覺の中に働くの感化と恩惠の必要なるを認めずむはあらず、而るに世間此感化力を重むること、かの有意のもの、を重むざるが如くならざるは、大に吾人の品性を害ない、教會の美と勢力を殺ぐものと謂つべし、故に余は一層深く此無覺の感化を主張せむと欲す、如何となれば無覺たるの故を以て往々人の注意を漏れ、易ければなり、

もし卿等の中、無覺の感化に對して、吾人は責任を負ふべきや、如何との疑ひを起すものあらば、余は卿等に答へて云はむ、其品格と品行より、直接に流れ出づるものを除きては、敢て責任なかるべしと、而して此無覺の中より出づる感化は實に有意の感化よりは、一層一樣なる勢威を放つものたるなり、有意のものに於ては、吾人の智慧足らざるより、其目的

を達し得ざることありと雖ども、吾人が無覺の中に及ぼすの感化は、決して吾人の實相に合はざることなし、恰も此種の感化は日光に隨ふ影の如く、吾人の品格に附隨ふの感化なり、かるが故に此等に對し、此等の世に及ぼす結果に對して、吾人は一層確に責任を負ふべきや、論を待たず、此等は我身より四方八方に流れ出て社會の根本、他人の品性を或は毒し、或は補益するものなり、吾等の實相にして善ならば、其發する所亦善に、吾人の實相悪ならば、其發する所亦悪なり、然らば則ち之れが世に及ぼすの影響に對して、吾人が責任を負ふべきは、固より當然の事なり、吾人は只意志を以てなしたることに答ふべきのみならず、吾人が知らず知らず及ぼすの感化に對して答へざる可からず、余は此問題の大切なることにつき、卿等に十分の感化を得せしめむとするも力足らざるなり、されど唯聊かにても卿等の心に、無覺の感化は此くも大ひなる力を有するものなりやとの刺激を起さしめば、則ち足れり、

さて本主意に入るに先だち、余は卿等に普通一般の憶断を去らんことを望まざるを得ず、憶断とは、無覺の感化は、其結果如何を報ずる能はざるか故に、其の影響は意とするに足らずとなすものこれなり、歴史と傳記とは、人の無覺的に及ぼす感化につきては、殆んど記する所あらず、史傳は人の如何にして兵を指揮し、帝國を建設し、法律を發布し、味方を募集し、理を論じ、教を垂れしやを記載し、則ち常に彼等が目的を以て爲したることに意を用ゆと雖ども、彼等が何んの意志もなく、自然と其人物より溢れ出でたる感化に就きては、殆んど目を注ぐとだになさざるなり、されば一國の法律も、人をして其有意的の行爲に責任を負はしむると雖ども、無覺的の感化につきては、善惡ともに問ふ處なし、其他家族、教會、學校の訓練法に到るまで、吾人が意志を以てしたるにあらずんば、褒貶の責を歸すべからずとなす、それ無覺の感化は、世の政府たるものもこれが精確たる調査をなして、其責任を當人に負はしめんとするは、到

底得べからざる事なりとす、さりながら卿等は、此種の感化力が、人の視聽を引くことなく、最も静かなるの故を以て、これ何事をもなすなしとは速了すべからず、世の外面的の響と騒ぎの後背に、自然は常に其統轄の手を隠して、法則に依て其の支配を全ふす、例へば此驚くべき宇宙を確と緊束する大勢力を、誰れか目もて見、耳もてき、し者あらんや、雷電は之れを引力に比ぶる時は、賊に螢の光に等しきものなりと雖ども、其耳に響くこと恐ろしく、其地に落ちるや、樹を裂き、岩を劈くの故を以て、人々多くは此を以て彼に優れりとなすなり、聖書は善人の生涯を呼んで光といふ、實に光の性質たるや、われ知らず八方に發揮して、無意無覺の間に其光線を全地に満すにあり、恰も此の如く、クリスチヤンの光を放つや、自ら放たんと欲して放つよりは、自ら輝きの本體を具ふるにより、自然に放輝するものたらずんばあらず、

リステヤンの活ける感化は、其外面の形にあらずして、其内心無爲の徳光にあり、これあればこそ其力を四海に奮ふなれ、而るに世に、光は音もなく香もなきが故に、甚た力なき事物なりとなすもの多し、而して曰く、彼の地震を見ずや、一旦鳴り轟けば、大地の根本これが爲に動き、人の築きたる貴き事業は——都城、宮殿、記念碑——は瞬間に地に平倒り、若くは墳火の口に飲み盡さるゝにあらずやと、而して彼の日光につきては何の感ずる所もあらざるなり、されど日光をして再と其道に歸へることなからしめ、朝の時をして再と曙光に伴ひ來らざらしめよ、恐れをのきの聲は六合に響き亘り、野の獸類は日を失つて猛り狂ひ、植物は蒼白めて枯死つべし、冷氣激しく地に廣まり、凍烈たる寒風は凍死なんとする地の表に吼り廻り、夜に入つて寒はますます、寒を加へ、終にはもろくの活物をして悉く其生血を結氷せしめん、而して寒氣尙止まざるなり、寒氣は愈地の中心に向つて進み、海の中心に向つて進み、地震其物

までも、其洞窟の底に凍ひつけしむるなり、否地球其物までも、地球と共に日を失つたる星々までも、皆氷の珠となりはて、暗夜の中に彷徨ふなり、ア、聲無ふして朝な、われらを訪問づる光の徳此の如し、其來るや赤子を其搖籠に目覺めしめざる程なるに、其萬物を感動すること此の如し、それ基督信徒は世の光なり、光として無意無覺に輝く也、故に、これ勢力なきものなりとは、吾人決して考ふべきにあらず、最大の勢力は常に世間の騒々しき現象の後に潜むものなり、而して余は誠に信ず、善人の無覺の感化は、其有意の感化より力あること、尙自然界に於けるが如しと、否余は更に一步を進めんと欲す、見よ如何に多くの人は、其無覺の感化の爲めに、其有意の感化を妨げられ居るや、彼等が人を支配せんと欲しながら、全く其反對の結果を身に受くるは、最現然たる事實にあらずや、人の尊敬を買ひに足らざる人物にして、妄りに辨説をもて、勸誘をもて、他を化せんとするも、其効なきは當然の事なり、

次に余は卿等の注意を、人は己が眞狀を他に傳ふるに、二種の勢力あることに注がしめんと欲す、もし人を呼びで言語の動物と言ふを得ば、其言語には儘に二個の種類あり、一は有意的に用ゆるものにて、他は無覺の中に用ゆる者なり、有意的の言語は、吾人が意思の儘に開閉し得る靈魂の戸口にして、無覺の言語は、常に開け放しありて、其心の性情嗜好慾望を常に明け、他に示すの戸口なり、吾人が胸の中には、一個の品格てふものごと、に座を占め、以て此二個の通路より自らを世に注ぐなり、一の通路よりは、善にても悪にても、吾人が撰擇に由りて流れ出でしむるも、他の通路よりは、時々刻々、恰も大陽より光の出づる如く、しらずに溢れ出しむるなり、

されば一步を轉じて、其感化を受くる對手に目を注がんに、何人も外よりの感化を受くるに二個の入口を備へざるを見るなり、一は言語を解するの耳と、解理心とにして、他は容貌、風采、及び平生の品行より發する、

徳の閃光を汲み分く同情力なり、此同情の力は、微かなる記號よりして大ひなる意味を了解し、且其了解したる所を人に傳ふるにも亦或驚くべきの能力を有するものなり、此同情力の感得する所は、強ち成文的の事柄にあらず、又これを他に傳ふるも爾りし、かるが故に、人多くはこれに重きを置ずと雖ども、其實却つて此處に大切の勢力存するなり、如何となれば、此くの如くにして己が心情は、端的に他の心情に入ればなり、例へば鏡を他と共に眺め居るに際し、同情同感の力に驅れて、自然と其容顔の他に似るに到るが如し、尙ほこれを實際に徴するに、小兒を唯一人の保母、もしくは侍女のみに伴はしむるより、其言語、舉動及び容顔までも、其かしづきに似るに到らしむることあり、又悪心を衷に滿す者の惡むべき顔を、只單に眺むるのみにても、常に之をなすときは、終に我身に其惡心の傳染を蒙むることあり、例へば、常に殘酷非道なることに目を暴すもの、其身に受くる害毒は如何に危険なるぞや、其靈魂の感光

を貴ぶものは、如何で此る感化の下に身を置くことを恐れざらんや、其
他罪人の惡むべき言語、舉動に見慣るゝが如き、決して無頓着に附すべ
き事にあらず、

余は前にも言へる如く、無覺の通行口は常に開放しあるものにて、吾人
は時々刻々、此戸口を通して、自を他に傳ふるものなり、それ最も優れた
るクリスチャンにして、善をなすに最も勵む者と雖ども、其有意の感化
を、其無覺の感化に比ふる時は、殆んど比較にならざる程なり、彼が無覺
の感化は太陽のわれ知らず、萬物を光被が如く、世の八表に照り出づる
なり、

然り而して尙一つ吾人が他に自らを通ずるの雙線あり、一は有意的社
會の一員として通ずるもの、他は無覺的社會の一分子として通ずるもの
の是れなり、卿等は固より或意味に於ては儼然たる一個獨立の人物な
り、されど又或意味に於ては、社會といふ團體の一分子にして、恰も一個

の石を組織する、其分子の如きなり、試みに問はむ、卿等が此世に生るゝ
に先ち、社會の制裁に従ひ、其法律に服すべしとて同意をしたるもの、誰
かある、而も一旦生れたる以上は、即ちこれに服せざるを得ざるは、是れ
卿等が一個人にてあると同時に、社會——家族、教會、國家といふ一層大
いなる實際の一分子たるを以てなり、吾人が性情の一部分は、全く公け
の爲に開放たる、同情同感是れなり、同情同感の方面よりして、卿等は、一
團體を形づくり、一有機體を組織し、其要求を共にし、其感激を共にし、其
法律を共にするなり、而して此無覺的の感化、及び國家若くは家族の際
に働く同情の力が如何に吾人の性質に影響するやは、國民的氣風、家族
的氣風の起るに由て之を知るべし、則ち世界中何れに到るも、其國家に
それ、特種の氣風あるにあらずや、此國家的氣風は、時として宗教的、
若くは無宗教的の氣風となつて顯はることあり、例へば佛蘭西の國家
的氣風が、一時は滔々として無信的の精神に貫れたるが如き、當今スベ

インの國家的氣風が迷信頑固の精神に充たされざるが如き、皆是なり、此の如くにして、社會の根底には、大理法、大感化力流行して、知らずくの中に吾人を其全躰と共に浮沈せしむるを恐ろし、

以上陳べたる所は、たゞ其概括の理合を示したるまでなるが是れより一步を進めて更に細目に説き及さんとする、

さて余は何よりも先に、小見における物真似の天性を指示すべし、吾人が道徳上の経験を始むるは、分別又は道理に基づける活動にあらず、又は言語によりて教へらるゝ思想にもあらず、たゞ單に物真似に由るのみ、この物真似の下に、吾人は道徳の基礎を築くなり、小見は見ることを善くし、聞くことを善くす、而して如何なる感覺にても、風儀にても、彼の身邊にあらはるものは、深く其無邪氣なる心魂に浸亘り、以て將來の人物を形づくるなり、保母の抱き様如何すら、大ひに小見に影響するものにて、之によりて現はるゝ保母の氣質は、悉く小見の上に反射するなり、

小見の心は純粹ら他の感化に一任して、自ら選擇せざる期限甚だ長し、其漸く意志を用ゆるに到るや、則ち其見る所に習はんと欲す、音聲、風儀、歩様、其の他目に觸るゝ一切のものに、かの物真似を好む天性は働くなり、見るべし將來の時代を作る人物は、其第一步の起頭より、吾人の感化を受くること非常なるものあるを、吾人が有意的には、何をも彼等に與へざと思ふ時にも、彼等は其慣習の材料を絶ず、吾人より得つゝあるなり、もし其材料にして善ならば、悪しき友に交るも容易に奪はれ難き程のものを得、もし悪なる時は、天よりの教育を受くるも、なか／＼拭ひ難き程のものを得るなり、余思ふに、吾人が生涯の間に、有意的の感化を他の運命に及すこと、この小見の上に及ぼす、無覺の感化より甚しきはなかるべしと、

且又大人にしても、他に真似んとするの情、決して薄きにあらず、吾人は自然に他よりの賞讃を希望するものなり、其證據として、脚等試に流行

の品を見よ、流行の力は強ひかな、之に抵抗するもの果して幾人かある、文學にも流行あり、禮拜にも流行あり、道義宗教の理論にも流行ありて、其勢亦實に強し、己が朋友の間に行はるればとて、社會最良の法則を破るもの果して幾人ぞや、其近親知己の不信者なる故を以て、キリストを拒絶するもの果して幾人ぞや、善人は凡て其人物に於て勢力を有つこと、其言語より強きものにして、自ら感ぜざる間に、他の人を感動すること甚だ強きなり、されば又悪人に於ても、其性質の中に毒を蓄へ、自ら故意にこれを人に加へざる中に、其情慾に耽けるの習慣、其宗教を罵如するの精神は、自然に他の心情に浸染して、其害を逞ふすると大ひなり、又人間の最も鋭敏なる感情が、如何に傳染的のものなるかは、人の能く了解する所なり、一種の熱信、突如として一地方に起らんに、其傳染の如何に速にして、終に全國民を感動するに到るやは、人の能く知悉する所なり、例へば十字軍を見よ、一人の熱信、終に全歐洲を動亂せしめたるに

あらずや、其他戦争熱、政黨熱、迷信、恐懼の氣風等は何れも傳染的の性質を帶ざるはなし、今此等の實際につきて見るに、其結果を生ずるは、有意的の盡力にあらずして、殆んど無意無覺の結果なり、即ち火の手一方に燃へ上らば、見るく、火勢四邊にひろまるが如し、
 卿等或は問はん、宗教の精神も亦同一の法によりて傳播するものなりやと、固より然り、又爾か傳播したりとて、何んの不都合か之あらん、そは精神上の感化も、決して人心の思想法及び社會感動の理法に相反すべからざればなり、もし信徒は活ける手紙にして、多くの者に讀るべきものなりとせば、其讀む者をして、感動せしむべきは、當然の事ならずや、もし彼等世の光たるべき者なりせば、見る者をして、これによりて一神を崇めしむるは、當然の事ならずや、見よ一人若くは數人の善人が、終に聖き火を其全社會に燃して、以て改革の大業を遂ぐることを、かゝる偉人の感化は、其言語論說に存するよりは、寧ろ其熱信なる品格に存す

るものなり、彼等は勿論有意的の働きによりて大ひに其善感化を及すべしと雖ども、其最大の勢力は、彼等が無覺の中に他に及す敬虔の徳に存するもの居多なりとす、
 而して又直接有意の感化例へば論證勸誘によりて人を動かさんとすも、衷に赫々の誠なくんば、何を以て其目的を達すべけんや、其目の輝き、其聲の調子、其軀度風采の如何は、言論と相待つて其効を全ふすべきなり、偽善者にして如何に辯説を逞ふするも人は自然に其偽を感ずべし、而して其言ふ處は何んの方も有すること能はず、彼の保羅を見よ、彼は
 大信熱情の人なり、彼は世の道徳家に卓絶して、其人と爲りに威徳を備へたり、彼は天性既に非凡なるが上に、キリスト教の信仰によりてますます
 研磨したり、されば其人物、殆んど人の如くならざる程進みたり、固より彼は智慧あり、議論あり、雄辯あり、活潑のはたらきありしと雖ども、
 彼が世を動せしは其なせしことにあらずして、其有しことにあり、則ち

其品格人物にありしなり、彼の潔白なる行ひと燃ゆる所の精神とは、彼をして他を確信せしめ、服従せしめ、感激せしめたり、彼が善き戦を戦ひしは信仰を保ちしが故なり、天よりの聖靈をもて其有力なる天性を充せしが故なり、余は思ひしよりも長く本題を論じたるが、終りに臨んで、
 尙二三の必要なる思想を説示して、實際上に裨益する所あらんと欲す、さて余が第一に云はんとする處は、凡そ人間たる以上は無責任にして、
 決して世に生存ふ能はじとの點なり、脚等が既に見たる如く、他を善に化し、又は惡に陥るは皆に有意的になす者のみならず既に世に存する限り他に感化を及さずしては瞬間も經る能はざるなり、脚等の心魂の
 戸は他の者に開かれ、他の者ののは、脚等に向つて開かる、脚等は殆んど透
 明牀の家屋に住めるが如し、而して脚等が衷に有つ所のものは、常に自
 然と外に現れつゝあるなり、もし脚等にして肉牀に傳染病の種を有せば、
 則ち他に之を傳染するが如く、脚等の性質嗜好及び主義は、一層激し

く他に傳染するなり、卿等が兀然此世に存するのみにて既に感化力を
 他に及すなり、卿等は云はん、決して他を害するの心あらざりしと、果し
 て卿等は他を害せざりしか、卿等が示せる實例は、果して無害なる者な
 りや、常に神と義務との旨に合ひたるや、卿等は絶ず他の者を感化しつ
 いあるを疑ふ能はざるべし、もし卿等の感化にして無覺的ならしめば、
 是れ最眞實にして且最善く卿等の性質を顯はす者と謂つべし、而して
 此感化に對して責任を帯びざらんと欲する豈得べけんや、卿等は他に
 害をなさずして生活するが故に、責任なきものなりとの考へに欺かる
 べし、勿れ、まづ第一に卿等は時々刻々知らずくの裡に其妻其子其良人
 及び其朋友知己に道德上の死を傳染せざるやを恐懼せよ、卿等を一目
 見るによりて、其永生を害せらる人なきにしもあらず、かるが故に卿等
 は、無責任にして世に存へつゝありとの考へを棄てよ、其は出來べから
 ざることなればなり、

それ眞に善をなすの法は、第一に自ら善と成るにあり、——則ち品格を
 備ふにあるなり、さらば知らずして善を他に及ぼすを得べし、善の行を
 なさんとする者は、先づ善の大本を得ずんばあらず、クリスチャンは世
 の光なりと呼ぶる、其意、無爲にして光り、光らんと欲して光らざるを云
 ふなり、人を感化せんとするよりは、まづ聖靈において自ら歩まざるべ
 からず、善の醜肖とならざるべからず、聖氣をもて身を包圍む程、神の御
 心を汲み、神のみすがたに似ざる可からず、吾人が身に光輝を備へざる
 前に、徒らに光らんと力るは、愚の極たるに外なし、もし太陽が其本體に
 光輝を備へずして、遊星に言ひ、以て世の終りまで論辯するも、決して彼
 等遊星を輝かしむるに足らざるべし、まづ太陽自らに光存せんか、遊星
 は言はずしてをのづから輝すを得ん、わが兄弟よ、これぞ神の吾人に望
 み玉ふ所なれ、福音の大主意、聖靈の働きは、卿等をして世の光たらしめ
 んとするにあり、神の最も喜び玉ふ處は、卿等に品格を與へ、卿等に人物

を養はしめ脚等の主義を高尙ならしめ、以て神の恵を受くるに堪へしむるにあり、されど此目的に合せんと欲せば、則ち脚等の心を捧げて全く義務と神とに歸降せしめざるべからず、かくて神の善徳を身に躰するを得ば、大陽が自然と其光を放つが如く、知らずして他を善に化するを得べきなり。

アゴスチノ

近世のサツアナローラとして其名歐米の間に轟々たるは、パウル、アゴスチノ、師なり、師は天主教の高僧にして、現に以太利、フロレンス、大会堂に法主たり、其熱心と雄辯とは實に驚くに堪へたるものにして、師の説教を聞んとて集るもの、常に七千人より八千人に達すといふ、而して重に下等社會労働人たるなり、彼等が師の説教を聞に熱心なるは、説教の初る一時間前より、われ後れじと馳せ集り、以て師の聲の聞ゆる場所に座を得んとし、其一旦壇にあらはれて口を開くや、さしもの群集も水を打つたる如く静まり、まばたきもせずして傾聽す、師が勢力今や旭日の昇るか如し、其感化の及ぶところ、將た量るべからざるものあらんとす。

希望

アゴスチノ、ダ、モンテフェルツロー

わが兄弟よ——われらは凡て痛と苦の法に服せざるべからざる者なり婦の産む人は、其日少なくて艱難多し、これを實際に質すに、われらの中一人として、其生の短きにかゝはらず、この苦痛を経験せざる者なし、波の層々相繼が如く、人の涙と艱の大潮流は、世々くりかへしくして打ち来るなり、人の世に生れ出るや、まづ叫ぶものは悲痛の聲なり、此悲痛常に絶えずして最期の際にまで相伴ふ、搖籃より墓場に至るまで、人生の短き旅程は、暗き樹蔭の中に横るなり、而して荆棘はこれを蔽ひ、涙はこれを濕すなり、ア、われらは如何に多くの苦き涙を流せしよ、如何に多くの苦き離別を忍び、如何に多くの苦き失望を實驗せしよ、悲は悲と相結んで限りなきに至り、恰も日の暮れて又暮るが如く、憂は憂の上、に打重り、若年者も隠微たる苦痛を有ち、白髪の翁も亦煩悶より脱るこ

と能はず、富る者の宮殿より貧しき者の小屋に至るまで、凡て苦痛の法の活動かざるはなし、而して宮殿の門前に立番する警手も、之れが王位の下に近づくを防ぐ能はざるなり、然り凡ての事情に於て、凡ての時間、に於て、凡ての場所、に於て、西より東まで、北より南まで、大洋の極の小島より大沙漠の中心に至るまで、騒々しき都會より、安静なる村落に至るまで、苦痛の叫びは常に人間の口より立ち上がるなり、ア、此くも多くの苦痛あるに、一としてこれを癒療の道は存せざるや、慰安の道は存せざるや、曰く確に存す、それ何處ぞや、吾人の不運を訴ふべき兄弟は何處ぞや、彼等は吾人の悲痛を悲んで共に泣くことあるべし、されど彼等はこれを如何ともする能はざるにあらずや、そは彼等自らも慰藉を要むる者なればなり、されば吾人學術に向つて訴ふべきか、哲學に向つて訴ふべきか、否これらは皆な悲める者に向つて、冷淡にして且無情なるにあらずや、如何に學術と哲學の盛ゆればとて、重きを負へる者の心情に

は少しも慰を與ふる能はざるなり、彼等はこれによりて慰めらるゝよりは寧ろ其空なる説と、其瘦せたる訓言に由りて悲みを増すなり、然らば吾人いづくに往て慰を求むべきか、何處に往て安を發見すべきか、曰くキリストの宗教則ちこれなり、此宗教のみぞ吾人の苦痛を除き、吾人の瘡傷を包帯み、吾人の煩悶を安むるの秘密力を有つなれ、ケイトーアリアンド曰く希望の力を與ふるものは唯此のみと、基督より來る希望、これぞ暗路を照すの北斗星なれ、これぞ暴風の真中の光輝なれ、これぞ人類の力と喜の伏する所なれ、余が今朝卿等に語らんと欲する所は、此希望に就てなり、余は其原因と其結果とを語り、又此希望なくんば、世は全く失望の外なきものたるを示さんと欲す、余は卿等が喜んでこれを聽くべきを信ず、そはかくも多くの苦痛と仇敵とに取まかれたる人生の真中において、われらの力と慰と喜との伏する秘密を知るは、實に必要欠くべからざることなればなり、

わが兄弟よ、神が人に與へ玉ひし生命に、二様あり、現在の生命と、未來の生命——一は目に見ゆるもの、肉に屬るもの、他は靈に屬るものなり、一は吾人が現在に於て享くるもの、他は希望の境界に屬するものなり、此等二つのうち、一は吾人の勇氣と忍耐とを常に奮ふべきの戰場、他は吾人の躬行に冠すべき大ひなる應報なり、一は此の六ヶ敷波路を越ゆる短き旅行にして、他は吾人が長に住ふべきの第宅なり、一は限りある時にして、他は限りなき時なり、現生は吾人の安息にあらず、たゞ安息に到るの道中なり、聖保羅が、それ受造物の切望は神の諸子の顯れんことを待るなりと云ひしは、此意なり、受造物みづから敗壞の奴たることを脱れ、神の諸子の榮なる自由に入んことを許されんとの望を有されたりとあるも、其主眼は希望なり、基督教の希望は吾人の思想を現生より超越て來生に導くなり、夫れ希望は其美はしき髪と喜ばしき目と、不老の紅顔とをもて實に天の死せざる息女なり、彼女は天の床しき高樓より、

吾人を救はん爲に地に降り、而して勇ましきマツカホスの母が戦死にゆく我子を鼓舞しが如く、彼女は人類の苦しめる者に向つて、人ごと親しく勵みの聲をかくるなり、彼女は人々に向ひ、其涙もて汚せる顔を天に擧げよと命じ、又左の如き語を吐きて慰諭するなり、汝の兄弟等は榮に入らんが爲既に汝に先ちて馳せ向へり、彼等は汝をながめ、彼等は汝を呼び、彼等は汝を待ちつゝ、あらん、而して汝は速に彼等に一致し、彼等と共に盛ふべし、汝は實に此荆棘深き谷を横らざるべからず、されど此路や遠からずして天に達すべし、汝は残酷なる敵と戦はざるべからず、されど其報は甘味して、其榮は永遠かるべし、汝は實に死の苦痛を経ざるべからず、されど天は汝の苦を償ふて餘りあるべし、而して其死は汝に不死の生を得せしめ、汝は神の如く警醒て、全く之に満足し、最早汝は天と地の間に限あると限なきとの間に、その心魂をさまよはしむるの苦痛を感じざるべしと、されど此高尚き希望心に對して世に嘲り

の聲を擧るものあり、而してたゞ吾人の思想を此地に引きつけて、もろくの煩慮と心勞とに満たしめんとす、彼等の語に曰く、人をして此地を超越て天に思想を擧しめんなどは、何等の愚ぞや、希望とは何んぞ、寺院内の夢に外なきにあらずや、かゝる虚妄は久しき以前既に面皮をはがれたるものにあらずやと、余答へて曰く、是れ利己一徹を主とする者の語のみ、目に見へざる者は一切信ずると能はず、手にて觸ざるもの、秤にて秤られざるものは、一切信ずる能はずといふ者の語のみ、而して金と銀とを其偶像となして、平伏し事ふる者も亦此語を放つべし、されどわれ問ん、彼等は果して何をなすものぞや、これ正しく天に逆つて戦ひを挑むものにあらずや、彼等は嘗て其生涯に於て苦痛てふことを感ぜざりしや、彼等は嘗て涙を流さざりしや、彼等は嘗て大苦惱の時に人的の慰安の無効なるを経験せざりしや、吾人が額に汗して働き、涙に咽で悲むは、既に此世にて十分なるにあらずや、彼等は吾人の希望を唯

此地にのみ限らんと欲す、我兄弟よ、恐ろしき牢屋に縛られたる囚人が、僅かに其格子より掌大の天を覗き、其渴望せる清き空気を吸むとするに、これさへ禁められなば、其心果して如何ぞ、もし希望あつて吾人の思想を永遠の審判に導くにあらざんば、吾人如何にして彼の嘲りの激打、嫉みの毒矢、無法者の壓制を忍ぶことを得んや、ア、憫れなる懷疑者よ、汝否まんと欲せば、天の凡ての希望を否めよ、汝撰まんと欲せば、地の安逸にのみ匍匐よ、されど他に天の希望に向つて生くるの人物あることを記憶せよ、余嘗て聞けることあり、一人の若き囚人其愁苦を慰めんとて一疋の蜘蛛を發見け、毎日これに食を與へて漸く親の情を通じ、たい此一昆虫に由て樂みをりしに、牢守は早くも目をつけて、非道にも其蜘蛛を踏みつぶせりと、ア、無情なるの極にあらざや、こは些細なることとはいへ、誰れか牢守の殘酷無慈悲なるを憾まざらんや、然りと雖ども、苦しめる人より天の希望を奪ひ、これを失望の谷につき落すは、猶川に

溺れし者の漸く岸の草根につかまりしに、再び之れをもぎはなして逆巻く波に投げこむが如し、卿等は餓に迫り、苦しみに呻く者に向ひ、汝等は餓渴き、凍え裸躰なり、されど汝等は何をも望むべきものなし、そは墓の先は無一物なればなりと言ふならん、されど是れ決して此世の眞状にあらず、人の此世にあるや、本國を放れたる流罪人の如し、而も流罪の中に目的あり、吾人の靈魂を縛る鎖も間なく打ち断らるべしとの希望これなり、問ふ人生の重荷は卿等に重からざるや、重くんば、慰安を求めよ、天を希望めよ、此處に卿等の安息を發見すべし、此處に卿等の避難所を發見すべし、卿等此地に居るうちは苦痛あり、されど數日の中、數月中、數年の中には、卿等幸福の大灘に帆を上げて進み行かん、ア、わが可憫なる兄弟よ、もし今日余が語に耳を傾けつゝ、饑と、渴と、裸との爲めに苦しむ者あらば、——もし汝を取りまきて、汝等の子供等がパンを與へよと、求むるに、たゞ涙と接吻の外、一物なき者あらば、請ふ頭

を擧て望見よ、そは汝等の贖ちかづけばなり、(路加二一、二八)待間ほどな
く汝の茅屋は天の高閣と代るべし、神は其御手をのべて汝の目より涙
を拭ひ玉ふべし、汝が勇ましく忍びたる苦痛、汝が地に滴らせし涙は、汝
が朽ちざる冠の寶玉として、一滴も残さず保存たるべし、其處には最早
禍もなく痛もなく悲もなし、神は其惠の御腕にわれらを受け、われらは
絶へず、其御前に樂むを得ん、それ此も美しき此も誠なる、かくも慕き希
望は果して何物の上に立つぞや、此は揺動すこと能はざる礎の上に立
つなり、此はわれらの救主イエス基督の約息に立つなり、此は彼の十字
架に立つなり、イエス、キリスト、の御辭に傾聽よ、イエス山に登り其足下
に來れる許多の人を見て何れも悲みど苦みど憂ひとに滿てるを憫み、
口を開きて教へ玉ひけるは、貧しき者は福なり、哀む者は福なり、義こと
の爲に迫めらる者は福なり、ど、何故主は貧しき者は福なりと宣ふぞや、
主よ汝は貧窮の苦痛を感じ玉はざりしや、哀む者は何故福なりや、汝は

涙の苦を知り玉はざりしや、義ことどの爲に迫るゝものは何故福なりや、
汝は嘗て地に居玉ひしとき、迫害の苦痛を経験し玉はざりしや、主よ汝
は何故彼等を福なりと宣ふや、曰く天國は彼等のものなればなり、ア、
其理明らかなりと謂つべし、イエス、キリストの語は誠なり、イエス、キリ
ストは天國の王にして神なればなり、
而してキリストは如何して此等の語を確定め玉ひしや、曰く其十字架
の死に由てし玉へり、われもし擧げられなば多くの人を我に來らせん
とあるこれなり、彼は人類に代つて十字架に擧り玉へり、其十字架よ
りイエスは過去、現在、未來の三世を通觀して、人類の苦と涙とを拭ひ玉
へり、われ此多くの人を憫むと、野に群集へる人を見て彼れ宣ひたり、而
して其滿ちたれる無限の愛より、彼は罪と悲とを取り除き、之れを自ら
脊負て木に懸り玉へり、此てイエス、キリストに由て清められたる人生
の悲痛は、再び人間修徳の爲として投げ入れられたり、そはキリストは

其弟子に此世の喜樂を約し玉はず、却つてもし人われに従はんと思は
い己に克ち、其十字架を採つて我に従へど宣たればなり、實に眞の力と、
慰と喜とは、イエス、キリストの十字架よりぞ來る、もし農夫が覺束なき
秋收を望んで、極寒炎熱の日も厭はず、勤くとせば、神の約束に基づく希
望は如何に貴とかるべきことならずや、

わが兄弟よ、希望の歴史には多くの勇ましき事業多くの嚴かなる凱
旋を記し得べし、卿等は貴き殉教者につきて讀しならん、彼等の千辛萬
苦死をだに辭せざりし事につきて、老たる聖徒等の斷食、徹夜の事につきて、
一身を神に捧げたる婦人につきて讀みしならん、彼等此世の快樂を
語れ、彼等は身に纏へるの毛衣を指し、其息ふ麥藁の小褥を指して、たい
祈禱をせよと卿等に請ふべし、それ此くまでも人の精神を變ふる者は
何の力ぞや、如何なる動力ありて彼等を感發せしや、他なし天の希望の
み、彼等は天のありさまを眼前に見、聖ホウロと同じくキリストの爲め

に縛るゝことを榮とせばなり、余は曰ふ希望ある者も、希望なきものも
其苦痛あることは、同じかるべしと、されど此兩者の間に如何なる大差
別あるかを見よ、希望によりて慰を得るの人を見よ、苦痛の真中にすら、
貴き忍耐を現すべし、もし彼聲を放ては、もしかなは、此の杯を我より
どり玉へされど、我意をなさんにあらず、神慮にまかせ玉へと語るべし、
他の希望なき者を見よ、たい悲み呻きて失神落膽するの外なきのみ、墓
より前に希望なきものは、唯身に迫る苦痛にのみ心奪はれ、神を阻ひ人
を阻ひます、苦痛に苦痛を重ねて、暗夜の中に世を果るなり、兩者と
に苦痛ありといへども、一は忍耐し、一は失神す、其差果して幾許ぞ、キリ
ストと共に磔殺されし右方の盗人を見よ、其心に希望を得るまでは、悪
言口を極めて憚らざりしが、一旦希望の輝き出づるや、彼は靜になれり、
而して、主よ汝國に來らんととき、我を憶ひ玉へと語り出でたり、イエス彼
に答へて曰く、今日汝は我と俱に樂園にあるべしと、

吾人をして基督教の初代を回顧し、其熱心火の如き殉教者聖なるイグ
 ナチアスのことを想出しめよ、彼は死の覺悟を決めたる一人の劍士と
 伴ふて今やしづく、角闘場に入らんとす、此時此二人の顔を眺めよ、其
 相異なる、如何計ぞや、イグチアスは死を見ることが天の近道を得た
 るが如くなるに、劍士はなく、死地に引出されたるが如し、闘は正に
 初まれり、劍士は重傷を負へり、彼は倒れり、而して倒れつゝ、彼は周圍に
 山なす羅馬人士を見廻して、其故郷を思ひ、其妻と兒女と、其年老て息子
 に先だゝれたる兩親を思ふか如し、其最期の息の根絶る時まで、彼は
 げしき恨みと悲に滿るなり、之に反して聖なるイグチアスは、神の平
 和を額に輝せつゝ、角闘場に進みくだれり、彼其弟子を顧みて、猛獅の我
 に慣和からんことを祈る勿れ、われは、我望む所を知れり、われは天に逸
 早く達せんことを望む、されば猛獅に引裂るゝは却つて我願なりと語
 りしとき、其唇には微笑を點せり、而して彼猛獅の吼をきゝし時、來れよ

われは汝を恐れざるなりと叫びたり、猛獅は闘場に突進めり、瞬間に彼
 獅子の爲に咬裂れ、彼は全く地に倒れたり、彼血の池に横はりつ、死の薄
 皮其臉に集りしとき、かれ細やかに眼をあけて野蠻的いひ罵る幾千の
 見物人を眺めたり、而も彼等が無情の殘忍を呪はさりき、そは彼の心情
 には微塵たりとも、失望てふものなければなり、彼は確と天に目を注ぎ
 つゝ、もろくの聖徒と、天の使と、雲の如き證人を心に呼び起して、神に
 祈るに、彼の血は此都府の(羅馬府)祝福となれとの言を以てせり、それか
 く彼を死に臨んで強からしむる者は希望なり、希望をもて彼は其最期
 の恵を呼吸し、希望をもて彼は其最期の祈を捧げたり、且又希望の勢力
 は必ずしも、キリスト教の初代に溯つてのち知るを要せざるなり、吾人
 は今日眼前に之を見ることが得、試に愛の姉妹(キリスト信徒婦人の慈
 善團體)に向て問へ、彼等は如何にして其困難なる真中に立て事に堪ゆ
 るかと、彼等が貧民と罪人との群に言とき、何を力として働くかを問へ、

彼等は必ず答へて曰はん、希望のランプを苦痛る者の中に高く捧げ、人間の最も暗き處に、其光輝を照すぞ其働きなれど、されば希望は貧しき人の小屋の中にも、富たる人の高樓の中にも、つねに厚遇せらるべき賓客なり、牢屋に屈辱める擒人の蒼顔に、喜ひの光を燃すものは希望なり、希望は自ら病る者の臥床の傍に座を占め、慰安の勢力をもて其主權を奮ふべし、かの學者等は美術を進めたり、眞理を發明したりとて、誇顔にものいふといへども、彼等は未だ悲痛めるもの、憂苦めるものを慰むるの道を進むるに、適せざるなり、彼等をして此痛める者の臥床の傍に來り立しめよ、憫なる病者は次第に身を喰み盡すの苦毒によりても、だつゝあるなり、其破屋には一人の見舞ふものもあらざるなり、此場合に立ちて、かの天の希望を有たざる自由思想家、懷疑論者は何をなし得べきか、彼等は此る病者の前にありて、啞とならざるべからず、彼等は其くだくしき理窟を陳べ立つるの顔なかるべし、病者彼等に靈魂の慰め

を與へよ、請ふとき彼等は、何んと答ふるならんか、恐くは左の如く云ふべし、憐なる人かな、余は汝に同感を表す、余は自ら病むが如く、汝を思ふと、されど我兄弟よ、此等の語の中には、葬式の鐘の音の如き悲を滿すとぞ、ぞや、重傷を負へる兵士に其傷を氣にする勿れと云ふも、苦痛は據なくこれを氣にせしむるを奈何せん、彼等恐くは又云はん、汝は辛抱づよくあらざるべからずと、辛抱強くあれどか、病める者は答へて云はん、されどわれ既に能ふ、又は辛抱したり、十年、二十年、三十年も、痛みと禍ひと、貧しきとに泣き暮せりと、ア、天の希望をもて伴はれざる辛抱は、果して何事をかなし得んや、而して懷疑論者は何んと云ふぞや、余は汝が苦痛を善く知れり、されど人は宿命あり、之れを如何ともすべからず、たゞ其太息を殺せよ、其呻吟を禁めよ、縱し死に到るとも耐忍べよと、實に是れ人間の智慧より出る最極の慰なり、此外何事をもなす能はざるな

り、さて驪がへつて吾人が神の使者として苦惱者に與へ得る慰安は如何といふに、吾人は彼の閉んとする眼前に十字架を示すべし、且これを死に由つて將に冷ならんとする其手に渡して、曰はん、氣強くあれ、我子よ、勇氣を鼓舞せよ、神の無限き恩愛を希望せよ、神は汝を見捨玉はず、又忘れ玉はざるべし、神は汝に近し、而して其御手より汝の爲めに天に備へある義の冠を授け玉ふべし、汝は枝の再び緑となる前には、葉の落ちざるべからざるを知る如く、吾人が神の手より朽ざるものを受くる前には、此朽るもの悉く落つべきを知るなるべし、氣強くあれ、勇氣を鼓舞せよ、數日の中に、否な、數時間の中に、苦惱は悉く去り、此朽るものは朽ざるものを着、永遠の岸邊よりしてなんぢ此世をみかへり、わが地上の苦惱は思に餘る良報を天に貯へ得たりしと云ふなるべしと、今日を死に瀕する人に注げよ、卿等は失望と苦惱は既に逃げ去り、神よりの平和代つて其額に止まるを見ん、彼れ其臥床を取圍く所の妻と子に打向ひ、最

早歎くなかれ、余は誠に今逝くべし、されど余は幸福なり、我等の離別は只暫時のみ、間もなく再逢む、天に於て相逢むと云ふなるべし、彼の希望は基督の十字架に集れり、而して其希望を持つて、彼は死す、されど我兄弟よ、尙一つ卿等の眼前に示すべき更に憫なる光景あり、死は果して其權を振ひたり、冷き動かざる、死骸は恐ろしきまで靜かに卿等の前に横はれり、これ或は卿等の父たるべし、若くは母たるべし、若くは子たるべし、此時に當つて、天の希望をもたざる者をして、近く死骸の前に立しめよ、彼等をして死が封印したる此動かざるものに目を注がしめよ、此光景は果して如何なる事を彼等に告るぞ、ア、今や誠の永別となりしか、此小さき土塊、此見る影もなき塵泥が、わが誠可愛し所の人なるか、ア、わが母よ、わが母よ、われは君が最期に遅れて、其生顔を見る能はざりき、とは人情厚き者の叫なるべし、母といふ名のみにて、我心は其奥底より動なり、此心の愛、いかで土の土塵の塵に化し去るものならんや、ア、

不運なる懷疑論者よ、汝は嘗て愛といふことを知らざるか、汝は嘗て其
 愛したる者の最期の席に會せざりしか、汝かの無情無望の理窟に執着
 しつゝ、此愛する者の死期に會せんとするは、不可能の事なりと知れ、
 されど吾人天に望を有つ者には、慰み絶えて更ることなし、そは彼の愛
 したる者と再相逢ふべきを知らばなり、而して汝の眼前より、汝の愛す
 る者を隠せし墓場の傍にひさまづきて、汝の心悲哀に滿るとき、汝何ん
 とか云ふべき——永遠の離別かなと云はんか、否なく、神の子なる美
 はしき希望よ、今一度來りて彼の母の墓場に頭を伏して泣く人々に言
 へ、汝の母を思ふて泣くか、彼女は此處に居らず、汝の子を思ふて泣くか、
 かれは此處に居らず、汝の妻を思ふて泣くか、彼れ此處に居らず、彼等は
 皆天にあり、汝等再び彼等に逢ふことあらんと、それ天に於て吾人は意
 識を有し、愛心を有するが故に、嘗て吾人が愛したるものに逢ふ時は、
 これを識別する事を得るなり、そは人の神より受けたる本體は常に同一

なればなり、余故に曰く、涕を流す勿れと、今日神は汝に賜ふに苦痛に堪
 ゆるの力を以てし、明日彼神汝に賜ふに榮光の冠を以てし、玉はむ喜ひ
 且祈れ、汝は墓一重へだて、至高き都を有てり、されは彼の希望なき者
 は如何に憫むに堪へたる者ならずや、ア、不運なる人々なるかな、死が
 彼等の愛するものを悉く奪ひ去るとき、彼等は何を爲んとするや、彼等
 は地に於て望むべきもの何をもなし、唯其避難所として自盡と、短銃と、
 毒藥とあるのみ、而してのち彼等を待つものは何ぞ、吾人は實に此の如
 き者の爲に憐みて祈るべし、ア、天の子なる希望よ、苦しむ者の慰手、惱
 める者の友達、流罪人の同伴、弱き者の助手、死せんとするもの力なる希
 望よ、吾人を忘る勿れ、汝はわれらの目の光、われらの足の導き、われらの
 働きの守護、われらの心情の嗜好にして、われらを天の安息に入らしむ
 る者は汝なり、
 わが兄弟よ、ウアチカンに於て、凡て見る人をして感歎措く能はざらし

むる、一個の畫あることを知るや、ラフハエロ、ダナルピノの筆に成れる
 ヲラノスフイキエノシヨシヨ(キリスト變容の圖)是れなり、而して余は
 此畫を實際に應用して今此説教の主意をとれるなり、聽けよ、此畫の下
 部の方は發狂者が奇跡的に癒さるゝの狀を現すにあらざや、卿等は惡
 魔につかれて、其痙攣最中の小兒を、其父なる者の抱くを見るべし、小兒
 は惡の靈に由て攪擾され、其唇の激しき痙攣、其目の恐ろしき狂癪は、彼
 に怖るべき容貌を與ふなり、又畫の一隅に於て、あらん限りの恐懼、失望、
 悲哀の記を現す、女のひざまづく者あるなり、遠く離れて弟子(キリスト)
 の數人が力なげに此凄まじき光景を注視し居るなり、心なき群集は團
 体をなして傍觀し居るなり、これ實に人生の眞狀を寫せるものと謂つ
 べし、汝はキリストが此中に居まざるを見ん、彼はテールホル山の頂に居
 ますなり、而して誰とてキリストの事を考ふる者もなきに、唯一人手を
 廣げて山の方を指し、恰も至能至愛の神は確と彼處に居ますなり、彼に

叫ひ彼に祈れ、彼は小兒を癒して此不幸より汝を救ひ玉ふべしと云ふ
 かの如き様をなせり、されど誰一人として此人に目を注ぐものなし、
 、これ人生の狀態にあらざや、神のことを示すも、これに耳を傾くるも
 の幾人ぞや、天の道を語るも、これに耳を傾くるもの幾人ぞや、今一つ此
 畫に人の見逃し易きものあり、見へざる力、惡魔の活動これなり、惡魔の
 活動と云へば、人或は疑ふやも計り難しと雖ども、是れ思はざるもの
 み、地にありて、天の希望をもたざる者を支配するは何んのかぞ、バラダ
 イスの希望を失ひたる魂に宿るものは果して何者ぞ、曰く、惡魔のみ、惡
 魔中の最も恐ろしき惡魔——絶望ぞ其物なれ、絶望の果は自殺あるの
 み、わが兄弟よ、近來自殺者の著しく我國に(伊太利國)増加するは此理な
 るぞかし、此理あるが故に家族の籠を破壊し、社會の基礎を震動すなり、
 もし卿等にして悲むもの、惱むものより、天の希望を盗み去らば、其結局
 は絶望ならざるべからず、而して其國民より此希望を盗み去る人の罪

は大ひなるかな、自殺者の血は其頭に歸すべし、卿等誠まことに其悲みの時に
 慰を得んと欲せば、天の希望を再び燃せ、神の恩恵はこれより降らん、卿
 等すべての資産、すべての愛する者を失ひ、卿等全く世に棄てられたり、
 誰一言やさしき聲をかけるゝものなしと感するならば、卿等の上に
 天あることを記憶せよ、神常に卿等の聲を聞き玉ふを記憶へよ、聖き天
 使は主イエスがゲツセマニの園に苦み玉ひし時に奉事たる如く、卿
 等にも亦奉事るを記憶せよ、貧しき者は福なり、悲しむ者は福なり、追め
 らる者は福なり、天國は其人のものなればなりと仰せ玉ひしはイエス、
 キリストにあらずや、されはわれ又云はん、我兄弟よ、決して失望する勿
 れ、勇氣を鼓舞せよ、此生命は唯まばしの旅路なり、吾人程なく彼岸に達
 し、吾人のために備へある天の第宅に入るべきなり、これ決して空望に
 あらず、勇め我兄弟よ、卿等の涙は空しく乾かず、其は神手づから之を拭
 ひ玉はん、勇めよ、悲の門は天に導く一條道なり、忍んで悲の杯を飲み、而

も恨みの語を其唇より漏す勿れ、余は卿等に滿腔の同情を有するなり、
 目を挙げよ、天に目を挙げわが兄弟よ、而して靈程も失望の語を吐かざ
 れ、天は美なれども我爲にあらずとは、決して言はざれ、寧ろかの美しき
 天は全くわか爲めなりと確言せよ、

宗教の必要

わか兄弟よ——神は實に存在なり、神存在すとの確信は人の心より除
 去るべからず、吾人の本心に深く根底して、決して抜き去るべからざる
 なり、無神論者あり、氣の狂ふたる瞬間に於て、神存在さずとはいふと雖
 ども、而も彼此語を吐きながら、其至情の本然にをいては、此語の實なき
 を證するなり、悲痛危難の時に於て——迷の幕の眼前より落る時にあ
 いて、——わか神よとの聲は、其唇より自然と迸るなり、
 然らば誰をか神となす、吾人の理性が、もし龍辨もて暗まされざる限り、
 神は完全にして至能至上の實在者なり——無限にして萬物の創造者、
 司政者——其無量の恵もて人に生命の息を吹き込み玉へるものにし
 て人は特權ある受造物、凡て造られしもの、冠神の像に似せて造られ
 たるものなるを知覺り、且確證むるなり、
 人心の靈なることは、その自の同一なるを感ずる意識に由て證明せら

るゝなり、靈魂不滅の眞理は、吾人の知力により、意志により、心情に固有
 する幸福を欲ふの念により、且神の性質——其智、其義、其聖——に對す
 る至情の信認によりて確定せらるるなり、然らば則ち人と神の間に一の
 關係——一の連鎖なるものなかるべけんや、宗教こそ其連鎖なれ、され
 ど主イエス宮に携へられし時彼は、誹駁を受ん其號に立らると稱へら
 れ玉ひし如く、宗教につきても、爾か云はることあるべきなり、神は天と
 地の創造者なり、神は仁恵に充る父なり、神は善の最なるものなり、神は
 愛にして、人に自由の意志を與へ玉へるものなり、されど彼人に與ふる
 に獨立てふ賜を以てし玉はざりき、人の神に依頼せるは事の全く必然
 なるものにして、吾人に取りて最も大切に、且最も神聖なる義務たるな
 り、それ神の限りなき榮に吾人を一致せしむの義務は、凡て此宗教の中
 に含蓄せらるるなり、今日を擧げて當世の有様を見よ、宗教の世に遇せら
 ること果して如何ぞや、宗教の實行せらるること果して幾許ぞや、

人の過中にて、其最も禍なるものは神を忘るてふことに若くはなし、宗教に無頓着となることに若くはなし、わが兄弟よ、世界の歴史中、神を無にするより大ひなる禍は記載せられざるにあらずや、而して今日の人が此最も禍なる神と、宗教を忘るに到るものは、自己の考察に全心を奪はれ、自己の發見、發明の智に誇りて、其造られし者なること、他力に頼るべき者なること、理法に服ふべきものなること、神に向ひ、造物主に向ひて、義務を盡すべきものなることを忘るにあり、實に彼等は其不信仰なる誇によりて、大ひに神の榮光を暗ましたるなり、繼し全くはこれを抹殺し得ざるにせよ、

今日の人は自己を以て、世界の絶對的所有主と信じ、少しも小作人なりとの考へを有せざるなり、もし吾人彼等の云ふ所に耳を傾けなば、人類は長足の進歩を以て、全き獨立に到らんとするなるを信せしめんとす、名譽、自然、道理、學術、自由、友愛、進歩——これらの語は今日最も人の口に

するところ、今世紀をして、無暗に暴進せしめんとするの勢力たるなり、而して一方には、宗教の必要を感ずることなしと公言し、其理を討せば、人事多忙、本心を顧みるに暇あらずして、全く神を忘れたるか、若くは、曠奢淫逸の樂に耽りて、其智力を破壊せられ、其全性全力を泥中に引きづり込めるによるなり、

又他の一方に於ては、懷疑的の笑を含みて、左の言を吐く者あり、神といふか、此は中古の頃には甚だ有用なる思想なりき、されど今や既に其要なし、吾人はすでに物質の不滅なるを論定たり、此は學術の原則となれり、中古に於ては神の宗教は大ひなる權威を有ち、且善き活動をなしき、されど其は既に過ぎ去れり、古語となりたり、而して今や之を棄つべきの期全く熟したりと、是れ十九世紀が物質的の文明に一掃されたる眞狀を畫くものと謂つべし、曩日には青年にして、暫時宗教を迷ひ出づるも、尙ほ其心底には、父なる神を信じ、主なるキリストを信じ、又新贖の

効驗あるをも疑はず、これを少しく訓誡奮起せしめば、乃ちもとの信仰に復るの心情を有ちしと雖ども、今や則ち如何、目をあげて四面を見よ、卿等は何を見るぞや、吾人が活き且動く所の社會を見よ、卿等は到る處に、無神論者の聲をきくにあらずや、曰く神の禮典を除けよ、曰く祭壇を除けよ、曰くキリストを除けよ、曰く神を除けよと、是れ實に今日の慘狀なりといふも、決して謬言にあらざるべし、卿等は嘗つて漸く人生の首途に上らんとし、僅に學問の萌芽を得たるの青年が、早くも既に神の存在を否み、嘲りを以て靈魂の不滅なるを笑ひ、而して一切宗教を信ぜざるの、憐れ悲しき現象を思念らせしや、彼等は千九百年を通じて、基督教が勝ち得たる其功績に目を注がざるなり、彼等の目には、キリスト教は塵埃の如きなり、かるが故にキリストに對しキリストの祭壇に對して、一つの崇敬だに呈することなく、彼等は全く神を信ぜざるなり、されば又神の名を潰すことを愧とせず、キリスト

教を卑しめて、斯教匍匐の時代なりといふ、豈憐むべき事にあらずや、わが兄弟よ、老たるものも若きものも、彼の大人の言れたる語を記憶せずや、曰く余は己がために真理を驗したり、而して余は信ずと、卿等も亦己が爲に真理を驗せよ、而して卿等信ずることを得ん、されど彼等は己の學問を喋々するもの、決して宗教のことを實驗せず——彼等はこれを實驗することを好まざるなり、而して唯無暗に基督教を拒絶し、宗教の實行を放棄てんとす、其言に曰く宗教とや、これ何んするものぞ、宗教なくとも、人生は全く事を欠ざるなりと、果して事欠ざるや、人よく宗教なくして實に生活することを得るや、否な、わが兄弟よ、卿等にして不正不義の生活を送るべしとの意にあらざる限り、宗教なくして生活ふこと能はざるなり、吾人が今朝考察んと欲する點は、則ち是のみ、今の時に於いて不幸なる青年を、無神論の害毒より救ふは、社會の安寧國家の繁榮に對して最必要欠くべからざるもの

なり、ア、不幸にして憐れなる青年等よ、汝らは情慾の餌食となり、懷疑論の疫病にとりつかれて、すでに息の根絶んとするにあらずや、早く宗教の羊欄に歸へれよ、而して汝救るゝを得ん、宗教なくして人生は果して事欠ざるや——請ふ吾人をして一考せしめよ、何をか宗教といふ、宗教てふ語のうちには、人を神と一致せしむる、關係の全軀を含むなり、これを分つて三つとなす、曰く教理、曰く品行、曰く禮拜是なり、教理とは人の限りある智慧と、神の限りなき智慧との關係の發表なり、品行とは人の不完全意志と、神の完全意志との關係の發表なり、禮拜は被造者が創造者に奉つる感謝と愛の發表なり、此等のものなくして、人生は果して事欠ざるや、全世界を通じて尋ねるも唯「否」といふ一答あるのみ、試に卿等世の國々に就て觀察よ、信仰なく、道德なく、禮拜なきもの果してありや、宗教なきもの果してありや、卿等は一として發見し能はざるべし、卿等恐くは此處、彼處に恐るべき不信

仰を口にする個人——人類の怪物——を發見ことあるべし、されど其惡言は地の全面より祈禱となりて神の聖位に立ち上る崇敬の聲に打消るにあらずや、卿等世界の歴史をとりて事こまやかに觀察し、過去にし、數千年の古昔に溯り、地球の全軀に探索の手を廣げ、其大陸の奥深き所より、其小島のはしへに到るまで、其文明なると野蠻なるとを問はず、貧者の小屋より王公の御殿に到るまで、神の宮其處にあらずや、神の祭壇其處にあらずや、なきを認るならん、人或は美術を忘れしことあらん、學術を忘れしことあらん、されど彼は決して宗教を忘る能はざりき、神を崇めたるニウトンを初めとし、多くの學者等は、聲を揃へて宗教なきの國民なく、宗教は社會安寧の首石なり、而して凡そ地に人の住ひし跡ある處には、これと並んで必ず宗教の跡ある事實を證明するにあらずや、然らば此事實によりて、吾人の得來る論結は何んぞや、他なし、唯一ある

のみ、曰く宗教は吾人の本體を立しむるに、最も必要なるものなり、人は人として生活ふに、必ず宗教を要す、苟もこれなくんば、活く能はざるなりと、道理の云ふ所に耳を傾けよ、もし、ウチアルテールの無神論にして立ち得べくんば——世に眞實神なきものなるべくんば、或は宗教なくして生活ふことも得べけん、そは神なくんば、宗教の目的なる人と神との一致は出来能はさればなり、

されど神は存在なり、余は既にこれを卿等に證明したりと信ず、余は卿等がすでに此點には疑を措ざるを信ず、さらば神は誠に存在なり——造物主なる神、吾人が頼りて以て立つ所以の神は存在なり、如何で彼を拜し、彼に感謝せざるの理あらんや、吾人の前に生と善死と惡を置き玉ひし、神もし存在さば、吾人如何で其聖法を守らざるを得んや、死の後、吾人を審判き玉ふ、神もし存在さば、吾人如何で其用意をなさざるを得んや、

道理は吾人に示して曰ふ、人は必ず其創造者に頼らざる可からず、至心至靈をもて彼を拜し、以て己が力なきを承認せざるべからずと、或は理を構へて神は完全なるものなれば、人の崇敬を要め玉はずといはんか、固より神は人の崇敬を要め玉はざるにせよ、人はこれが爲に其崇敬を廢すべきにあらず、よろしく其本を記憶して、常に其義務を盡すべきは論を待ず、是れ人の大法なり、かの推理の能力なきものは、本能の啓示に由て動くも、雖ども、吾人自由の法を與へられし者は、その身を神の意に適ふ聖き活る祭物となして神に献くべきなり、苟も創造の事實にして確ならば、宗教の必要なるは避くべからざるなり、

されど宗教の必要なるは、嘗に吾人に固有するの理法なるが故のみならず、そもく、吾人の幸福なるもの、亦これによりて立つなり、幸福の秘は其實果して如何、人の幸福は、其能力の發達と完全なるに隨ふ、人の能力の重なる活用は果して何んぞ、智識愛動作是なり、人もし幸福な

らんと欲せば、其智力もて眞理を確と握らざるべからず、人の智力は眞理の爲に造られたるなり、植物の光と大陽に向ふが如く、人の智力は眞理に追て走るなり、而して其此の如くなるは皆自然なり、人もし幸福ならんと欲せば、其心道徳を愛すること傾かざるべからず、鳥の飛ぶ爲めに造られしか如く、人の心は愛の爲に造られたるなり、人もし幸福ならんと欲せば、其良心に規矩を有ち以て其品行を支配せざるべからず、それ此等の事態は、卿等何れに於て求めんとするや、宗教に於てにはあらざるや、

それ、人の幸福は實に宗教に存すと謂つべし、而して其完全きものは、之を地に於て見出す能はざるが故に、宗教は來生の希望を興へて、其足らざるを補ふなり、さればにや、平和と幸福の氣色は決して眞實なる宗教家の容顔より消ざるなり、されど宗教の必要は、皆に其本然の理法なると、其幸福の要素なるとに止まらず、吾人が眞正の人物、眞正の勢力の秘

密は、則ち此處に存するを以てなり、もし卿等人の最も大ひなる所、其最も貴き所を知らんと欲せば、其人の宗教に對する如何をかへりみよ、其大なる所以は神より來るなり、もし彼が宗教より得るの勢力を除去れ、其殘る處幾許もなからん、

ア、人の勢力の秘密なるかな、此はそも何處にありや、人の勇氣は其源何處にありや、只宗教にありと云はんのみ、われ神を畏る、されど他に何物をも恐れじと云はしむるものは、宗教にあらざや、それに反して宗教の大主義を抱ざる人は、正義を蹂躪し、良心の權利を蔑如する者に對する時も、只あどじさりして逃げ惑ふなり、かるが故に、アリストートルの言に曰く、神を畏れざる靈魂は勇氣なき靈魂なりと、それ何物をも恐るゝ人の勇氣なきが如く、何物をも恐れざる者も勇氣なし、そは彼神を恐れざればなり、

ペーコン曰く、彼の犬を見よ、彼にとりて神と等しき人間ありて、彼を保

護するを自ら信せば、其威勢と勇氣を加ふこと果して如何、此信認（人間
 の保護ありといふこと）なくんば、決して彼自ら發揮し能はざる程の勇
 氣を放つなり、恰も此の如く、人もし神の保護と恩恵の上に自らを据、且
 確むるに於ては、人性の自力にて、決して得ること能はざる程の勢力と
 勇氣とを集むを得と、
 志ばし待よ、われ尙云ふべきとあり、それ宗教の人生になかるべかざる
 所以は、皆に人性の大法たるが故のみならず、幸福の原因たるが故のみ
 ならず、人物と勢力の秘密なるが故のみならず、吾人が宗教なくして活
 く能はざる所以は、吾人を獸類と異ならしむるもの實に此宗教なれば
 なり、
 わが兄弟よ、卿等は何をか人の獸類に異なる號として擇んとするや、恐
 く吾人の推理力、完全を望む能力、言語の能力を指して、卿等は示さん、こ
 れ誠に當然のことなり、されど人その目を天に擧げて、われ神を信すと

いひ更に跪きて彼を拜する時に、禽獸の屬は實に無量の下界に残さる
 なり、而して人の萬物に長たる眞地位は自ら神前に伏して、天にましま
 すわれらの父よと云ふの時に現るなり、然らば何んか故に、此生涯の旅
 程を行に此眼を土に附け、この思想を地に繋ぎ、以て知りつゝ、神を汚漬
 すことをなすや、これ人にあらざるなりとアルフレッド、デモツセーは
 絶叫せり、此は是れ全く人たるの價ひを放棄せるものなり、そは吾人を
 して禮拜を知らざる獸類と同格にをけばなり、
 嘗つて一人の青年あり、外國に留學し其の業を卒へて歸國したり、一日
 或家に至りて意氣驕然無神論を吐きて曰く、何んといふぞや、汝等も亦
 今に神を信するの腰抜仲間なるや、汝等が嘗て一步だに戶外に出しこ
 どなく、今日人類の大進歩に其先驅たる人の説をきかざりしや、明しと
 謂つべし、もし汝等が余の卒し如き學校を卒へ、余がきし如き教授の
 講義をきしならば、汝等は速やかに固陋なる觀念を棄つべかりしを

失敬なからと該家の主人は答へり、唯今此屋の中に、卿が所説に賛成する者二人あり、一はわが犬、一はわか馬なり、而して彼等は學校を卒業し、教授の講義をきくと云る嗚呼なる規則を踏ずしても、既によく其義に達せり而もこれが爲に驕ることをせざるの徳を備ふと、この答卑近なりと雖ども、其基礎とする所善しと謂つべし、そは近代の性理學者中、其聞最も高き人は、人間をも動物界第四の部門——人類門に屬すとの原則を定められたればなり、而して人類門の特徴は、則ち本心と此宗教心とにあり、されば正確なる學術上の證明に由りても、人の禽獸と異なる所以、道理動物たる所以のものは、此人性固有の宗教心にあるを知らるなり、かるがゆへに人にして宗教を有ざる者は、これ自ら人間たるの地位を墮落して、かの須臾にし失せ去る、獸類と比肩べんとするもの、實に人類中の怪物たるものなり、余はこゝに再言す、宗教なくして人生は到

底立ち行くべからずと、蓋し宗教なきの人生は、其面の表に不義と罪惡の記印を押すべければなり、さて是より正義のことを考察せんに、正義とは何んぞや、これ人の方に盡すべき務を盡すをいふなり、子たるものは、其出生の恩を父母に負ひ、又教育の恩を父母に負ふ、其負ふ處を返す、これ孝行なり、もし人此負債を拂ふこと、則ち此の義務を盡すことを否むに於ては、彼は皆に不孝の子たるのみならず、又不義不正の者たるなり、そは彼其隣——隣中の最も親しく、最も貴きもの——に其負ところを返さなければなり、

國民の其國に負ふ所あるは、又人の母に負ふところあるに同じ、そは國家は彼を國の内にも外に於ても保護ればなり、此る條理によりて、彼は國家に負へる所に比例し、其國家の名譽と榮光を保たんが爲に盡すべきなり、故に愛國心なる語は、其生國に對する人の宗教を意味するなり、且正義は人に其恩人に對して、報恩すべきを命ずるものなり、そは

恩を受くると同時に之に報ふべきの義務生ずればなり、

神は吾人の父にておませり、凡そわれらがかつて有しもの、凡そわれらが今有つものは、吾人これを神より受けしなり、神はわれらの生國よりも優り玉へり、そはわれらの國は地につける國なるも、神は天の父にておませばなり、而して何事よりも、神は吾人の最大恩人にておませば、吾人かれに對して適切な崇敬をなすにあらざんば、吾人は決して正義の人にはあらざるなり、無宗教にして此の世に生活ふ人は、猶孝行を盡さざる惡息子の如し、彼は又不良の民にして且恩知らずの不義人と謂つべし、無宗教の生涯は不義の骨頂たるなり、

ペーコン曰く、宗教は學術を護るの武器なりと、されど彼をして語をついけしめば、此は人生の戰場における、最良の武器なりと言しならん、他の大思想家更に此點を切言して曰く、もし世に宗教といふが如きもの無くんば、余が幸福となるものは唯一つのみと、其意を問へば、世に生れ

ざりしことぞ、其れなれど、宗教なく、其天の光なく、其希望なき時は、人生は意味もなく、目的もなきものとならん、宗教なくんば、世に心情の平和なく、本心の平和なるものなかるべし、何故、心情の平和なきかならば、人神より離るや否や、自力にのみこれ頼らざるべからざればなり、何故、本心の平和なきかならば、すべての惡しき行は悔恨もて成る長き鎖の環の如く存すればなり、これぞ是れわが兄弟——年若き人々よ、もし脚等未だ實驗せざりしならば——これぞこれ宗教の必要なる證據たるなり、

神の存在を疑ひながら、人生の道途に上りし人を見よ、ア、憐れ幸なき人なるかな、疑は彼の正面に躍り出で、彼の周圍に群れ集ふなり、昨日彼は神の存在を疑ひ、けふ彼は其疑の基礎たしかなるやを疑ひたり、而して其自らの實在をも疑ふに至るなり、彼は天に目をあげて、恐くはといふ、彼が生涯の歩行は、其一步毎に人と神との關係なる、大問題に相對す、

而も彼これを會得するを得ず、これを説明するを得ずして、これを其身よりとり除くと試むるなり、彼は全身を擧て物質の研究に投ず、而して彼の鋭智は或大ひなる發明をなすと雖ども、彼の靈魂は何の發明する處もなきなり、もし人あり、彼に告るに神のこと、又は宗教のことを以てする時は、彼答へて曰ふ、我をして我思ふまゝに一人ゆかしめよ、我は機關師なり、汝がいふが如きことに、意を注むるを好まざるなりと因て又彼に向ひ、されど卿は死すべき人にあらずや、何處より來り、いづくに行くを知りたるやと問へば、彼否など答ふ、さらば如何にして汝は心の平和を有ち得るぞや、それ生涯の大歸着を知らずして、如何で其思想慾望品行を支配することを得んや、かくて人の威嚴を示すの冠は遠く離れてたゞクリスチャンの頭のみ止まるなり、

平和の吾人より逃れし時は、喜樂も共に逃れたるなり、無宗教の靈魂には、すべての喜望は消失すべし、そは天より追出されたる懷疑論者は、同

じく地のもろくの愉快よりも退出さるればなり、喜と望は驚の前に遁るゝ小鳥の如くにげ隠れ憂鬱厭惡、失望は此處より出でん、

卿等もし懷疑の生涯を送らんとならば、思ふまゝに送るを得べし、されど卿等が凡ての勞苦、其生命すらも、電光の如く消失する者なるを思はずや、快樂をのみ日々の目的となす者は、其快樂すらも奪るべし、而して彼が齡すでにすゝみて、一步毎に墓に近き、而も何の目的も有たざる様を見よ、風の前の麥葉の如く散りしは、かの快樂にあらずや、散りてのち止まる者果して何んぞ、何にもなし唯空のみ、最愛したる者の死骸の傍に立ち開けたる墓に眼を注ぎつゝ、暗黒を望んで泣く者は憐れむべきにあらずや、大ひなる失望をもて彼はすべての哲學に問ひ、すべての學術に訴へ、天に叫び又地に呻くも、彼を慰むるものは只、恐くはその一語あるのみ、然るにア、何んたる事ぞ、世に最期の際まで目を光に閉て、嘗つて未來を思はざるの態をなす者あり、されど彼等他人を欺き得べき

も自らを欺くこと能はず、平穩なる表面の下に恐ろしき惑たる本心あるなり、又一方においては失望の餘り、自ら手を延て其生命を絶つ者あり、以て一片の石碑は其の身を永遠に隠し得べしと思ふ、而して見よ、彼等が活る神の手の中に落ち去り行くを、これ宗教を無する人の生涯の一斑のみ、されは無宗教にして世に活んこと、決して得べきにあらず、而して之を試んとするの人は、大灘の真中に破船したる船人の如く、もしくは沙漠の中に道を失へる旅人の如し、而して彼等が宿命てふ偶像に到つて助けを願はんとする時、此は蒼天高き處に坐を構へて、其無情なる顔を動しだにせざるなり、而して其結局は二途あるのみ、——曰く獸の如く生んか、曰く自殺の死を遂んか、わが兄弟よ、世に無神論者と稱するものも、宗教の必要は感じ居るなり、見よ無神論者も虚心平氣なる時は、余は宗教を有さずといはざるにあらずや、何んが故に爾るや、他なし、無宗教は普通の人情に反するを知らはなり、彼は、余は宗教を有さずとい

はずして、余は余の宗教を有つといふ、そもくこれ何んたる意ぞや、余は前に云へり宗教とは神と人との間に起る關係の總稱なりと、されば宗教は、人爲によりて存すべきにあらず、神より來るものを受け容か、但しは無宗教にてあるべきのみ、余は余の宗教を有つといふは、猶ほ余は余か好む處を以て宗教となすといふが如し、是れ甚だ便利なる考案なり、されど是れ宗教を蔑如するものなり、國法は守るに足らずといふ國民あらば、卿等は如何に彼等を處せんとするや、余は余が好む處によりて國と王とに事ふべしといふ者あらば、卿等之を何んとか云ふぞ、もし此主義を擴むる時は、盜賊は巡査に抗辨して、余かなすことに關せされ、神を拜して隣物の物を盜むは、余が擧げて以て余の宗教となす處なりと云ふを得べし、人は、此はわが宗教なりと云ふべき權利を有せず、唯神のみ云ひ玉ふ、此はわが宗教なり、汝等信じて之れに従ふべしと、宗教は吾人が由りて以て自ら修め、由りて以て審判を受くべき必然の大法なり、

人一刻といへども宗教なくして活くこと能はず、たゞ其最切要を感ずるは、死の苦みの時なり、苦みは凡ての空想を押掃ひ、凡ての迷妄をきり裂き、以て吾人を人生の眞實に復歸らしむるなり、されどわが兄弟よ、もし吾人の中に宗教より迷へる者あらば、其最期の際にて復歸るを待たせ、そは死の來ること不意なればなり、吾人をして全く憶斷と誤謬の縛より脱せしめよ、われらをして世の紛説より來る絆を振りきらしめよ、さらば吾人自由の心情もて、キリストの輕き軛をとり、以て無上の平安を見出さん、ア、吾人が信仰の始め又終なるキリスト——道なり眞なり生なるキリストは、吾人が永遠の安慰たるなり、

ドワイド、ライマン、ムーデー

ムーデー氏は一千八百三十七年三月五日を以て亞米利加マサチューセツト洲ノースフールドに生る、幼にして父を失ひ、母の手に人となる、家道の意の如くならざると、氏の性癖讀書を好まざるとにより、氏は僅かに卑近なる普通教育を了へたる而已、始め商業に志しけるが、後宗教上の熱心禁ずべからざるに至り、遂に身を投じて傳道に従事す、氏の説教は恰も對話の如く、音聲態度極めて自然に出づ、然れども其身軀の偏強にして、音吐の絶大なるがために、滿場に響き渡らずと云ふことなし、氏引例に長じ、比喻に巧に、而して平易の言語を以て、明拆の條理を述べ、且つ深く人情の微を穿ち、人心最奥の琴線に觸る、目に一丁字なきの聽衆と雖も亦皆醉へるが如し、氏極めて統御の才に富む、氏の下に働ける人々の中には、神學博士あり、老練なる牧師あり、大學教授あり、皆氏を仰

ひで首領となし甘んじて其命に奔走すると云ふ。氏曾て生計に意を用
みず、何れよりも俸給を受けず、只だ天父と氏を知る人の供給に一任す
る而已。氏又曾て宗派的の運動をなさず、一意基督の福音を宣傳するを
以て己が任となす。人氏を呼んで世界最大の傳道者なりと云ふ。蓋し過
言にあらざ矣。

信仰と勇氣

ムーア

信仰は吾等が神のためになす凡ての働きわざの基もとなり、吾等は未だ曾て信
仰に満みてる人にして其祈禱いのりに失望しつぱうせるものを聞かざるなり。不信仰は
未信徒みしんていに取りてのみならず、吾等基督教徒きりすとに取りても大なる敵てきたるな
り。不信仰はキリストきりすと在世まゐる時に於ての如く、今も尙ほ神の恩賜めぐみを拒こま
んとす。吾等は聖書せいしょ中にキリストも或處あるところに於て其民の不信仰のため
多くの大なる業わざを爲し能はざりしと記せるを知る。果して然らむには
吾等神の民たるもの不信仰にして怎いかて何事なにごとをも爲すことを望のぞむべ
けんや。われ思ふに神の聖業せいぎを妨げ得る者は神の子供等のみ、不信者、無
神論者、懷疑論者しんろんしやうの如きものにはあらざるなり。若し何處いづこにても吾等信
徒しんたい全ぜん體たいの間に強き信仰と希望のぞみあらむには常に大なる聖業せいぎの行はるべ
きなり。

希伯來書に、信仰なくば神を悦ばすこと能はず蓋は神に來る者は神あるを信じ且つ神は必ず己を求むる者に報賞を賜ふものなるを信ずべければ也と記せり。是れ始めて道を求むる者にのみ告げらるゝにあらざ、信徒なる吾等にも關するなり。吾等は皆な我が同胞と凡ての人の救はれむことを望み、亦た自ら復興せむことを熱望するものなり。されば請ふ、今吾等をして熱心に彼を求めしめよ、吾等をして大なる信仰を有せしめよ、彼は己れを求むる者に報賞を賜ふべければなり。

余は幼時余が住みける新英蘭の山々の春に逢ひて積雪の漸く融けたりし頃、一種の玻璃もて大陽の熱を取り野に火を放ちたることを記憶す。蓋し信仰は天より神の火を呼び降す玻璃たるなり、カルメル山上に天火を呼び降し其供物を焚きたるは、是れエリヤの信仰にあらざや、吾等は今も尙ほ同一の神を有す、若し信者たるもの各單純にして強固なる信仰を有せば、以て世界を燃すことを得べきなり。

請ふ希伯來書第十一章を見よ、信仰によりて如何に大なることなされたるよ、即ち記して曰く、かれら信仰によりて諸國を服し、義を行ひ、約束の者をえ、獅の口を踏み、火勢を滅し、劍の刃を避け、荏弱よりして剛強くせられ、戦争に於て勇ましく、異邦人の陣を退かせたり、婦人も亦死たる者の復活を受けしことあり、亦ある人は最も愈れる復生を得べき爲に酷刑せられて免さるゝことを欲まざりき、また或人は嘲笑をうけ、鞭たれ、縲紲と囹圄の苦を受け、石にて撃れ、鋸にてひかれ、火にて焚かれ、刃にて殺され、綿羊と山羊の皮を衣て經あるき窮乏くして艱苦あり、世は彼等を居くに堪へず、彼等は曠野と山と地の洞の穴とに周流たり、彼等は皆信仰に由りて美名を得たれども、約束の所を得ざりき、そは彼等も我儕と偕ならざれば成全ふること能はざるために更に愈れる者を神豫め我儕に備へ給へり、と誰か是文を讀みて感ぜざるものあらむや、且つ見よ、婦人も亦死たるもの、復活を受けしことありと思ふに、汝曹の

中に其子の放蕩のために憂愁に沈めるものも多からむ。然れども汝曹若し誠まことに信仰を有せば、恰も死より甦りしもの、如く、再び彼を立ち歸らし得べきなり。

吾等は既にアベル、ノア、アブラハム、エリア、及び其他の祖先預言者等が如何に大なる信仰を有せしかを聞きぬ。然れども彼等は遠き過去の時代にありて僅かに朦朧たる微光を認めしに過ぎず、吾等今の時に生存して主の十字架じゅうじゆうかと其復活に就きて爛々たる光輝を仰ぎ見る者、怎か彼等に優るの信仰なくして可ならむや。吾等一たび回顧して主が吾等を救はむがために其血を流し玉ひしことを思はば、吾等は彼の力を頼み奮つて世と戦ふべきなり。蓋し神は大なる聖業を爲し玉ふべければなり。

卿等記憶するならむ。曾て百夫の長其僕の病の癒されんことをキリストに請ひ、キリストの其近くに來り玉ひし時、使者を遣はし、汝を家の内

に入れまつるは畏れ多し、たゞ一言を出し玉はば、僕は癒えんと云はしめたるを、蓋し彼はキリスト世界を創造するの力を有し、たゞ光あれど一言を以て世に光を與へ玉ふの力を有し玉はば、一言をもて其僕の病を癒し玉はんことは誠まことに易々たることなりと信したるなり。聖書は記して主其使者の言を聞きて彼の信仰を驚き玉へりと云へり。吾が友よ、主が吾等の中に大なる聖業を爲し玉はむがために、今吾等をして是の信仰を有せしめよ。

ヨシユアとカレンは信仰の人なりき、彼等はイスラヘルに取りて不信仰なる全營と他の十人の間隙を合せたるよりも貴きものなりき。モゼは敵國を伺はしめんためイスラヘルの中より重立ちたるもの十二人を撰みて遣はしぬ。彼是三十日も経たるの頃、彼等は二様の報告を齎して還りぬ。彼等皆其土地の豊饒なるには一致したれども、他のことには就きて相分れぬ。十人の者どもは暗りぬ、吾人彼等を征服せむこと逆も

望み得べきにあらず、吾等は其處にアナクの裔なる數多の巨人の住へるを見たりと。思ふに彼等が歸へり來れる其夜全營の人々皆な此十人の者等に集ひて其報告を聞きしならむ、而してヨシユアとカレブに聽かむとて集へるものとは極めて僅少なりしならむに時として人は眞實よりも欺詐を信せんと欲すること證なけれ。斯く多く不信仰なる人々は十人の許に集まりぬ、而して彼等の一人巨人の物語をなし、吾等は仰ぎて彼等の面を見ざるべからず、彼等の歩を移す時大地は震動す而して山々谷々到處に彼等は充滿せり、また大なる都府ありて城壁をもて圍みぬ、われら怎がでか是を征め取ることを得んとぞ述べける。是に反し、ヨシユアとカレブの目には是等の巨人も侏儒の如くに見えぬ。彼等は神が如何にバロの手より彼等を拯ひ紅海を通して彼等を導き玉ひしかを記憶したりき。また如何に彼が天より食を與へて彼等に食はしめ、如何に曠野に於て岩より水を出して彼等に飲ましめ玉ひ

しかを忘れざりき。こゝをもて彼等は神若し彼等と共に在さんには斯國を取らむこと掌を反すよりも易しと信じける。されば衆に語りて、吾等一擧して是を取らんのみ、何の恐るゝことかはと述べぬ。

顧みて思ふ、今日教會の狀態は如何、爰に十二人の信徒あらば、其十人は即ち巨人と城壁と途中の困難とを見て逡巡するものにあらざる乎。彼等曰ふ、吾等は是を爲すこと能はず、若し其處に斯の如く多くの醉漢、放蕩兒、無神論者、反對家のなかりせば、或は是を能くすることを得べけん。吾等は斯の如き輩の言を意に介せずして可なり、吾等若し神を信せば、能くキリストのために地を畧することを得べきなり、神は信仰を嘉し玉へばなり。

諸又たわれらは以上に擧げたる聖書の歴史によりて、信仰と勇氣の離るべからざるを知るなり、カレブとヨシユアが極めて勇敢なりしも、其篤き信仰を有したるがためなりき。古より大に神のために用ゐられし

者は皆な大勇の人なりき。而して吾等若し信仰に充つれば以て恐れざることを得べきなり。教會今日の通弊は信徒各神が己れを用ゐ玉はんとするを信ぜずして多く恐怖を懐けること是なり。或種類の人々は主のため自ら勇進して事を爲すこと、ては絶へて無く、人の進みて爲さんとするを見ては、是れ決して賢き方法にあらざ、是れ到底遂ぐべからずと云ひ様々の困難を並べ立て、人をして沮喪せしむることを爲すなり。吾等今日の急務は斯の如き卑怯未練なる不信仰者に頓着することなく勇を鼓して猛進する所の信仰と勇氣たるなり。

神が昔しイスラヘル人をミデアン人の手より救はんするに方りて、其大將キデオンに示し玉ひしことを見よ。キデオンの配下に集ひたる軍勢の数は僅かに三萬二千人なりき。是を彼のミデアンの十三萬五千の大軍に比較したる時は彼れ其軍の餘りに少數なるを思ふて、其成功如何と氣遣ひたりしならむ。然れども主の聖旨は全く是に異なりき。主キ

デオンに曰ひけるは、汝の軍勢は多きに過ぎたれば、其中にて怖れて去らむことを願ふ者あらば、是れをして其家に歸らしめよ。斯くてキデオンの營中に其命を布くや否、實に二萬二千の兵士等は立ちに其軍を脱して去りぬ。キデオンの是を見たりし時、其心中は如何なりしならむ。若し集會の席に於て聽衆の三分の二も出で去りしならば、汝曹は是を何ぞか思ふべき。然るに主は更に曰ひけるは、キデオン、汝の軍は尙ほ多きに過ぐれば、彼等を川の邊に導びきて水を飲ましめよ。手に抱ひて飲むものは是を留め、下伏て飲むものは是を去らしめよ。斯くして其中の九千七百人は取除かれ、跡に残りし者はたゞ僅かに三百人のみなりき。然れども此少數の者は即ち其心神と共にあり、其聖名のために死を怖れざる勇敢の輩にてありき。されば他の動もすれば恐怖と疑懼の種を蒔きたりし大多のものよりも勝りて力あるものなりき。げに一軍の志氣を沮喪せしむるもの彼の疑懼を懐ける兵士に過ぐるものならず。是

と等しく教會の精神をして萎靡不振ならしむるもの彼の希望と勇氣とを欠ける一群の儕輩に過ぐるはなきなり。偕其後キアオンは己れに殘されし僅々三百人の兵士をもて苦もなくミアン人を打ち亡ぼしぬ。是れ固より彼等の力にはあらず主の劍なりければなり。斯の如く教會に於ても恐怖を懐けるもの、不信仰なるものは跡に残り、たゞ勇氣と信仰に満てるもののみ行きて戦かふを可とす。若し吾等主の名に由り其力を頼みて行かむには事として遂ざるはなきなり。

モ一ゼ此世を去りて天に行かむとするに際り力を盡してヨシユアを勵まし、是に力を添へたりき。彼自ら約束の地に入ること許されざりしに關らず、更に一點の嫉妬心をも有せざりき。彼れピスガ山の頂きに上り、其土地の極めて美しきことを知り、ヨシユアを勵まして進みて其土地を略せしめたりき。モ一ゼ逝きて後或章に神は三度迄もヨシユアに向ひて汝勇敢かれと曰ひしと記せるを見る、又た彼を勵まして汝の

生涯の間汝に敵し得るもの一人もなかるべしと曰ひき。其の後直ちにヨシユアはエリコ城の圍を始め、彼が其周圍を巡れるに當り、其手に劍を抜き持ちて彼の前に立てる人を見たりき。彼れ更に恐るゝ處なく汝は我等の身方なるかまた敵なるかと問ひぬ。彼が勇氣は直ちに報ひられぬ、其人答へて我は主の軍の長として今來りぬと云ひき。げに彼はヨシユアに力を添へ彼をして勝しめんがために來れりしなり。吾等は神の常に勇氣あるものを用ゐ玉ふを知る、恐るゝものは決して其用ゐ玉ふ所にあらざる也。

吾人は男女に關らず、失望の人にして主のため大業を爲したるものあるを未だ曾て聞かざるなり。若し勇氣の挫けたる教職ありて講壇に立たむか、其氣満堂に感染して忽ち全教會をして失望せしむるなり。安息日學校の教師に於けるも亦た斯の如きなり。勇氣を欠ける人を神の用ゐ玉はざる怪むに足ざるなり。

余は數年の間説教して何の結果をも得ざりし或人の曾て余に語りし
 ことを記臆す、彼は常に其會堂に行く道途にさへ其妻に語りて、人々の
 余が説く所を信ぜざるは余の知る所なりと云ひぬ、斯る有様なれば其
 働きの上に何等の祝福をも受くる能はざりしは固よりなり、後ち彼れ
 漸く其過りを悟り熱心に神の祐助を仰ぎ且つ自ら勇氣を奮ひ興しぬ、
 是に於て始めて上より祝福を受くることを得たりと、夫れ汝の信仰の
 如く汝になるべきなり、此人の始め何等の信仰と希望を有せざりしと
 きは亦た何をも得ざりき、冀はくは吾等をして勇氣を有ち神に頼りて
 大事をなさむことを望ましめよ、

ペテロが曾て或人に問はれて主を否みし時と、其「ペテロ」の日の
 有様とを比較せば誰か其相違の甚しきに驚かさむ、彼は一僕婢の詰
 問により殆むど氣を失ふまでに怖れたりしなり、而て誓ひと詛とをも
 て其主を拒みたりき、人が其信仰と勇氣を失へる時に其墮落の如何に

恐るべきかを見よ、然れども彼は後に至りて其勇氣を回復しぬ、「ペテロ」
 ユステの日に於ける彼を見よ、若し嚮きに一言の問ひをもて彼を戦慄
 せしめたりし彼の婢の其席にありて、使徒行傳に記されたる驚くべき
 説教の彼の口より出づるを聞きしならば如何、余思ふに彼女は「エルサ
 レム」中に居りし人々の中に於て最も大なる驚愕を興せしものならむ、彼
 女は言ひしならむ、われは僅か數日前彼を見たりき、而して其の時彼は
 「キリスト」の弟子と呼はるゝことを怖れて戦慄つゝありしに、今彼は其
 「キリスト」のために大膽に立ち曾て愧づる色なきはそも何たる事ぞや
 と、げに神は「ペテロ」の日に彼を用ゐて大なる事をなさしめ玉ひ
 き、然れども彼は「ペテロ」が其卑怯を悔ひて、信仰と勇氣を回復するまで
 は是を用ゐ玉はざりき、斯の如く今も我等の信仰と勇氣の欠くる時に
 神は是を顧み玉はざる也、
 數年以前のこと余は數週の間失望に陥いれることありき、特に或る安

息日に於て余は其説教に力なきを感じぬ。月曜日に於て余は太く失望し己が不成功に就きて彼是思ひ廻らし居ける際、余が配下の安息日學校にて大人の組を受持つる一青年の訪ひ來るに會しぬ。余は此時谷の底に陥り居りしに引換へ、彼は實に山の頂上にありしなり。彼曰ふ、昨日御働きの模様は如何にありしや。余曰く、甚だ不成功にてありき。余は太く落膽したるなり。君は如何なりしや。彼曰く、オ、余は實に好結果を得たりき。未だ曾て昨日の如き日はあらずりき。余曰く、君の題は何如。彼曰く、ノアの生涯と其人物と云へるにてありき。君は曾てノアに就きて説教し玉ひしことありや。ノアの傳を研究し玉ひしことありや。余未だしと答へければ、彼は語りて、君若し今までは是を研究し玉はざりしならば、今より是を始め玉ふては如何。君のため甚だ御利益ならむと信ず。げにノアは驚くべき人物に候とぞ云ひける。若人の去りて後余は聖書と他に二三の書物を取りノアの傳を研究し始めぬ。未だ幾ならずして百二

十年の間勞苦して其家族の外には一人の信者をも得ざりし人のありきと云ふこと、及び彼は是にも尙ほ失望せざりきと云ふこと、余が心に浮びぬ。是に於て余は其聖書を閉ぢぬ。而して余が心裏の迷雲ははれ渡りぬ。後ち余は立ちて晝の祈禱會に出席しぬ。余が行くと間もなく、イリノイス州の一邑より來れる者なりと名乗て起立するものあり。昨日百人の青年改悔者を得たる旨を語る。余は是を聽き感ずること一方ならず。若しノアをして是を聞かしめば如何に思ひけん。彼は其働きに對して斯の如き結果は夢にも見ざりしなり。其後また余が直ぐ後ろに立てるものあり。見れば其手は震へ居れり。彼は戰慄せるにやあらむ。呼びて願はくは余がために祈禱せられよ。余は信者とならむことを熱望すとぞ述べける。ア、ノアをして是を聞かしめば如何。彼は一人の神の恵を求むるものを見ざりしなり。然れども尙ほ彼は失望せざりき。願くは吾等をして恐怖と疑惑の雲霧を拂はしめよ。反へつて神によりて大膽勇

敢ならしめよ。
 請ふ吾人が今日有する所の便利をもて、是を初代の信徒に比せよ、彼等
 が屢遭遇せざるを得ざりし幾多の障害を見よ、彼等は如何に屢其血を
 もて彼等が證明に印せざるを得ざりしよ、嘗に是等の時代のみならず、
 日耳曼に於てルーラルの四邊を取圍みたりし暗黒の如何に甚しかり
 しかを見よ、蘇格蘭に於てマヨン、ノックスの遭逢せし困難の如何に大
 なりしかを見よ、抑も亦たウエスレー、ハウイツト、フヒールドの時代に
 於ける英國の如何に暗黒なりしかを見よ、彼等は凡て斯の如き非常な
 る困難障害と戦かひて意氣益盛にして更に怯るゝ所なかりき、されば
 こそ神の祝福を受けて後代に垂るべきの偉績を奏せしなれ。
 吾等は實に幸なる哉、以上云ふが如き大なる困難と障害とを有せざる
 のみならず、彼等が曾て有せざりし否、夢想だにせざりし、幾多の便利を
 有するなり。マヨン、ウエスレーは大西洋を横切るために數月を費やし

ぬ、然れども吾等は僅か數日にして是を爲し能ふなり、是等の時代の印
 刷術と今日のものとの比較せよ、吾等は其説教を印刷して地球の隅々
 へまでも是を行き渡らしむることを得るなり、其他電信は如何、鐵道は
 如何、是皆吾人が有する大なる利便にあらずや、實に吾人は生れて昭代
 の民たるものにあらずや、尙ほ何を苦んでか失望と落膽とをすること
 のあるべき、願くは吾等をして勇を鼓し氣を振ひ、凡て是等の便利と機
 會とを利用して大に主の聖國のために盡さしめよ、主は喜んで吾等を
 用ゐ玉ふなり。
 人或は老衰其他の事情をもて、自ら主のため盡す能はざるを嘆ずるも
 のあらむ、然れども人老若に關らず、何人にても人々を集會の席に導き
 來ることを得べきなり、若し是を爲すことをも得ざれば、言語をもて人
 を鼓舞獎勵することはなし得るならむ、余が講壇より下り來れる時折
 々年太く適みたる老人の余が手を握り、皺枯たる聲にて神の君を祝せ

んことを願ふと云ひて余に挨拶することありたゞ此一言余に取りて如何計りの奨励となるよ。汝若し人を導びく能はずば汝の若き友の心を鼓舞せよ。此外汝はまた彼等のために祈ることを得べきなり。常に批評され過失を見出さるゝことへの代りに同情をもて祈りさるゝことは、働く人々に取りて如何に大なる力にてあるよ。

終りに臨み爰に一の物語りをなさむ。或處に大火の砌四層樓の一室に取残されたる小兒あり。消防夫の一人是を救ひ出さんとして梯子をかけたに近づきけるが、火炎の勢益々盛にして、風さへ吹き添へければ、彼は止を得ず引返さんとするの風情なりき。下に見守る群集は心も心ならずありけるが、其の中の一人大聲に呼びて、彼れに喝采せよ。彼れに喝采せよと叫びぬ。此相圖に隨がひて一度に喝采の聲は響き渡りぬ。彼は是によりて新しき勇氣を得、逆捲く煙と炎の中に身を躍らし、遂に難なく小兒を救ひ出して歸りぬ。汝若し自ら亡ぶる人を救ひ能はずんば、せめ

ては是をなす人のために祈り、是に力を添へよ。汝若し斯くなさば神は必ず其業を祝し玉はむ。

爾曹は世の光なり

「賢き者は蒼穹の光の如く耀き、人をして正義に歸せしむる者は限りなく星の如くに輝かむ。」

是れ其當時地上に生存へし最も經驗に富める一老人の吾等に與へし證言なり。彼は其弱年(或人々は其未だ二十歳に)の時擄へられてバビロニに來りぬ。此若きヒブ人の囚へられて此國に來りし時に當り、若し人ありて、當時の凡ての大なる人物、諸國を征服して凱歌を奏したりし英雄等も、將來此若き奴隸のために顔色なきに至らむと云ふものありとも、思ふに一人も是を信ずるものなかりしならむ。然れども歴史に於て後世を照すに至りしもの、當時の人にして此人に優れるものは一人もあらざりしなり。彼はチブカドチザル、ベルシヤザル、サイラス、ダリオス、其他當時の大王等に優りて輝けり。吾人は彼が何時の頃神に事ふるに至りしやを知らざれども、彼が預言

者エレミヤの感化の下に人となりしと推することを得るなり。何様彼は敬虔にして俗を離れたる非凡の人士によりて導かれたらむと思はる。諸吾等は今の人が屢己が働き場の困難に就きて語るを聞けり、彼等は皆な己が地位をもて特別なるもの、如く言ひなすなり。斯る人は宜しくダニエルが置かれし地位の如何なりしかを思ふべし。彼は單に奴隸のみにはあらざりき、ヒブリヤ人を痛く賤しみたりし國民に囚禁されしものなりき。而して彼は其國語に通せざりしなり。彼の身邊を圍繞る者は皆な偶像信者にてありしなり。彼は斯の如き地位にありて其光りを輝かすべく始めたりき。而して若き時より生涯の終りに至るまで曾て變ずることなかりき。蓋し深く世に感動を與へ最も著るく世に輝けるもの、多くは皆な暗黒の中に生存したりしなり。ヨセフを見よ、彼はイシマエル人により奴

隸として埃及に賣られたりき、然れども彼は常に神と共にありて其光りを輝しぬ。其家郷を離れ異教徒の中に置かれし故をもて其信仰を失はざりき。モーゼを見よ、彼は金光燦爛たる埃及の宮殿を去り、賤しき嫌はれしイスラヘルの人民に投じぬ。若し人に困難の地位なるものありとすれば、彼の地位は是なりしなり。然れども彼は神に背かざりき、依然として其光を輝かしぬ。

エリヤはいと暗黒なる時代の世にありき、國民擧りて偶像教に溺れ、ハブ及び其妃を始め全朝の人皆痛く眞神を拜することに反對せり。然れどもエリヤは堅く立ちて動かず、其暗き世に照り輝きぬ。

「ペテラスマ」のヨハナは如何彼の世も亦た他の豫言者の時代の如く、世は黯澹として濛々たる雲霧の掩ふ所にありつれども、曠野の説教者の名は十八世紀を経るの今日益譽れ高く、教會のあらむ限りは忘れざる也。

抑も亦たパウルが如何に神のために輝きたるかを見よ、彼の神のことを語り十字架に釘けられしキリストを宣べ傳ふるに當り、人々は皆な其教へを嘲り笑ひぬ。當時の大なる人々は彼を賤しき天幕製造人として侮りぬ。彼は斯る世に處して只管福音を宣ぶるに勉めけるが、今に至り彼の名は赫々として隠れなきなり、而して其反對者等の名は彼と關係したることによりての外は更に世に知らるゝことなきなり。

蓋し人の世に耀かむことを望むは疑ふべからざるの事實なり、吾等は容易に其事實を認め得べし。試に實業社會に入りて、彼等が如何に其同業者を凌いで、其上に立たんとするかを見よ。試に政治社會に行き如何に彼等が大ならんとして勉むるかを見よ。試に學校に行き其生徒等の間に如何に劇しき競争のあるかを見よ。彼等は皆な級の頭たらむと欲するなり。而して其中の一人是を得れば、其母は喜びてわが子が學校に於て如何によく出來たるか、如何に多くの賞與を得たりしかを、近隣の

人々に誇り顔に語るなるべし。其他軍人の社會にても遊戯の仲間にて
も、苟も社會のあらむ所此事實の表はれざるはなきなり。
然れども斯の如くにして、能く其目的を達し世に輝き得るものは眞に
僅々の數なりとす。大統領撰擧のため四年毎に我が合衆國到る所に大
なる騷動あり、此騷動はひいて六ヶ月より一ヶ年に至ることあり。候補
を争ふ者の數亦少からずと雖も、是を得るものはたゞ一人而已、他は皆
な失意の人たらざるを得ざるなり。然りと雖も、神の國に於てはいと弱
くいと小さき者と雖も、若し是を欲せば輝くことを得べきなり。而して
たゞ一人而已より賞を得る能はざるにあらず、若し是を欲せば凡ての
人皆是を得べきなり。
前に掲げし句に政治家は空の星の如く輝かんとは記されざりき。ペ
ロンの政治家等は逝きぬ、而して其名は皆な忘られたり。また高位なる
ものは輝かんと云はれざりき。人爵は忽ちにして忘れらるべきなり。

ベッド・ホルドの補鑊匠なるマヨン、ペンヤンの名は當時の貴族等の
名よりも優りて讃へらるるにあらずや。彼等は己れのために生活せり
されば其記憶も忽ちにして失せぬ。然れども彼は神と人のために生き
ぬ。故に其名は永遠に涉りて芳はしきなり。また商人は輝くべしとも見
えざりき。勇士は輝くべしとも見えざりき。ダニエルの時代にありし幾
多の富豪等は如何になりしや、抑も亦たネブカドネザル大王は如何に
なりしや、たゞダニエルに關係したることの外は更に知られざるなり。
是を預言者ダニエルの二十五世紀を経るの今日愈其光りを増し、尙ほ
教會の存せん限り益々輝かんとするに比して如何ぞや。
地上の榮華の凋落すること何ぞ夫れ速なるや、今より僅か七十五年前
に當りてはナポレオンの勢威はげに全地を震動する計りなりき。如何
に彼が暫らくの間地上の英雄として輝きたるよ。然れども未だ數年な
らざるに此偉大なる戰勝者は衰爾たる一孤島に幽閉され、憐むべき失

意の囚人として逝きぬ。而して彼れ今何處にあるや、世は殆んど彼を忘れ果てむとす。誰か今の世に當り、ナポレオン尙ほ其心中に生けりと云ふものあらむや。驕がへりて輕蔑され、嫌惡されたる彼のヒブリウの預言者を見よ。彼は其敬虔と熱信のために獅子の穴に投せられたり。然れども如何に彼の記憶が今に於て尙ほ新しきよ。彼が神に忠信なりしため如何に彼の名が愛慕され尊敬さるよ。

今より十七年前大博覽會の砌余はパリに在りき。時しもナポレオン三世全盛の頃にて、彼が通行の際市街は曷采の聲にて溢れぬ。然れども未だ幾何ならずして、彼は其位より下され、其國を追はれ、憐れ異境の客となりて死しぬ。而して彼の名は今何くんかある。僅かに記憶の中には是を存するものも愛と尊敬とを以て是を思ふものとは絶て是なしと云ふも不可なきなり。此世の驕りと榮華はげに東の間の夢にしていと空しき物にこそあれ。若し我等賢からむには、己れを棄て、此世の譽れと

榮華を求めず、たゞ神と永遠のために生くべきなれ。箴言に曰く、靈魂を得るものは賢きものなりと。若し何人にも敬虔の生涯と良き模範とをもて、一の靈魂にても神に歸せしむることあらば、其生涯は失敗ならざりしなり。彼等は其當時の凡ての大なる人々よりも勝りて輝くべきなり。蓋は彼は永遠に流るべき川の源を開きたればなり。

神は吾等をして其光りを輝かさしめんがために、吾等を此土に残し玉ひしなり。賣買し、利を得財を積み、又は世の地位を得よとにはあらざるなり。若し吾等基督の信徒ならむには、此世は吾等の住家にあらず、吾等の住所は上にあるなり。神は吾等をして暗き世を照らさしめんために、吾等を送り玉へるなり。曾而キリストは世の光として來り玉ひぬ。然れども人々は其光を消しぬ。さればキリスト天に昇り玉ふ前に於て、弟子等に曰ひけるは、爾曹は世の光也。爾曹は吾が證人也。行きて世の亡ぶべき民等に福音を宣へ傳へよ。